首巻き春貞
小石川養生所始末
松平春貞一代記
一
松田純一
mactechlab.jp

首巻き春貞

小石川養生所始末

表紙デザイン　junichi Matsud

目次

第一章　春貞という男　四頁
第二章　吉宗襲撃　四五頁
第三章　金魚の糞　一〇三頁
第四章　密命　一二四頁
第五章　幸江絶体絶命　一九三頁
第六章　春の訪れ　二二八頁

第一章　春貞という男

一

木枯らしが吹き始め、人々の暮らしに師走の訪れが感じられる享保七年(一七二二年)十二月初旬、同年一月に目安箱への訴えをきっかけとした小石川養生所開設が間際に迫っていた。

養生所は師走中にここ、幕府の薬園である小石川薬園内に開設のため、にわかに人の出入りが激しくなっていたが、そのこけら葺きの建物から粋な首巻きをした男が着流しにどてら姿で軽快に飛び出てきた。

若い男の身のこなしは武士のようだが、無腰(むこし)で武器らしい物はなにも身につけていなかった。

「寒くなったねぇ、春(はる)さん」

建ったばかりの小さな表門の周りを掃いていた老爺が男に声をかけた。
春さんと呼ばれた男は、
「精が出るな、とっつあん。腰はもういいのかい」
と老爺へ笑いかけた。
「赤ひげ先生のおかげだ、こうして働けるのは…」
老爺は掃き掃除の手を休めず顔だけあげて大きな声でいった。
「そりゃあよかった」
養生所から出てきた男は年の頃なら二十歳も半ばくらいだろうか。養生所の肝煎(きもいり)職に任ぜられた医師小川笙船(おがわしょうせん)の友だということはこの辺りで皆承知のことだった。
肝煎職とはいまでいう所長である。
その小川笙船が江戸の町に住む貧しい病人の現状を目安箱へと訴え出たことが八代将軍吉宗の目に止まり、小石川養生所開設が命じられたのだった。
このとき小川笙船五十歳。春貞を友というには歳が離れていたから中には、
「春さんは赤ひげ先生の隠し子でないかい」

などと埒もない噂も流れた。
小川笙船はその細面の顔に束髪および顎ひげがあり、その顎ひげが些か赤みを帯びていることから「赤ひげ先生」とも呼ばれていた。また俳諧を嗜み、若い時分にはあの松尾芭蕉とも交流があったほどの知識人、文化人だった。
春さんと呼ばれた男は養生所に寝泊まりするかと思えば数日顔を見せないこともあり、何者なのかは誰も知らず、噂だけがひとり歩きしていた。
この数ヶ月、笙船を助けて養生所開設にかかわる雑事を請け負っているという話しだが、具体的になにをするためにここにいるのか、笙船以外誰も知らなかった。
しかし薬園の水やりをなるべく人手がかからないよう工夫したり、多種多様な薬草を分類しやすく容易に取り出せるようにと一部の引出しが上下に移動するおかしな百味箪笥（ひゃくみたんす）を作ったことなどから、薬園内では重宝されていた。
「ところで、春さんは何しておまんま食ってんですかい」
首巻きを直している男に老爺が聞いた。
春と呼ばれた男の名は春貞といったが、小川笙船が「春さん」と呼ぶので養生所

出入りの多くには春さんで通っていた。
春貞は人当たりが良くいつもにこにこしているからか、女衆(おなごし)はもとより知り合ったばかりの人たちからも遠慮なく声がかかった。
「俺の生計(たつき)かい。なに、これを泣かして糊口(ここう)をしのぐけちな男さ」
振り向きながら左手の小指を目の前に立て、にっこり笑うと妙に憎めない男だ。
その端正な面なら確かに女にもてそうだが、どこか育ちの良さも漂っていたから、本人のいいぐさをそのまま鵜呑みにする者もまたいなかった。
足早に出て行く春貞の背を老爺はじっと眺めていた。
さらに春貞が注視されたことがある。それは粋な染めを配した手ぬぐいで首を巻いていることだった。
それも時に二種類の柄を合わせているのが粋だったがこの時代、防寒にしても手ふきにしても首になにかを巻き付けるのは隠居した老人というのが常だったから、まだ三十路(みそじ)にもなっていない男の襟巻きは尋常ではなく目立った。
とはいえさすがに面と向かってその理由を本人に問う勇気のある者はいなかった。

そんなわけだから誰からともなく「首巻き春さん」と呼ばれ始めてもいた。
看護人や賄(まかない)中間たちの中には、
「まさか相対死の失敗傷でも隠していなさるのではないだろうね」
などと噂されることもあったが、それはちょうどこの年に八代将軍徳川吉宗(よしむね)は退廃的な風潮を是正するため、心中を相対死という名称で禁令を出したからだ。
近松門左衛門の人形浄瑠璃(じょうるり)の影響で心中が流行したからでもある。
要は不義で相対死をした者は死骸を取り捨てて弔わせず、もし双方存命ならば三日晒(さらし)のうえ非人に落とされた。
だから人々の記憶に相対死にという言葉がこびりついていたのだ。
しかし春貞の明るさは、少なくとも表面的な明るさは相対死するような男には誰しもが思えなかった。

春貞が向かったのは養生所からも遠くない金杉水道町にある御用聞き、定吉の宅だったが表通路側は女房のお勢(せい)がきりもりしている粗末な飯屋風となっていた。

御用聞きである定吉のお役目には昼夜がなかった。
したがって朝夕と決まった時刻に賄いができるはずもないし、親分がそうなのだから子分連中は夜通しお役目で駆けずり回ったりという毎日が続く。
定吉の女房お勢はその都度子分たちの世話をして、昼夜区別無く飯の支度をするのが日課だったが、大がかりな捕り物の前後になると子分たちだけでなく時には同心たちまでもが定吉とお勢の人柄に惚れ、家へと押しかけた。
なにしろ近隣には飯を食べさせる場所もなかったし一休みする場所もなかったからだ。
そこでお勢の発案で家屋の表通り側を常時お役目の人たちの控えの場所とすることにした。
土間に空いた酒樽をいくつか逆さにならべ、樽と樽との間に厚めの杉板を渡して大勢が座れるようにした。そしてときにはその上で仮眠をとる者もいた。
まるで番小屋代わりのようだった。
なによりもここは定吉親分の宅だ。安全だしここに関係者が集まることで情報が漏れる恐れも少なくなった。
そして、動けば腹も減る。

お勢は捕り物の機会があれば常に二十人や三十人の男たちがやってきても簡単な食事を提供できるようにと工夫し、また与力や同心の旦那たちが回ってきた際にはそっと酒を出すこともあった。

実はこの時代、まだ居酒屋とか飯屋といった気の利いた店はほとんど登場していなかったが、定吉の店はその先駆けだったともいえる。

またその戸はお役目柄ほとんど常に昼夜解放されていたから、いつしか近隣にも知られ、夜遅くなった仕事帰りの男たちが御用で入れないとき以外、立ち寄って腹を満たし小銭を置いていくようになった。そして道行く人たちの視線を遮る目的や日射しを防ぐため、どこから持ってきたのか無地の暖簾がかかっていた。

春貞はその暖簾を左手で煽りながら声を上げた。

「ごめんよ。親分はおるかな」

その声に顔を出したのが定吉の娘お佳(よし)だった。

「あら、春さんお久しぶり。父さんすぐ帰ってくるから待っててちょうだい。いま金次が帰ったところだからすぐ呼ぶわね」

春貞の袖を引くようにしてお佳しは中に入るよう促した。

「そうか、お佳ちゃんに袖を引かれちゃあ喜んで待たせてもらおうか」
まだ巳の刻どきだからか他には誰もいなかった。
店内の粗末な板に座ると奥から定吉一の子分といわれている金次が顔を出した。
「春さん、すまねぇ。呼び立てしちまって」
飲みかけの茶が入った椀を持ったまま金次は春貞の前にどかりと座った。
「なにかあったのかい」
「へい、養生所開設の件でいささか心配ごとを耳にしたもんで…」
その時、お佳が気を利かせたのか春貞に燗酒を盆ごとそっと脇に置いた。
「俺だけかい」
春貞はお佳を仰ぎ見ながら目の前にいる金次に申し訳なさそうな顔をした。
「あら、金次はまだお役目中よ。それに真っ当な人間は真っ昼間から酒など飲まないわよ」
お佳は唇を尖らせながら奥に入っていった。
「なるほど。俺のような半端者なら昼から酒を飲んでもいいってわけか」
苦笑いを浮かべながら春貞は手酌で小さな杯に口をつけた。

「すまねぇ、春さん。お佳坊(ぼう)は世間知らずで言葉も知らねぇ。気にされたら許してくんな。
それにさ、嫌な相手ならそもそも酒など出さないぜ」
と言い訳しながら金次は軽く頭を下げた。
「いや、そんなんじゃあない。事実俺はご覧のように風来坊だからな」
盃を置きながら春貞は、
「ところで、どうした」
と話柄を変えて金次を見た。
「へい、詳しいことは親分が戻ったらわかると思いますがね、どうやら養生所開設を邪魔しようとする連中が出没する気配ですぜ」
そういいながら金次はすでに冷え切った茶を飲み干し、
「養生所は確か今月の半ばから診察を始めると聞いてやすが、ひどい噂を故意に流して養生所を邪魔しようとする輩がいるようなんで…。
それに噂だけならまだしも、力尽くで開所を邪魔しようとする奴らも動き回っているらしいんで」

金次は一日中そうした話しを集めて飛び回っていたのだろう、その顔には疲労がみられた。
そんなとき十手持ちの定吉親分が戻ってきた。
金次がすっと立ち上がり、
「親分、お帰りなさいまし」と頭を下げた。
定吉は年の頃なら四十歳位か、恰幅がよく親代々のお役目だからかいかにもの風貌だった。
「春の旦那、おいででしたか」
「すまねえ、親分がお役目のときに酒など飲んで」
少しも悪いとは思っていない顔で春貞はいいわけをしたが定吉は、
「ちょっと待ってくだせい春さん。金次、座ってろ」
と奥に入り、神棚に十手を置き手を合わせてから再び店に戻ってきた。そして笑顔で春貞の前にどかりと腰を落とした。
そのとき、
「あら、春さんお見えでしたか。気がつきませんで済みません」
と出てきた女房のお勢が腰を折って挨拶し、

「お前さん、お疲れ様でした」
手慣れた手つきで茶を定吉の前に置いた。
「いま金次に聞き始めたところだが、養生所の開所を邪魔しようって奴らがうごめいているようですね」
春貞は早速本題に入った。
金次が目一杯頷いている。
「そうなんで。で、いま南町(みなみまち)までその件の相談に伺ってたところなんで」
南町とは無論南町奉行所のことである。
小石川養生所は町奉行所の管轄下にあり、与力が一人とその配下として同心が十数人交代で詰めることになっていた。
春貞と定吉の相談はその後半時あまりも続いた。

定吉のところから戻った春貞は勝手知ったる養生所玄関の上がり框に足を乗せながら、
「笙船先生はどちらですか」と声を上げた。

近くにいた中間が、
「いつもの診療部屋にいらっしゃいますぜ」
と姿もみせずに声を出した。
「ありがとうよ」
春貞は裾を掻き上げながら笙船のいる診療部屋に向かった。
笙船は開業を前に薬の整理と不足の薬を用意していたが、
「春さん、どうした」と顔を上げた。
「先生、定吉親分に呼ばれてひとっ走りしてきたところですが、先生の引越はいつでしたかな」
笙船は養生所肝煎職に任じられたこともあり、養生所の責任者としてこれまでの住居だった麹町では遠いからと小石川伝通院前に設けられた役宅へ引越しすることになっていたのだ。
「うむ。慌ただしくなってきたからな、明後日にでも手回り品だけ持ってこちらへ移ろうと思ってたところじゃ」
「なるほど。そうするとこの一両日中が山かな」
春貞があぐらを組み直しながらひとり呟いた。

「実は先生、養生所の悪口をいいふらしてる奴らがいましてね。定吉親分がいうにはどこかの藪医者の組合らがここの開所を力ずくで止めさせようとやくざ者まで雇ったという話しでして。

どうやら養生所ができると己の甘い商売に支障がでると考えたようですな」

笙船は特別驚いたふうも見せず、

「春さんや。そもそも医者というものはな、近隣の住人たちには評判が悪いもんなのだ」

薬研(やげん)を押しながら答えた。

「なるほど…先生。薬研は薬研車の円盤の刃先で薬草を切り刻むのかと思ったら、そうか、舟形の壁に擦りつけて円盤との間ですり潰すんですな」

「よく分かったな。そうしないとな、干した薬草が粉末にならんのだよ。どうだ春さんもやってみるか」

笙船は薬研車を渡そうとした。

「いや先生、そんな暢気な話しではないんで。

場合によっては肝煎の笙船先生を痛めつければばらちがいくだろうという企みもあ

るようですから、甘く見るとお命にかかわりますよ」
笙船は頭を下げながら、
「ここは公方様をはじめ、町奉行所管轄の養生所ではないか。わしの命を奪ったとて代わりの肝煎りが勤めを果たすだけじゃ。
ばかばかしいにもほどがあるわい」
笙船の押す薬研に一層力が入った。
「でもね、先生。ちょいと放っておくには厄介な話しもあるんですよ」
「ほう、厄介な話しか」
笙船が手を休めて春貞を直視した。
「はい。なにしろ養生所は幕府の薬園に建てられわけですが、藪医者たちの撒いた噂のひとつに養生所の患者たちは薬の効き目を試すための実験台にされるんだというまことしやかな話しがあるんで…」
一呼吸入れた春貞は、
「そんなわけで先生、念のためです、当分一人歩きは遠慮なさってください」
と軽く頭を下げた。

「春さんが頭を下げることではあるまい。だいいち養生所とてわしら医者が病人を直すのではない。あくまでその手助けをするだけじゃ。だから治る人は治るし死ぬ人は死ぬ」

「先生、そんないいかたは誤解を招きますよ。確かに馬鹿な話しですが、馬鹿な奴らが考える事だ、無頼の輩を使いこの養生所を襲うといった話しまであるそうなんで」

真剣な春貞の物言いに笙船は大きく頷きながら、

「わかった。まあ春さんや、よろしくたのむ」

今度は笙船が春貞に頭を下げた。

そのときちょうど笙船へ茶を入れてきた賄中間の八重が、

「あらっまあ、赤ひげ先生が春さんに頭さ下げてるだよ」

と驚いて立ち止まった。

それから二日後、笙船は下男二人に大八車を引かせ、伝通院前の役宅へ引っ越してきた。そして一部の荷物は養生所へと持ち込まれた。

無論途中間違いがあってはと春貞と定吉親分の手下、金次らがそれとなく護衛したものの何ごともなく引越は終わった。

しかし金次は気がつかなかったが春貞はどこからか、監視の目を感じ取っていた。やはり何者かが笙船の動向を注視しているものと思われた。

「荷物など薬箱と書物くらいだと思ってたが、いざとなると結構あれこれとあってな」

言い訳のような愚痴のような物言いをしながら笙船は腰を伸ばした。

二

事件は早くもその日の夕刻に起こった。

食事も終わった酉の上刻、さすがに忙しい一日だったから、賄中間のなかには早くも座ったままで船をこぎ始める者もいた。

そのとき、最後の戸締まりをと養生所の正門まわりを見回りしていた老爺が、

「先生、春さん、変ですぜ」

と駆け込んできた。

「鍋割坂方面からこの時刻だというのに複数の男が走ってくる気配がしやす」
それを聞いた春貞は、
「とっつあん、よく気がついたな。どうやらお前さん、やはりただ者じゃあないな」
にやりと笑いながらどてらを羽織って玄関に向かい、素足を雪駄に突っ込んだ。
そのとき表門からまさに渡世人といった風体の懐手した男三人が無言で入ってきて、春貞を睨んだ。
「おいおい、おまえら夜盗かい。ここは病人の看護場所だ。悪いが金目の物などひとつもないぜ」
春貞はどてらに両手を懐手して立ちふさがった。
三人の男たちは表情を変えず無言で懐や背に隠し持っていた匕首を抜きはなった。
「ふん、どうやらお前らが藪医者に雇われた馬鹿者たちか。ここがどこだか分かっていないようだが」
と春貞は、
「公方様の」

といいながら軽く頭を下げ、
「お声掛かりで出来た養生所だぜ。それにそもそもここは奉行所支配だ。よせよせそんな真似は。下手したら遠島じゃあすまないぜ」
と諭した。
養生所にはまだ入所者はいなかったが、本道(内科)の医師や介護と雑用を兼ねる中間男女がすでに十数人診療開始にあたっての準備をしていた。
尋常でない気配に気がついた男ら数人がすりこぎや箒棒などを手に持って玄関に集まってきたが春貞は、
「手を出すんじゃあねえぞ」
と厳しい声で止めた。
そのとき、笙船がのっそりと腰を伸ばしながら奥から出てきた。
「大変だ…赤ひげ先生、春さんが危ないよ」
誰かが叫んだが、どっこいしょと笙船は顎に右手を宛がいながら、
「まあまあ皆落ち着け。春さんなら大事ない」
と見物するかのように玄関の畳みに腰を落とした。
すると下働きの老爺がどこからか木刀を持ち出して赤ひげを庇い玄関前に立ちふ

さがった。
「春さんや、手加減してやれよ。怪我されてもここ数日は多忙で診てやれんし、まだ本道だけで外科の医者がおらんからな」
と笙船が怒鳴った。
その声を合図にしたかのように三人が手慣れた様子で匕首を腰だめにかまえ無言のまま春貞を突きに動いた。
養生所の連中が思わず「ああっ」と悲鳴をあげた刹那、信じられない光景を眼のあたりにした。
春貞は少し腰を落としただけでほとんど動いていないように思えたが、どてらが肩から外れて宙を舞ったと思ったら、一番先に匕首を突き付けた男はどこをどうされたのか仰向けに伸びていたし、一人は右手を折られたらしく匕首が空を飛び、痛みに地面を転げ回っていた。
そして最後の一人は面白いように弧を描いて地べたに叩きつけられ気絶し、その上に春貞が羽織っていたどてらがふわりと被さった。
養生所の建屋に向き直った春貞は落ちた三振りの匕首とどてらを拾いながら息も切らせず裾を直し、

「誰か、親分を呼んできてくれませんか」と願った。

三

十二月七日、江戸の町に養生所開設の町触（まちふれ）が出された。
その町触には養生所設立のきっかけや由縁、主旨がきちんと書かれていた。
養生所は小石川御薬園内に設置すること、治療中の食事や衣服は無料で支給すること、入所希望者は町奉行所へ願い出ること、ただし自力で歩けない者は家主や親類などに依頼してその意志を町奉行所に申し出よとあった。
また入所ではなく出向く通院治療も行うことから治療を受けたい者は、名主に印をもらって養生所に出向くようにとあり、最後に病人からの入所手続きを面倒がった場合には名主や家主の落ち度とするとも告知された。
そしてその六日後の十三日より、小石川養生所は診療を開始した。

この町触により養生所が医師小川笙船の訴えをきっかけにして開所されたことを多くの人たちが知ることとなった。

春貞は無頼の徒に養生所が襲われた日から夜は養生所で寝泊まりするようになった。用心のためである。

小半時ほどして外出から戻った春貞に中間たちは、

「春さん、日中もここに詰めておくれよ」

と願うものが多かった。

あの晩春貞の技を眼前で見せられたからだし、いつまた同じようなことが起こるのではないかと危惧したからだ。

「そうもいかんよ。俺にも生計があるからな」

一呼吸入れて、

「それにだ、日中は奉行所から同心の旦那方が交代で詰めているではないか」

笑いながら春貞はいったが、勿論同心は用心棒として養生所に詰めているわけではない。いわば事務方であり、本来は入所や治療を希望する者たちの吟味をするのが仕事だった。

それに春貞は口にこそ出さなかったが、あの夜赤ひげを庇うように玄関前に立ちふさがった老爺の姿を思い出した。
とっつぁんはもしかすると昔は二本差しだったに違いないと思った。
「だけど春さん。大声ではいえないがさ、昨今のお侍様は腕がからきしだもの。いざというときにはあてにならないよ」
中間が声を上げたそのとき、
「誰があてにならないのだい…」
いきなり春貞たちの頭上から声がかかった。
「ひえっ」
中間は両手で頭を抱えてその場から飛び出ていった。
声をかけたのは養生所見廻り同心のひとり、伊丹鉄太郎だった。
「伊丹様でしたか」
伊丹は春貞の前にどかっとあぐらをかき、
「まあ、あやつの申すのも当たらずとも遠からずといったところかな」
伊丹と呼ばれた男は春貞よりふたつみっつ年上のようだが、さばけた男と見え苦笑いしながら中間が駆けていった方を振り仰いだ。

「ご謙遜を」
といいながら春貞は町屋に出たとき求めた煎餅の紙袋を懐から取りだし、
「伊丹様、ご一緒にいかがですか」
と勧めた。
伊丹は南町奉行所のなかでも腕の立つ同心として知られていた。いつだったか、凶悪な盗人数人を水もたまらず峰打ちで討ち取ったところを春貞は見た事があった。
そのとき賄中間の八重が気を利かせ二人に茶を煎れてくれた。
「ありがとうよ、いただこう」
伊丹は磊落に破顔して煎餅に手を出しながら、
「春さん、俺に様づけは止してくれ。お前さんにそう呼ばれると尻の穴がむずむずして落ち着かん」
そう笑いながら煎餅をかじった。
「それにしても、お前さんも不思議な男だな。今更だが一体何者なのだ」
伊丹は笑顔のままで春貞に問うたが、春貞もただ笑顔のまま首を振った。
「先日のことだったよ。奉行所でお前さんの名が出てな…」

「俺の名が、ですか。まさかお手配ではありませんでしょうな」
春貞は愉快そうに呟いた。
「いや、同輩らの雑談で『あいつは何者なんだ』といいはじめた奴がいてな」
伊丹はいたずらっぽく春貞を睨んだ。
「で、どうなりました。俺のこと」
他人事のようにいう春貞に伊丹は口にしようとした煎餅を離して、
「実はそのときたまたま御奉行、大岡様が入ってこられてな。我々の雑談を耳にしたのだろう。一言『あの御仁の詮索はするな』とおっしゃったのだ」
煎餅を一口齧った伊丹は怪訝な顔をしながら、
「俺たちは探索詮索が仕事だ。だのにお前さんのことは放っておけという。こりゃあ余計に詮索したくもなるだろうが。
それにだ、天下の大岡越前守忠相様がだ、『あの御仁』といわれたんだ。やはりあんた、ただ者ではないよな」
「なるほど、確かにそうなりますかな」
春貞はにこにこしながら茶をすすった。

「そういえば伊丹様…いや伊丹さん。過日の三人の身元や依頼人はわかったんですか」
春貞はよい機会だからと気になっていたことを口に出した。
「それだ」
茶を一気に半分ほど飲んでから伊丹は、
「まだ三人とも吐かんのだ。意外としぶとい奴らであらあ本物の悪だな。しかし今夜は力尽くでも白状させると佐竹様がおっしゃってるぜ」
佐竹弥五郎は与力であり伊丹の上司だ。
「そうですか。ではまだ奴らの背景はわからんのですな」
「まあ承知の通り、自白が決め手となるのがご定法だ。しかし我々も探索方と共に駆けずり回っているでな、少しずつではあるがはっきりしてきた事実もあるんだ」
二枚目の煎餅に手を出しながら伊丹は春貞の顔を直視し、
「お調べごとは奉行所関係者以外に知らせてはならないのだが、まああんたならいいだろう。どうせ金杉の定吉からも報告がいくだろうしな」
「定吉親分は伊丹さんから十手を預かり御用を勤めているのでしたな」

春貞の問いに伊丹鉄太郎は頷きながら、
「しかし春さん、いかにもここではまずい。見廻役の控え部屋まで来てくれ」
と誘った。
養生所の玄関を上がった右側に見廻役や役人たちが詰める部屋がある。
火の気もなく殺風景な部屋の戸を閉めた伊丹は声を低くしながらもいくつか判明したことを春貞に語ってくれた後に、
「煎餅、うまかったぜ」
と寒空の中、のそりと出ていった。
春貞は四半刻ほどその部屋で思案したのち腰を上げた。

四

この時代、医者となるには現代のように国家試験に受からなければならないという壁はなかった。

御殿医への登用は当然のことそれまでの実績や評判といったものが評価の基準になったが、町医者は今日から自分は医者だという宣言をして看板を出せば誰でも医者になれた。

したがって中には金儲けだけを目的に医者と称し、怪しげな高い薬代や治療費を要求する者もいた。とはいえ無論のこと、患者が寄りつかなければ商売にならないし患者も医者の良し悪しには敏感だ。

そこで藪医者同士が組合を作り、現在の治療に不満を持ったり病状が回復しない患者が疎遠にならないようにと組合仲間の医者をお互いに紹介することもあった。

そうであれば医療ミスがあってもお互い患者をたらい回しにすることで責任を曖昧にし評判が悪くなることを防ぐこともできたからだ。

対して小石川養生所は無料で診察あるいは入所できるという。そんな施設ができたら医療の腕にまったく自信の無い藪医者たちは飯の食い上げになるに違いなく戦々恐々としていた。

町触れのとおり、十二月十三日から小石川養生所は診療を開始した。

事務方の多くは患者が殺到して混乱することを想定し万全の体制をと準備をしてきた。しかしどうしたことか申込みの依頼がほとんど無いという日が続いた。そもそも小川笙船が目安箱へと訴えたとおり、江戸庶民を取り巻く医療の環境は酷いものだった。特に貧しい者たちは薬でさえ服用できず、悲惨な状況のまま放置されていた。

それなのに、養生所の入所希望者が予想をはるかに下回ったことに関係者たちは首を傾げていた。

「やはり春さんが聞き及んだとおり、悪い風評のせいかのう」

十人ほどの患者への対応が一段落した後、笙船は春貞と医師林良適の三人で手あぶりを囲んでいた。

「市井（しせい）の声を聞き及んだ範囲ではやはり養生所に入所すると薬代は無料ながら薬の効き目を試すために使われるとの話しがございますな。さらに養生所で使う高麗人参は国産のもので効き目が薄いといった間違った風評まで流れております」

林は苦々しい表情で呟き、春貞を見つめた。

「確かに」

春貞は林良適に同意を示しながら、
「いまひとつ問題があるように見受けられます」
林と共に笙船も春貞の次の言葉を待った。
「大きな問題としては入所手続きの複雑さがあると思われます。ご承知のように現状では町名主たちが町奉行所への診療手続きを面倒がり、住人からの申し出を放置している場合も多々見受けられると聞き及びました」
「なるほど。これは思っていた以上に根が深い問題かな。そもそも医療行為は命にかかわる故に不審感を持たれやすいものだからのう」
笙船はひげを撫でながら、
「良適どの、春さん、なにかよい策はないものか…」
春貞は良適と顔を見合わせながら、
「事が事です。ここはまず奉行所にご相談されたうえでお上からのお達しを徹底していただくことが肝要かと思いますが」
そして一呼吸の後、
「両先生、俺に妙案があります。是非奉行所へお申し出の際にはお話しいただきたき儀があります」

その後、三人はしばらくの間、診療室で話しを続けた。

養生所の診療時間は明け四つ(午前十時頃)から暮れ七つ(午後四時頃)だ。

確かに開所以来、予想していたより大幅に入所希望者が少なかったが、医師をはじめ看護や賄いを担当する中間たちにとって万全の準備を整えたにせよ余裕のある滑り出しとなった。なにしろそれぞれの役割は決まっていたが、時間通り理屈道理にことが運ぶはずもなかった。

賄いの八重などは、

「先生たちは入所の数が少ないと言ってなさるけど、あたしらにとっては手落ちがないよう気を配れるから最初は空いていた方がありがたいわ」

などとお気楽な物言いだった。

しかし養生所は幕府のというより将軍吉宗のお声掛かりの事業だった。したがって養生所は人体実験の場だとか薬がお粗末だという風評は幕府の医療あるいは薬草行政への挑戦でもあり至急信頼を回復するための対応が求められた。

翌日の明け四つ、小川笙船の姿は南町奉行所にあった。

対応したのは養生所見廻り方与力、佐竹弥五郎と同心伊丹鉄太郎だった。

「佐竹様、伊丹様。誠にお手を煩わし恐縮ながらことは養生所運営の根本にかかる事態と考え、笙船罷り越しました次第…」
平伏しながら笙船が来訪の主旨を簡単に述べた。
「お手を上げてくだされ。
笙船先生は養生所肝煎り、そして御目見(おめみえ)のご身分じゃ。不浄役人と蔑まれるそれがしらなどに平伏にはおよびません。
まずはお手を上げてくだされ」
佐竹弥五郎は砕けた態度で磊落に応じた。
「恐れ入ります」
笙船は養生所の開所数日の様子を延べ、誤解を解くために一層奉行所の尽力を願った。そして養生所の医師たちや春貞らと打ち合わせた打開策を書面にし奉行所に願った。
「うーん、風評を打ち消すことはやぶさかではないがのう。先生のいわれる策は前例がないでな、実現は難しいかも知れぬが間違いなく御奉行にご相談申し上げることにしよう」

佐竹は天井を睨んだ後、
「ともあれ今年もあとわずかじゃ。承知のように奉行所も師走はことに忙しい。養生所の件は最優先でことにあたるが、具体的な話しは年明けとなってしまう。その旨承知していただきたい」
「かしこまりました」
と笙船が頭を下げたその横で伊丹鉄太郎が佐竹に目配せしつつ口を開いた。
「ところで先生、過日無頼の輩が養生所を襲った件ですが、三人の内ひとりが自白したものの雇い主がまだ判明しません。単に小遣い稼ぎをしないかと見知らぬ男に頼まれたようで、いま裏を取ってます。詳しい話しは今しばらくお待ちくださるように」
それに、と伊丹は続けた。
「養生所や先生らを襲うために雇われたのはあやつらだけではないようです。是非とも身辺お気をつけいただきたくお願い申す。特にお一人で出歩くのはしばらくご遠慮された方がよい。これから養生所にお戻りであればそつじながら拙者がお送り申し上げたい」
小川笙船は深々と頭を下げながら、

「まことに親身なお言葉、ありがたく存じます。
実は門前に伊丹さまもご存じの春貞が私の護衛だといって控えておりますのでお気持ちだけ頂戴いたします」
破顔しながら笙船が頭を上げた。
「おお、春さん、いや春貞どのがご一緒でしたか。この場に同席されればよいものを」
伊丹は再び上役の佐竹を振り仰ぎながらいった。
それを受け佐竹弥五郎は、
「拙者も一度春貞とか申す御仁の顔を見たいと思っており申す。次の機会は同道されるがよろしかろう」といいながら腰を上げた。
笙船が奉行所の潜り戸から出ると春貞がどてらをはおり手ぬぐいを巻いた首を縮め寒そうに待っていた。
「先生、いかがでしたか」
「寒いのに待たせてしまったな春さん。しかしお前さん若いのにどてらを手放せないようじゃな」
からかうように笙船がいうと春貞は、

「江戸っ子は冬でも薄着が粋だといきがってますがね、ご承知のように私は江戸人ではありませんのでやせ我慢は止めておきます」
春貞のいいわけを楽しそうに受けながら笙船は、
「道々ゆるりと話しながら歩こうか」
と向きを変えた。
笙船と春貞は途中飯屋で腹ごしらえの後、小石川へと向かった。
「先生、行きは徒歩(かち)だったからお疲れでしょう。この辺で籠を呼びましょうか」
春貞が赤ひげの足を心配したが笙船は、
「春さんや、そうわしを年寄り扱いせんでくれい。たまに歩かんと本当になまってしまうでな」
そういいながら奉行所で与力および同心へ依頼した風評を払拭する案について春貞の考えを改めて問うた。
「先生、風評を拭うのは御触だけではなかなか難しいと思います。まずは町の名主たちにきちんとした考えを植え付けないことにはいつまでたっても長屋の連中にまでことは浸透しません」

「で、名主たちへ養生所見学の機会を作りたいということだな」
「そういうことです」
二人は顔を見合わせたが、笙船は奉行所での佐竹弥五郎の顔を思い出しながらいった。
「佐竹どのは養生所見学の機会など前例が無いから難しいかもしれんといわれたがな」
春貞はにっこりしながら、
「先生、それをいうなら養生所という施設自体前例がないといってよいでしょう」
と笑った。
「それともうひとつ、入所手続きの簡略化についてもお願いいただけましたか」
「申し上げた。いずれにしても佐竹どのは大岡様に申し上げると約定されたが、時期が悪いわい」
「もうすぐ大晦(おおつごもり)ですからねえ」
春貞がそういいながら急に足を止めた。

二人はすでに金杉水道町に接する町屋が多い安藤坂まで来ていた。左手には安藤飛騨守の広大な屋敷があり、直進すれば家康の生母於大の方の菩提寺である伝通院の表門が見通せた。さらに直進し金杉水道町に至れば定吉親分の家も間近だ。

「先生、まだお天道様が真上近いというのに馬鹿者が待ち伏せしているようですね」

「今度は侍のようだな」

そんな声が聞こえたかのようにいかにも食い詰め浪人と思える二本差し五人が小川笙船と春貞の前に立ちふさがった。

「何かご用ですかな」

笙船が落ち着いた声で問いかけた。

「きさまらに恨みは無いが死んで貰う」

一人が呟き、五人一斉に鯉口を切り抜きはなった。

春貞は笙船を左手にかばい、安藤飛騨守の屋敷の土壁に寄せたとき、八双にかまえた一人が気配も無く春貞に斬りつけた。

男は確かな手応えが、と思った途端、春貞の肩からふわりと外されたどてらで視界を塞がれたたらを踏んだ。刹那首筋に強打を受け気を失っていた。

男の抜き身はすでに春貞の手にあった。
唖然とし顔を見合わせている残りの四人に、
「こんななまくらでも、当たれば痛いぜ」
といいながら春貞が切っ先を向けると笙船も花見でもしているかのようなのどかな声で、
「お主らやめときな。この男は柳生新陰流免許皆伝だ。悪いがお前さんたち十人がかりでも勝ち目はないな。それとも安藤坂に首を転がし新玉の年を迎えたいかな。わしがいくら名医でも一度落ちた首は元に戻せんぞ」
とからからと笑った。
騒ぎを聞きつけた安藤家の中間が潜り戸から顔を出し、
「嗚呼、斬り合いだ、斬り合いだ」
と叫んだ。
さらに陸尺町を足場にする駕籠舁(かごかき)ら数人も何ごとかと飛び出てきた。
「引け」
侍の一人が叫び、気絶していた仲間を肩に担ぎながら三人があたふたと逃げ出し

た。
「あれまあ、養生所の先生たちでないか。どうなすった」
太い腕をした駕籠舁が鷹揚に声をかけたが春貞は、
「おかげ様で命拾いしました」
と頭を下げ、落ちたどてらを拾ってはたきながら何かいいたそうな笙船の袖を引いた。

五

春貞と笙船は予定を変更し養生所に直接帰らず、金杉の親分こと定吉を尋ねた。侍五人に襲われたこと、そして奉行所でのあれこれを定吉に伝えておこうと考えたからだ。
折良く定吉は神棚を背に火鉢の前で煙管をふかしていた。
「これはこれはお珍しい。お二人ご一緒とは、どうなさいました」

立ち上がった定吉は、
「さすがにあと数日で大晦(おおつごもり)、寒いわけだ。さあさあこちらに」
親分は二人に火のある所へと誘った。そして、
「勢(せい)、熱燗を頼まあ」
と怒鳴ると店の方から、
「あいよ、お前さん」
とこれまた気っぷのいい返事が響いた。
「お手を煩わせる」
「遠慮無く」
笙船と春貞は冷え切った体を手あぶりの前においた。
金杉の定吉親分と小川笙船、春貞の話しは一刻ほど続き、養生所に二人が戻ったのは暮れ六つを過ぎていた。

翌朝いつものように明け四つ(午前十時頃)から診療が開始された。
入所患者の定員は四十名だったが風評のためか現在の入所者は九名だった。それ

でも労咳、中風、瘡毒（梅毒）、老衰など治る見込みがない入所者のため、そして少なからず通院してくる病人や怪我人のため、本道の医師林良適と岡丈庵が一日交替で詰め、本来なら監督職の笙船はもとより息子の小川丹治が見習いとして診察と治療にあたっていた。

さらに夜間など急患などで医師が足りない場合は近隣の町医者三人と話しがつけてあり、一声かければ駆けつけてくれるという万全の体制をとっていた。

「いかがかな甚助さん、気分は」

笙船が胸を患い末期とみられる老人に声をかけた。

「へい、先生…お陰様で今朝は飯が喉を通りやした」

と寝ていた体を起こそうとしたが、

「そのままで良い。脈を見せてもらおうか」

と笙船は患者の枕元に座り込んだ。

この時代の診断は主に脈拍を見ることにより行われていた。

「薬はきちんと飲んでおるだろうな」

笙船は脈をとった甚助の痩せ細った腕を寝間着の袖にもどしながら聞いた。

「飲んでまさあ。しかし先生、どうしてああも苦いのかね」
些か呼吸を荒らしながら甚助は訴えたが、
「良薬は口に苦くして病に利ありという。嫌がらずに飲み続けなければならんぞ」
甚助は立ち上がった笙船に寝たまま両手を合わせた。
「おいおい、わしはまだ仏様ではないわい。そんな振る舞いはよしなされ」
笙船の明るい声に看護中間たちが声をたてて笑った。

養生所には医師の他、入所者の食事を司る賄中間が五人、男性患者の看護を行う看護中間が六人、そして女性病棟の看護を司る女看護人として二人が立ち働いていた。ただしこのとき女性の入所者はまだいなかった。
さらに町奉行所から派遣された同心が交代で運営事務に携わっていたから、雑用のために雇われたという老爺などを入れると常時二十人近くの人が働いていた。

第二章　吉宗襲撃

一

養生所は大晦はもとより元旦も診療を休むわけにはいかなかった。
とはいえ一応外来は松が取れるまで休むことになっていたものの、急患が運び込まれれば対応せざるを得なかった。
しかし、入所者の人数が少ないこともあって新年は穏やかに過ぎていった。
養生所の正門には松飾りが置かれ、玄関には賄の八重が活けたという大ぶりの生花がひときわ周りを明るくしていた。
「いつもは殺風景だから花でもないとさ、年神様も呆れて来てくれないからね」
八重が薬園の端に咲き乱れていた名も知らない草木を工夫して活けたものだ。
また病人口と呼んでいた裏門にはあの老爺が庭掃除をし、薪割りをしながら門番代わりに詰めていた。

その病人口へ春貞が姿を見せた。
「春さん、新年おめでとうございます」
老爺が声をかけ春貞の足が止まった。
「お目出度う。今年もよろしくたのむ、とっつあん。そういえば機会が無くて名を聞いてなかったな。すまないが教えてくれないか」
と笑った。
「隠す名ではございませんよ、弥三郎といいます」
「弥三郎さんか。お前さんはただの町人ではないようだな」
「春さん同様ここでは出所不明としておいてくだせい。無論赤ひげ先生はご存じですがな」
そのとき春貞はいきなり首巻きの一端を弥三郎の顔に向けて振り投げた。
首巻きの先端にはなにか重しが隠されているようで一瞬鋭く風を切る音が響いたが、弥三郎はほとんど立ち位置を動かず首巻きの動きを外した。
春貞はにやりとしながらも頷き、
「ごめんよ弥三郎さん。数日出てくるが先生を頼む」

そういいながら首巻きをなびかせ飛び出ていった。
その背を眺めながら弥三郎爺は、
「ふうっ」と長い息を吐いた。

春貞の姿は市谷尾張家江戸屋敷(藩邸)前にあった。
毎年のことだが元旦は江戸城で混乱が予想されていた。なぜならこの日は御三家はもとより、旗本御家人などが総登城しそれぞれの格式により将軍に年始の挨拶をする習わしがあり、時刻によっては城内だけでなく近隣も混雑した。
屋敷の正門の大戸が開き、「殿のご出立」という通る声に合わせるように多くの家来と十数騎の武士を従えた長柄黒塗の大名籠が出てきた。
登城のためだが、さすがに御三家の筆頭格尾張藩だ。諸大名の中で最高の格式を有した雄大な行列の始まりだった。
春貞は屋敷前の端に相変わらず首巻きにどてら姿で片膝付をし、顔を軽く伏せ乗物(籠)が近づくのを待っていた。
人通りはなかったが、北風が落葉を時々巻き上げる音が鳴っていた。
門前の道幅は広かったものの行列の面々は地面に控えている男を何者かと注視し

警戒したとき乗物の中から、
「留めよ」
の声がして一行はそのまま行列を崩さず立ち止まった。
行列の差配を勤める武士が乗物に近づき畏まるといきなり春貞の前まで駆け寄った。
行列の面々に何ごとかと緊張が走った。
春貞は姿勢を低くしたまま武士の求めに従い、乗物の前まで進み出て平伏した。
籠の中からいささか声高に、
「春貞どの、久しいのう」
という呼びかけと同時に乗物の引戸が開かれた。
「殿のご尊顔を拝し奉り恐悦至極に存じ奉ります」
春貞は平伏したままだがあえて新年の挨拶はしなかった。
「春貞どの、そちと余の間柄じゃ。面を上げて下され。そしてもそっと近う」
乗物の主は尾張六代藩主徳川継友(つぐとも)だった。
「皆の者、この者と話がしたい故、外してくれ」

継友が命じると差配が恐縮しながらも、
「殿、登城の時刻が迫っております。恐れながら手短に願い奉ります」
と願った。
ほんのつかの間だったが、どてらに首巻きの男と尾張六代藩主徳川継友の話しが終わった。
「頼みましたぞ、春貞どの」
継友は乗物の引戸を閉め行列の出立を命じた。
春貞は厳しい表情で継友が乗る長柄黒塗の大名籠に頭を下げた。
尾張六代藩主徳川継友は三代藩主徳川綱誠の十一男で春貞より歳が五歳ほど上だった。
そもそも綱誠の十男だった尾張藩第四代藩主である徳川吉通が享年二十五で没したためその一子五郎太が跡を継いだものの、相続から二ヶ月ほど後に数え三歳で死去する。
ために家督は叔父の継友が継ぐことになったのだ。
実は、春さんこと春貞は尾張藩三代藩主徳川綱誠が市井の女に生ませた子だっ

た。誕生と共に御連枝と呼ばれる松平姓の分家に預けられたことから松平春貞と名乗ったものの、父綱誠とは顔を合わる機会もなく育ち、本人も市井で生きることを望んだ。

綱誠としては春貞が将来お家騒動の火種になることを心配しただけでなく側室に生ませた正当な後継者たち、例えば十男の吉通、十一男継友らに遠慮し会うことを断念したらしい。

ただしその死に際し一振りの脇差しを春貞に残した。徳川綱誠は尾張新陰流第七世でもあった。

春貞は食うには困らないもののやることと言っては女の尻を追うか剣術の修行しかなく、為に父綱誠の血もあったのだろう剣術は熱心に励み、二十代になる直前すでに尾張柳生新影流の免許皆伝を授けられた。それだけに尾張藩は表沙汰になると困る事案が生じたとき、春貞を呼び出しその手を汚させたこともあった。

なにしろ松平春貞と徳川継友は腹違いの兄弟なのだ。

この事実を知る周りの者は小石川養生所肝煎小川笙船と南町奉行大岡忠相そして金杉の親分こと定吉と「い組」の頭、政五郎しかいなかった。

なお定吉の立場は微妙だった。十手を預かっているのが南町奉行所同心伊丹鉄太郎だったからだが、定吉は隠せなくなるまで春貞の秘密は伊丹にも明かさないと決めていた。

実は数日前に小石川養生所へ立派な身なりをした武士が春貞宛に書状を届けに来た。それは尾張藩主継友からで、至急会いたいという願いに春貞は仕方なく非公式の場で会うことを同意したのだった。

二

正月もあっというまに松が取れる時期になった。

真っ青な空に江戸城が映える日本橋室町の長濱町一郭に鳶の政五郎が店を張っていた。

彼はまた大岡忠相が苦心の末に創設した町火消し「い組」の頭でもあった。

町火消しは、いろは四十八組ある中で政五郎が率いる「い組」は本町、本石町、

室町、小田原町、本銀町、本両替町、本材木町、本船町、駿河町、瀬戸物町、伊勢町、安針町、万町、青物町、呉服町、岩附町そして通一丁目を受け持ちとし、よ組、は組についての大きな組織だった。
人々は政五郎が一声かければ五〇〇人の人足が即時に集まると恐れていたし同時に何かに付け頼りにし尊敬もしていた。
「ごめんよ。頭はいるかい」
「い組」の頭を訪ねたのは市谷尾張家屋敷から踵を返した春貞だ。
広い間口の三和土（たたき）には数人の男たちが鳶口（とびぐち）や刺又（さすまた）、梯子など消火の際に使う道具の手入れをしていた。
元旦ではあったが、一月四日に行われる出初めの準備に余念がなかったものの、いささか酒も入っていたのかいつもの緊張感はなかった。
指揮をとっていた小頭の末松が、
「おっと、春の旦那でしたかい。へい、頭はいま大岡様とお話し中ですが春さんが見えたらお通しせよといわれてますんで、どうぞお通りを」
と腰を折った。

「そうかい、ありがとうよ」
春貞は着流しの裾をめくりながら上がり框に飛び上がった。

「い組」の頭、政五郎は小柄ながら中年で肝っ玉の据わった男っぷりだが上座に大岡忠相を座らせ、自身は火鉢を挟んで相対していた。
「これは春さん、よい所に」
「大岡様、ご無礼いたします」
忠相はにこにこしながら、
「どうぞこちらへ」
と春貞を誘った。
どうやら春貞と忠相は初対面ではないようだった。
「お話しに割り込んでようございますか」
春貞は座すと上座の大岡に問うた。
「こちらの話しは終わった」
忠相の頷きを笑顔で受けた春貞は早速懐から折りたたんだものを取りだした。
「なんですねそれは」

春貞が一同に見せようと火鉢の前へ広げる前に政五郎は覗きこんだ。
「ああ、春さんこれは例の消火のからくりですかい」
「消火のからくりとはなにかな」
忠相も興味ありげに春貞が畳の上に広げた絵図面をのぞき見た。
「大岡さまのご尽力で町火消しが発足しましたが、申し上げるまでもなく火消し働きは風下の家屋を倒壊し延焼を防ぐのが主な目的です」
春貞は言いながら出された茶をひと飲みして、
「そういえば、こちらのい組の纏(まとい)を形になさったのは大岡さまだと巷で漏れ伺いましたが本当ですか」
忠相は破顔し頷きながらも春貞が工夫して描いた絵図面の説明を促した。
「さて、本来火は水で消えるものですから、何らかの手段で延焼初期に水をかける工夫ができないものかと先般頭との雑談中に思いつきまして。それができれば延焼前の家屋は倒壊させずに済む理屈です」
大岡と政五郎は畳みに広げられた絵図面をあらためて覗き込んだ。
「町の要所要所には用水桶がありますが機動性がないのが難点です」

春貞は図面の折皺を伸ばした。
「なるほど。この大きな四角い桶に水を入れ、天秤棒のような横木を上下させることでこちらの長い筒から水を噴き出させるということか」
大岡が問うと春貞は、
「はい。長い横木の柄は中央が支点となってます。左右共に一人あるいは二人で交互に押し下げることで水を吸い上げる効率があがるはずです。ところてんならぬ水を押し出す道具の親玉でしょうか」
政五郎が少し思案しながら、
「春さん。確かに面白いが問題は水の勢いと量だ。例えば向こうの結香堂さんのような二階建ての屋根まで水が届きやすかね」
忠相も政五郎の危惧に同意し頷いた。
「ご一同様、それが問題ですが、こればかりは作ってみないと分からんのですよ。水が飛び出る筒の長さや太さも関係するでしょうがね。
例えば仕組み全体を大きくすればそれだけ放水の量や勢いは増すでしょうが、使い勝手が悪くなるし人力もより多く必要になってくるものと思われます」
頭を掻きながら春貞は笑った。

その春貞の顔を見ながら大岡忠相は口を開いた。
「春貞どの、お手前はこうした工夫、どこで思いつかれたのか」
「そのことですか」
姿勢を正した春貞は正座し直して、
「ここだけの話しにしていただきますが、俺、いやそれがしが十歳になったときのことです。遠縁に長崎奉行を仰せつかっていた者がおりましてな。父に疎まれ自堕落になっていたそれがしはその親戚に一年ほどの間でしたが預けられておりました。
時間だけはありましたので剣術の稽古が終わると町中の珍しいあれこれをそれこそ貪るように見て歩きましたが、そんな折りに海を渡った国々では大がかりな消火桶とでもいうものを馬車や荷車で移動し火の元に水を吹きかける道具があると聞かされたことを思い出しましてな」
「なるほど。春さんも苦労されたんだ」
頭の一言で三人は声を上げて笑った。

「ところで水桶は大きければかなりの重さとなりやす。いきなり馬車は面倒ですから大八車みたいなものに取り付けるとよろしいかも知れませんぜ」
政五郎は乗り気になったようだった。
「まずは頭、知り合いの大工に図面通りのものを作るよう願っていただけませんか。旨くない部分はその都度考えてみましょう」
春貞は政五郎に頭を下げた。
「よしてくだせい、春さん」
政五郎が慌てたが、
「ところで春さん、この火消し道具じゃが名はあるのかな」
忠相も興味を持ったのだろう、そう問いかけた。
春貞は少し思案顔を見せた後、
「これは是非とも大岡様に名付け親になっていただきたいものです」
と、しれっとした顔でいった。

三

春貞が「い組」で飲んだ帰り、時刻はすでに夜半となっていた。い組で借りた提灯を下げて一丁ほど歩いたとき一人の武士が覆面をし、抜き身を持った七人ほどの侍に囲まれているところに居合わせた。

すでに一人は武士に倒され刀と共に地に伸びていたがまさに総掛かりで一人に斬りかかろうとするところだった。

「まてまてまてっ」

春貞は大声をあげながら襲われている武士を後ろ手に庇おうとした。

提灯の灯りが揺れた。

「いかがされました」

そう声をかけたが武士は無言だった。迫ってくる六人との間合いを図りながら春貞は無言の武士を注視した。

襲われた武士は浅黄裏（あさぎうら）ではなく身分の高い侍だということはわかった。

浅黄裏とは田舎侍のことだ。
しかし、おかしなことに苦笑いしているではないか。
六人の刺客に囲まれたにもかかわらず怯えた様子もない。むしろこの状況を楽しんでいるといった感じだった。
「邪魔立てすると容赦はせぬ」
脇構の男が踏み込みつつ春貞に鋭く斬り上げた。
春貞が下げていた提灯が落ちてぱあっと燃え上がった。
切っ先が意外に伸び春貞の胴を抜いたと男が確信したとき、太刀の自由が利かないばかりか月明かりの視界が闇となった。
春貞のどてらがふわりと被せられたからだ。
それを撥ね除けた途端首に強い圧迫を感じ気絶した。
春貞が首に巻いていた手ぬぐいが男の首に巻き付き、絞められたのだ。
「ほう、どてらといい、てぬぐいといい役に立つ武器になるものよのう」
襲われた武士が感嘆の声を上げた。
その時刺客の一人で痩身の男が懐手をしながら春貞に近づいた。
こいつは出来ると春貞が身構えたとき、

「俺は無腰の相手に刀は抜かん。出直すぞ」
といいつつ、軽く咳き込みながら闇夜に消えた。
倒された二人も仲間が連れ去ったようで全員が消えていた。
そのとき春貞は、痩身の男が立っていた場所に漂っている異様な臭いに気がついた。
どこかで知った臭いだった。
「かたじけない。礼を言う」
そう声をかけられた春貞は、
「お手前はちいとも危ない様子ではなかったですな。いらぬお節介でした」
春貞と男は闇夜に小さな声を立てて笑い合った。そして武士は、
「拙者は得田新之助と申す。貧乏旗本の冷や飯食いでござる」
と名乗った後、
「率爾(そつじ)ながらお手前の姓名を伺いたい。本来は二本差しとお見受けしたが」
そう春貞の名を問うた。
「いやいや、それがしも無駄飯食いの、そうですな、首巻き春とでもご記憶下さ

い。今一度襲ってくることもないと思いますがくれぐれもお気をつけて」
一礼し踵を返した春貞だったが、一瞬いままで気づかなかったものの複数の監視の目を感じ緊張した。
ただしおかしなことに殺気はまったく感じられなかった。

その五日後、春貞の姿は再び「い組」の政五郎宅にあった。そして政五郎から驚くべき事実を聞かされた。
あの日の侍は政五郎宅を訪問する目的だったそうで、刺客にあったとき首巻き春と名乗った助太刀のことを政五郎に話したのだという。
「頭のお知り合いでしたか」
早速政五郎の女房志津が顔を出し「おいでなさいまし」と茶を煎れてくれた。
「お志津、悪いが少し春さんと内緒の話がある。ここに誰も近づけないでくれ」
珍しいことではないのか、志津は頷いて襖を閉めた。
「実は春さん、いえ春貞さま。まあまあ、この場だけはそう呼ばさせてくださいまし。あの得田新之助さまというお方も春貞さま同様もうひとつのお顔がございましてな」

政五郎はここだけの話しと強く念押しの上で語り始めた。それによればあの得田新之助と名乗った侍は現八代将軍徳川吉宗その人だという。
時々城を抜け出しては下々の生活を見聞するためここ「い組」にもよくたちよるという。
「これは驚きです。確か公方様ご幼少のときのお名は新之助さまでしたな」
春貞も身分の高い武士だとは思ったが、まさか将軍であるとは考えもしなかった。
そのとき、ふとあのとき感じた監視の目の正体を思い知った。
あれは吉宗を影護衛をする忍びたちだったに違いない。
ということは、文字通りのお節介だったとあらためて苦笑した。
「それから春貞さま、あなた様のこともわっしの一存ですが新之助さまにお話し申し上げました。ええ、まさか将軍様に偽りを申し上げるわけにはいきません。お許しを」
政五郎があらためて春貞に頭を下げた。
「よしてくれ頭(かしら)。それより公方様、いや新之助どのは私のことをなにか危惧され

てたかい」
「まさか。命の恩人だとおっしゃってましたぜ。今度はここ、わっしの家で会いたいとも」
「畏れ多いことです。まあその際には新之助どの、春ということでよろしいですな」
春貞が笑顔でいうと政五郎は、このことを知るのは自分だけであり女房の志津は勿論、小頭も誰も知らないのでそのつもりでいて欲しいと念を押した。
頭が是非というので春貞はその夜、頭のところに泊まった。

四

翌朝、春貞は朝早く「い組」を出て養生所に出向く前に小石川富坂町にある馴染みの湯屋(銭湯)「富坂湯」へ立ち寄った。
ここは金杉の定吉こと、十手持ちの親分の親戚がやっている湯屋だった。

まあ世間にはそうした話にしていたが、その実体は定吉が大半の金を出した店だった。

江戸は外を歩けば土埃にまみれて汚れやすく、湯屋はなくてはならないものだったが、水と燃料が貴重な上に火事の原因になることを恐れ、特別許可された場合以外町屋の内風呂は禁止されていた。ために江戸にはこの当時五百件ほどの湯屋があった。

春貞は朝五つ(午前八時)に開くのを待って向かうとちょうど南町奉行所同心伊丹鉄太郎と鉢合わせとなった。

「おはようございます。伊丹さん。お早いですな」

「おお、これは春さん、おはようござる。それがし養生所で一晩過ごしたでな、朝風呂を浴びたくなった。

役目故毛嫌いするわけではないがあそこは薬臭くてならん」

腰の大小を左手で抜きながら笑った。

「いまなら女湯が貸し切りできる。付き合ってくれ」

この時代、湯屋の多くはまだ混浴だったが、この「富坂湯」は男女別の施設になっていた。

しかし、女湯がある湯屋では町方の与力や同心は朝の早い時間、女湯を使うことが許されていた。
これは朝には女湯が空いていたからという理由もあるが、単なる特権と言うことだけではなかった。
町方の与力同心たちは女湯で隣の男湯から漏れてくる雑事や噂話に耳を傾け近隣の情報収集に役立てていたのだ。
与力や同心は近隣に顔を知られていたからでもある。
そもそも町与力や町同心は八丁堀銀杏という、三角に木っ葉の形をした独特の髷を結っていたからすぐに分かってしまう。
その「富坂湯」だが、金杉の定吉ゆかりの湯屋だということで、伊丹は開設の際に懐からいくばくかの資金を提供したという。
したがって伊丹にとってはいわば勝手知ったる内風呂みたいな感覚だった。
高台(番台)に座っていた顔見知りの年増に伊丹は、
「俺だ、連れと一緒に入るぜ」
と声をかけた。
「伊丹の旦那、おはようございます。どうぞどうぞ」

春貞にとって女湯に刀掛けがあるのも可笑しなことだったが、後に湯屋の七不思議などと話題になる。

手慣れている伊丹はさっさと裸になり石榴口（ざくろぐち）をくぐって湯槽に深々と体を沈めた。

口を固く結んでいるところを見ると一番風呂は些か熱いようだ。

春貞は少し遅れ「ごめん」といいながら均整の取れた体を静かに湯に浸けた。

伊丹はふと春貞の首に大きな金創（きんそう）（傷）があることに気がついた。無論湯に入るときにはさすがに首巻きを外していたからだが、外した所を見たことがない伊丹は見て見ぬ振りができず、その気配が春貞に伝わった。

「伊丹さんには金創など珍しくもないでしょうに」

春貞はにやっと笑った。

「いや失礼した。お主の首巻き姿は八丁堀でも伝説になっておるでな。奇妙な噂話まで飛び交ったこともあったくらいだ」

「承知してます。そもそも秘密にするほどのことではありませんが、進んで言いふらすことでもないですからな」

伊丹はどう反応したものかと言葉を探しながら、両手で湯をすくい顔を覆った。
「伊丹さん、この傷が小川笙船先生と知り合ったきっかけでしてね。湯の中ですが聞いていただきましょうか」
伊丹は思わず頷いていた。
勿論二人の他に誰もいなかつた。

ことは二年ほど前の話しだった。
春貞はなにをしていたかは不問として欲しいと断りながら話し始めた。
それによると、心を許していた同郷の友に裏切られ、不覚にも右胸と左首に傷を負ったという。
酒が入っていたとはいえまったくの油断だった。
首の傷は深くは無かったものの傷口が大きかった。ただしあと少し位置が違ったら頸動脈に達し命を失っていたかもしれなかった。
一方胸の傷は深手だった。
麹町まで転がるように逃げてきたとき、たまたま往診帰りの小川笙船に発見され一命を取り留めたのだという。

「笙船先生は俺の身元や傷を負った理由も聞かず黙って治療をしてくださいましてね、命の恩人なんです」
春貞は首の傷を撫でながら、
「可笑しかったのは先生が『わしは本道(内科)の医者だから外科は本職ではない。だから傷口を合わせるのは素人芸だからして治っても見栄えはよくないぞ』と言われまして」
そのときを思い出したのか春貞の両眼が潤んでいるように伊丹には思えた。
それを隠そうとしたのか春貞は片手で顔に湯をかけた。
「俺が首巻きをしているのは傷を見られたくないからではないのです。笙船先生の言われたとおり俺の傷はあまり見栄えがよくないですからこうでもしないと反対に周りに気遣いさせますのでな。それにこうした季節には風が当たると時折少し痛むのです」
そういいながら今度は体を湯から浮かして胸の傷跡をみせた。
伊丹鉄太郎は春貞という人物の正体は不明ながら生涯の友を得たと思った。

「笙船先生、少々お尋ねしたきことがありまして」
湯屋から出て、伊丹同心と別れそのまま養生所に足を向けた春貞は大股で診療部屋で書物を前にしていた赤ひげに願った。
「春さん、七日ばかり顔をみせなんだな」
顔を上げた笙船の横で岡丈庵が薬研を押していたが、
「私は席を外しましょうか」
と気を回した。しかし春貞は一緒に聞いていただきたいと立ち上がった丈庵を留めた。
「春さんや、何かあったか」
笙船の言葉に頷きながら春貞は「い組」の帰りに身分の高そうな侍が刺客に襲われている場に居合わせたことなどを話した。ただしその侍が八代将軍吉宗だったことについては話さなかった。
「先生方、ここからが肝心なんで」
刺客の一人、痩身の侍から漂う臭いについて気がついたことを話した。
「なるほど、春さんはその刺客が重い労咳を患っているのではないかと思われましたか」

岡丈庵が問うた。
「先生方、先般病人部屋に入ったとき、なんといったかな、労咳の患者がおりましたな。その場所で嗅いだ薬の臭いと同じ臭いだと感じましたので」
「ああ、薬の臭いだとすれば薬用人参、高麗人参かのう」
「確かに鼻に抜けるような臭いだと申す者もおりますな。しかし春さん、もしあなたが嗅いだ臭いがそうだとしてもそれが労咳を患っているからだとはいえませんぞ。
何しろ高麗人参は万病の薬ですからな」
丈庵の言葉を受けて笙船も頷いた。
「高麗人参は高価だと聞き及んでますが」
春貞は暗闇だったからはっきりとは判別できなかったものの、痩身の刺客から漂っていた暗い絶望感が気になっていた。
「確かに高価じゃ。『親の脈、浮けば娘の　身が沈み』といった川柳に詠まれるほどじゃからな。高価なのは伝来物だから仕方があるまい」
「ただしいつも笙船先生がおっしゃっていますが、万能といわれる薬用人参も飲めばそれですべての患者に効き目があるとは限らない。

要は養生と規則正しい生活が肝要ということですな」
丈庵が話しをつなぎ、
「そういえば、公方様が国産の薬用人参栽培にお力を入れておられる。ここの菜園でも植え付けを始めているが上首尾となれば手に入れやすくなろうな」
と笙船が受けた。
「なるほど。それで先生、お願いなのですがその高麗人参とやらの薬を少し分けていただけませんか。俺に思案がありますので」
春貞が笙船に願った。
薬用人参すなわち高麗人参とか朝鮮人参といわれたものはその名から「人参」の亜種と思われがちだが、我々が普段食す野菜の人参とはまったく別物である。野菜の人参はセリ科の根菜だが、薬用人参はウコギ科の多年草だという。したがってまったく別の植物である。
小石川養生所の診療が始まって三ヶ月経ったが入所者は相変わらず定員を大きく割っていた。一方、小川笙船が奉行所に願った風評被害の払拭案も進展がないままの日々が続いていた。

養生所の正門および玄関には心地よい日射しが照って春の息吹を感じさせた。
「とっつぁん、いや弥三郎さん、その桶はなんだい」
「春さん、とっつぁんで結構ですよ」
弥三郎は笑いながら、
「そういえばここ養生所には用水桶の準備がありませなんだ。そこで赤ひげ先生に許可をいただき、建物の周り六箇所に置いているところでさあ」
「なるほど、それは上々。しかしなにか懸念でもあるのかい」
春貞は最近養生所を留守がちにしていることを気にしていた。
弥三郎は小声で、
「具体的な嫌がらせやらは今のところありませんが、時々監視の目がつくことがありますな。昨年末の騒ぎだけで終わればいいですが、いましばらく注意をしておく必要があるようですぜ」
春貞はそれには答えず、
「ところで腰はもうすっかりいいのかい」
「お陰様でそれはもう」
「喧嘩するのも女を抱くにも腰は肝だからな」

春貞のふざけた物言いに弥三郎は、
「違いねえ」
と笑ったが、ふと真面目な表情に戻り、十分注意をしますと付け加えた。
春貞は、
「俺はこれから気が進まんとこに出かけねばならねえ。後を頼む」
そう言い残して病人口から消えた。

五

一時ほど後に春貞は市谷尾張家江戸屋敷にいた。その姿はさすがにどてらではなかった。
珍しく深い青みを帯びた八丈縞柄の着流しに平織りの角帯を締め、黒縮緬の袷羽織姿だったが、黒っぽい衣裳に白生地に椿の花が染められた首巻きが異様だったものの妙に似合っていた。そして腰にはこれまた珍しく父徳川綱誠形見の脇差し

を帯びていた。
門番は春貞の身なりを見て怪訝な顔はしたものの、事前に話しを聞かされていたものとみえて「松平春貞」と名乗った男を丁重に通してくれた。
門内で待つと近習頭で伊藤虎次郎と名乗る若い侍に案内され、広大な敷地をしばらく歩いた。
上屋敷の坪数はもともと四万九九九三坪余もあり、さらに寛文二年(一六六二年)と同六年(一六六六年)には東隣の寺地など五九三九坪を購入し拡大していた。さすがは徳川御三家筆頭格の江戸上屋敷であった。
なおこの地は現在市ヶ谷防衛省の敷地となっている。
春貞は江戸家老永井主水が執務を行っている部屋に連れて行かれた。
永井主水は老練な策士でもあり、国許の上代家老、付家老らと共に藩主を助け、幾多の修羅場をくぐり抜けてきた煮ても焼いても食えぬ男だと春貞は思っている。
この一年余りは会わずに済んでいたが、出来ることなら会いたくない人物であった。
なぜなら会えば必ずといってよく、難題難問を押しつけられてきたからだ。

「春貞殿、よくまいられたな。こちらへお座りなされ」
主水は自分が座す隣に座れと勧めたが、春貞はずかずかと一間（約一・八メートル）離れたところに正座し、
「殿のお言葉により参上いたしました」
と軽く頭を下げた。

春貞は本来なら尾張藩主継友と腹違いの兄弟であり、例え江戸家老とはいえ頭を下げなければならない身分ではなかった。しかし春貞自身が藩の人間である身分を捨て市井の人として生きる道を選んだ故、これも世間のつまらぬ約束事だと割り切っていた。
無論春貞の出生の秘密を永井主水は知っていた。
「春貞どの、そこでは話しがしづらいではないか。この通りごま塩頭を下げ申すので隣に来てくだされ。この通りだ、な、頼む」
と困ったように願った。
春貞は永井家老からの話しを四半時ほど聞き、複雑な表情で先ほどの近習侍に連れられ、今度は藩邸内にある道場に向かった。

勿論剣術道場である。
将軍吉宗は武芸を奨励したことでもあり、御三家をはじめ諸藩も形だけにせよ武士の本分は剣術にあるとし、稽古を勧め促していた。
それに、柳生石舟斎宗厳の孫、兵庫助利厳が尾張徳川家に兵法師範として出仕以降、柳生新陰流は尾張藩に庇護されその正統を受け継いできた歴史があった。
春貞は二百畳以上もあろうと思われる立派な道場に足を踏み入れた。
数十人の家臣たちが打ち合い稽古をしていたが、春貞は履き物を脱ぎ式台へと上がった。そして見所の神棚に拝礼しそこに座した。
ふと袴姿の凛々しい稽古着姿の人物に目が移ったが、春貞にはそれが先ほど会った江戸家老の一人娘、永井幸江だとすぐにわかった。
髪は玉結びの変型で飾り物はつけていなかった。やはり剣術をやるには島田では邪魔なのだろう。そして話しに聞いていたとおり剣術の腕はなかなかのように思えたし、父親に似ず美形だった。
そこに師範代だという酒井清之助と名乗る男が春貞の前に正座し平伏した。どうやら春貞の正体を聞かされているようだった。
「酒井どの、それがしは一介の浪人でござる。貴殿に頭を下げられる謂われはご

ざらん。どうぞお手をあげてくだされ」
「あなた様のご身分は御家老から聞かされており申す。早速で恐縮ながらすでにお聞き及びのとおり、家臣数人とお手合わせを願いたく存じます」
酒井は春貞を直視し丁寧に願った。
どうやらすでに舞台は揃い筋書きが描かれているようだ。
春貞は仕方なく頷き稽古着に着替えるべくその場を立った。
久しぶりに真っ新の稽古着に着替えた春貞だったが、首巻きは外していなかった。
「いいもんだな」
と独り言をいいながら再び道場に入った。
「永井幸江、伊藤文也、金子基次郎の三名でませい」
酒井の命で3名が一礼して春貞の前に立った。
そのとき、永井幸江がつかつかと春貞に近づき、いきなり声を上げた。
「その首に巻いているものを取れ。神聖なる道場で無礼であろう」
その一言で道場が凍り付くように静かになった。

「それがしは狸親父、いや家老に頼まれてこの場に立っているのです。お気にめさないのであれば幸いなこと、帰らせていただこう」
春貞はくるりと向きを変えて玄関に向かった。
慌てたのは酒井と近習の伊藤虎次郎だ。
「待ってくだされ春貞殿。この通りでござる」
「お待ちくだされ。お詫び申し上げる。今一度」
悲痛な声を背に聞きながら春貞は振り向きもせず、
「おかげで嫌なお役目をせずに済んだ。幸江さんとやら、ありがとうよ」
と捨て台詞を吐きそそくさと稽古着を脱いで尾張藩上屋敷の剣術道場を後にした。
永井幸江は、なにが起こったのかわからず呆然と道場の中央に立ち尽くしていた。
春貞はその足で久しぶりに金杉の親分の店に入った。
時刻はすでに暮れ六つを過ぎていた。
「邪魔するぜ。酒をくれないか」
春貞の声を聞いて看板娘のお佳が驚いた顔をして奥から出てきた。

「どうしたの春さん。荒れてるわね」
「おう、実に肩が凝るばかばかしい連中と付き合っていたんで腐ってるんだ。冷やでいいから早く頼む」
奥からお勢も顔を出し、
「楽しくないお酒はいけませんよ春さん」
と宥めた。
「おかみさん、でもね、酒でも飲まないとやってられないときもあらあな」
春貞はふて腐れた態度で答えた。
お勢は春貞の前に座りその顔を覗き込むようにして、
「そういうけど春さん、私なんか飲まないとやってられないことばかりよ」
にっこりしながら春貞の肩を叩いて奥へ引っ込んだ。
「ちげえねえ」
春貞も少しは溜飲がさがったのか、心配そうに立っているお佳に笑顔を送った。
隣の席にいた四人組の駕籠舁きたちが春貞を知っているらしく、
「養生所の丹那、なにがあった。おれっちが聞いてやろうか」
と声をかけた。

「すまん。もういいんだ、ありがとうよ」
そういったとき、暖簾が揺れた。
春貞が顔を上げるとそこにいたのは永井幸江その人だった。
一瞬怪訝な顔をした春貞だったが、
「何しに来た」
と声を荒げた。
駕籠舁きたちやお佳も何ごとかと新客を注視した。
「ななんだ、女のお侍か」
駕籠舁きの一人が驚いたように声を出した。もう一人が、
「それに器量よしだ」
暖簾の前で立ち尽くしている女武芸者を見るに見かねたお佳が、
「突っ立ってないで、こちらにお座りよ」
春貞の前の席を指さした。
春貞はそっぽを向いたままだ。
背を伸ばしたまま座った幸江は軽く頭を下げながら、
「先ほどはご無礼いたした」

と無表情でいった。
春貞は顔を背けたまま杯に残っていた酒を呷りながら静かに、
「帰りな」
といったが幸江は動こうともせず、
「事情を知らなかったとはいえ申し訳ありませんでした」
先ほどよりは詫びに本気が感じられた。
無責任な駕籠舁きたちが春貞の気持ちを斟酌もしないで、
「お侍さま、いやお嬢さまといった方がいいのかな。とにかく仲直りしてさ、一杯やってくんな」
と自分の杯を差し出したが、幸江は会釈をして断り春貞に、
「あなたはお強いのですか」
どこか場違いな問いを発した。
なぜ永井家老が春貞を呼んだのかにはいくつか理由があった。
まず、春貞に幸江と手合わせを願ったのは、幸江の剣はものになるのかを確認して欲しいという依頼だった。

幸江は十七歳、年頃の娘だ。筋が悪いのなら剣を諦めさせて嫁にいかせたいという親心だと主水は主張していた。
「師範らが一番よくご存じでは」
との春貞の問いに主水は、師範や師範代に問うても家老の娘だということで辛辣なことは言わないだろうと切り捨てた。
そしていまひとつは藩邸の者たちの腕も試して欲しいと願った。
「いざというときに殿のお役に立つ者がどれほどいるかを知っておきたいのでな」
古狸はそういいながら眉をひそめた。
そして最後の頼みは春貞にとって軽々しく首を縦に振れない重大事だった。このことこそ過日藩主徳川継友から、
「頼みましたぞ、春貞どの」
と願われた件だった。
顔を上げた春貞は初めて苦笑をみせながら、
「酒はあまり強くないが剣術は強いぜ。少なくともお前さんよりはな」
一瞬むっとして腰を上げかけたが幸江は座り直し、

「是非お手合わせ願いたい」
とこれまた頭を下げた。
「永井の古狸、いや失礼、お主の親父だったな。その家老にお主と立ち会ってくれと頼まれてわざわざ堅苦しい場所に出向いたのを反故にしたのはお前さんだぜ」
「父が嫌いですか」
幸江は真面目な顔で春貞に問うた。
「ああ、でえ嫌いだな。そもそも俺は家臣ではない。家老だか狸か知らんがあれこれ言われる筋合いではないんだ」
春貞は酒が回ったのか饒舌になってきた。
「随分ないいようですね」
幸江がふくれっ面したとき、
「斬り合いだぁ」
と言う声が重なった。
春貞は着流しの裾をまくり上げ外に飛び出し、幸江が続いた。
あたりは薄暗くなっていたがまだ遠目が効いた。見れば数人の侍に深編み笠を被

った一人の武士が対峙していた。
「待て、待ちやがれ」
すでに太刀を抜きいまにも斬りかかろうとする刃の下をくぐり抜けるように春貞は輪の中に飛び込んだ。
「多勢に無勢、卑怯な奴らだ。ともかく町屋の人たちが迷惑するから刀を引きな」
そう言いながら春貞は深編み笠の男を横目で見た。
「あっ、うえさ…いや、得田さま」
それは正しく八代将軍徳川吉宗だった。
お忍びで養生所の様子を覗きにきたのだろうか。
吉宗はばつの悪そうな顔をしながら無言で自分の身分は明かすなといっていた。
頷きながら春貞は、
「どうしてもやるというなら俺が助太刀しよう」
そう身構えたとき、幸江が声を上げ、
「私も助太刀いたす」
と飛び込んできた。

その一瞬を捉えて刺客の一人が袈裟懸けに斬り込んできた。あっと叫ぶ幸江を春貞は肩で突き飛ばし刃の下に身を躍らせたと思ったら、刺客は大きく宙を飛んだ。

「ここは道場じゃあねえんだ。怪我では済まないぜ」

春貞はどこか優しい声でいい、

「お侍さまをお守りしな」

と幸江にいった。

吉宗は深編み笠を外しながら刀も抜かずに平然としていた。その姿を不思議そうにながめながら幸江は吉宗をかばうようにして初めて刀を抜いた。

尾張藩上屋敷の新陰流道場では師範代と同格の腕とまでいわれていた幸江だったが、まだ人を斬ったことはなかった。

二人の刺客が同時に春貞と幸江に向かってきた。丸腰の春貞だったが体を低くし両腕を交差した刹那、刺客の刀を奪いつつ相手は腕を折られ転げ回った。一方の幸江は初手の攻撃を跳ね返し青眼に構え直したが吉宗の口から、

「見事な無刀取のわざよ」

という声が発せられた。

そのときそれまで姿を見せていなかった男が立ち現れ、掠れた声で呟いた。
「らちがあかん。俺が仕留めよう」
あの痩身の侍だった。さすがの春貞も手にした刀を脇構にして痩身の男の前に立ち、
「今日の俺は刀を持ってるぜ。やるかい」
と煽った。
男は無言で鯉口を切り、一度吸った息をむっと吐きながら間合いを詰めたとき、ぐはっと喀血して両膝をつき、刀を取り落としながらそのまま動かなくなった。
途端、仲間の刺客たちが逃げ出した。
大量の血を吐いた男はさすがに起き上がろうとはしなかったしその顔には死が迫っているように見えた。
「幸江、そこいらから戸板を借りてこい。養生所に運び込むぜ」
無抵抗の刺客を戸板に乗せ、春貞と幸江そして遠巻きに見物していた二人の男に手伝わせて養生所に運び込んだが、なぜか深編み笠の男も後ろからついてきた。
養生所の診療は暮れ七つ(午後四時頃)で終わるが、小川笙船をはじめ林良適、そ

して昨年暮れから期間限定で手を貸すようになった外科医の八木如水らが診療記録の残務整理や薬量の確認などのためにまだ立ち働いていた。
戸板が病人口から運び込まれると弥三郎が駆けつけ、手伝いつつ診察部屋へと運び込んだ。
笙船は何ごとかと出てきたが、後ろから顔を出した吉宗を見て驚愕した。
笙船は養生所の肝煎を命じられた際、御目見の身分も与えられ一度だけ将軍に謁見したことがあったからだ。
吉宗は騒がずそのままにせよと無言で意志を伝えた。
笙船は丁寧に頷きながらも平静を保ち、
「病人を診る」
と診察部屋へ向かった。
春貞は戸板を運び込む際、一番後ろに控えていた得田新之助がほんの一瞬弥三郎と視線を交わしたことを見逃さなかった。しかし自分の胸に納めて気づかない振りをした。
「この御仁か」
笙船は痩せ細った侍の脈を取りながら春貞に問うた。

無言で頷いた春貞は、
「先生、容体はどうです」
と聞いたとき得田新之助が診察部屋に入ろうとした。
笙船はすかさず得田にこの患者は労咳であり感染する疑いがある病だから入らないようにと伝えた。
得田新之助は、自分を襲った黒幕の正体を知る上で重要な人物であり本人と話しをしたいと思ったようだが、笙船に言われ素直に医師たちの控え部屋で待つと出て行った。
後に残った永井幸江はことの成り行きに混乱し玄関に座り込んでいた。
笙船が気を失っている侍の襟を開くとあばらが浮き出た痩せ細った胸が見えた。
笙船は左右に首を振り、命が尽きるのもそう遠くないことを示した。
そのとき男がうっすらと目を開き一瞬飛び起き刀を探る仕草をともがいた。剣客の性であろうか。しかし体力がそれを許さなかった。
笙船は春貞の手を借り、男の上半身を起こし薬用人参を主成分とする薬を飲ませようとしたが、男は力なく拒んで咳き込んだ。

「安心せい、ここは小石川養生所じゃ。お主の姓名も何をしようとしているかも今は聞かぬ。だからまずは心配せずここで養生するのじゃ」
言い含めるような笙船の言葉を男は虚ろな表情で聞いていた。
診察が一段落したのは半時ほどの後だったが、笙船は手や顔を洗い、身支度を調えて春貞と一緒に控え部屋へ入った。
途中春貞は吉宗が得田新之助と名乗っていることだけを小声で知らせた。

控え部屋には得田新之助と永井幸江そして医師の林良適が賄中間の八重が煎れた茶で一息いれていた。
無論永井幸江も林良適も得田新之助が将軍吉宗などとは知らず、先ほど襲われた際のあれこれなどを気楽に話していた。
笙船が襖を開けると皆が注目した。
得田新之助が一同を代表するかのように、
「容体はいかが」
と聞いた。
「今度大量喀血したら命はございませんな」

笙船は医者としてまずは治療を尽くすことを申し述べた。
それを聞いた得田新之助は、
「まあ、あやつを責めたところで吐く男ではあるまい。先生の申すとおり喋る気になるまで待つしかないな」
自分に言い聞かせるように呟いた。そして、
「また様子を聞きに来る」
と刀を右手にとって腰に差した。
「得田様、すでに夜も更けました。満足なお持てなしはできませんが、お泊まりいただくか、春貞に同道させますでいかがでしょうか」
笙船は将軍吉宗に万一のことがあってはと考えそう願った。
また永井幸江も一人で帰ると言ったが、こちらは春貞が万一のことがあればあの狸親父に叱られるからと養生所に泊まるよう説得した。
辺りはすでに暗闇に捕らえられていた。
結句永井幸江は小石川養生所に泊まることを承諾し笙船はその旨を筆にしたためめ、弥三郎に尾張藩上屋敷に届けるよう命じた。

笙船の勧めにもかかわらず得田新之助は一人で帰ると主張し立ち上がった。春貞は得田新之助こと徳川吉宗には常に影護衛がついていることを承知していたことでもあり、笙船に目配せしてこれ以上の留め立てはしないことにした。

六

翌朝、養生所はいっぱいの朝日に照らされた。

春貞は井戸で顔を洗い、朝飯の時刻まで薬園に続く広い場所で一人木刀を構えては振り、全身を意のままに馴染ませる稽古をしていた。

春貞は尾張柳生新陰流免許皆伝の腕前だが、最近はほとんど道場には通わずひとり新陰流に拘らない工夫をも続けていた。

気配を感じて振り向くと永井幸江がやはり木刀を左手に持ち春貞の動きを真剣に見ていた。

「春貞どの、おはようございます。せっかくですからここで一手稽古を付けてい

ただけませんか」
幸江のものいいからは昨日のような角が消えていた。
「ああ、おはよう。そうだな、いつも一人では面白くないから付き合ってもらおうか」
春貞の答えに幸江の顔がぱあっと明るくなった。
また断られると思っていたようだ。
「お前も俺も流儀は同じ尾張柳生新陰流だが、俺の太刀筋はいささか変わってるからそのつもりでな」
「はいっ」
と幸江は返事をし、木刀を青眼にかまえた。
春貞はまだ木刀を下げたままだが、
「ふむ、確かになかなかの腕前のようだな。しかし昨日もいったが、真剣勝負となれば道場の稽古とは違い、立ち会うどちらかまたは両方が大怪我あるいは死ぬことになる。だから俺は普段丸腰だ。これは究極の活人剣のつもりなんだがいまだに迷いの中だ」
そういいながら幸江に向かいながら静かに体を半身に構え、

「いざ」
と声を上げたが、木刀は下げられたままだった。
幸江は打ち込もうとしたが、春貞の姿が下げた木刀に溶け込むように感じられた。
打ち負かすには僅かに目立つ肩を打つしかないと思った。
朝餉や診察の準備をする中間数人が思わず縁側に出て二人の緊迫した睨み合いを無言で眺めた。
春貞のこれほど真剣な表情をこれまで明るい場所で見たことがなかった。
仕掛けたのは幸江だった。
「えいっ」
幸江は裂帛の気合いと共に春貞の肩口に木刀を振り下ろした。
並の使い手ではない。女とはいえ尾張藩上屋敷の道場では一、二を争う腕前の太刀筋だ。
縁側で見ている八重たちには春貞の肩の骨が砕けたかに思えた。
「ああっ」
と声が上がったそのとき、体ごと春貞の木刀が唸ったと思うと、幸江の振り下ろ

した太刀を制して左に流し、そのまま春貞の切っ先が幸江の木刀の上を滑り喉元一寸で止まっていた。

「まいりました」

呆然とした幸江は頭を下げたものの、先手を取った自分の太刀が後から動いた春貞の剣に何故破れたかが分からなかった。

しばしうつむいた後に、

「春貞さま、後で先を取るという合撃（がっし）ですか」

と問うた。

「そういうことだ」

春貞は構えを解きながら、

「石舟斎さまが流祖の口伝を著した『新陰流斬相口伝書事』によれば、まず『身を一重になすべきこと』とあるな」

「嗚呼、やはり刀のなかに身を隠すというあれですね」

「そうだ。『刀中蔵』といったな。相手から見て投影の姿を小さくするわけだな」

幸江の春貞に対する呼びかけが殿から様に変わっていた。

養生所の医師たちはもとより中間たちの食事が終わると入所者たちの診療の準備が始まる。

昨日までの診断あるいは治療の経過などを確認しておかなければならない。

特に岡丈庵と林良適は基本的に一日交替だったから、昨日までの処置がどういうものだったかを書き留めた診療覚書に目を通す必要があった。

春貞は笙船の許可を取り、昨日運び込んだ男がいる病人部屋を尋ねた。そこにはその男と同じ労咳を患っている甚助と二人が寝かされていた。

男は観念したのか、あるいは体が動かないのか、医師や看護中間たちのいうことを聞きほんの少しながら粥を食べたという。

ただし、俺に高価な人参の薬湯など無駄なことだと薬を飲むことは拒否を続けているという。

春貞はつとめて明るく足音を立てながら部屋に入り、

「おはようござる。いかがですかな」

と声をかけた。

頬が落ちたその瞼が少し開き一瞬不思議なものでも見るような表情をした。
「お主か、わしを運んだのは」
か細くしわがれた声で問うた。
「そうです。もうひとり、お手前が斬ろうとされたお方と共にです」
男の表情がふっと崩れたように思えた。
「皮肉なものよのう。わしが殺そうとした男の意志で建てたのがこの養生所だと聞いた。わしなどそのまま放置してくれればよかったのだ」
といって少し咳き込んだ。
「あまり喋らない方がよいと聞いてます。あと是非薬は飲んでいただきたい」
春貞の願いに男は、
「金で人を斬ることを受けたのもこの身をなんとか持たせたいと思ったからじゃ。労咳の薬は高価でな。しかしもう手遅れのようじゃ」
しばらく両眼を閉じた後に再び春貞を見て、
「頼みがある。後で良いが筆と墨があれば借りたい」
と願った。
「承知した」

そう答えて春貞は病人部屋を後にした。

七

季節は花の盛りとなっていた。そして養生所裏庭にあるしだれ桜も満開だった。
春貞が尾張藩江戸上屋敷の道場から立ち去ってから一ヶ月ほどたった。
その後も永井主水の名がある書状が頻繁に届いたが、春貞は中身を読みもせず診療部屋の薬箱に放り込んでいた。
一方、永井幸江が頻繁に養生所を訪れるようになっていた。
最初は、
「父から書状の返事をいただいてこいといわれました」
といっていたものの、春貞が一向に腰を上げないからか次第にそのことには触れなくなっていた。
そして永井幸江が養生所を訪れる度、裏庭で春貞との剣術の稽古が見られるよう

になった。
無論いつもいつも春貞が養生所にいるわけでもないが、訪れて春貞がいないと知ると幸江は金杉の定吉親分の店や室町のい組の政五郎のところまで追いかけた。
「おいおい、金魚のなんとかじゃあるまいし、そう追いかけ回されては迷惑だぜ」
春貞は満更でもない気持ちを気づかれないよう乱暴な口調でいった。
「私は道場の稽古だけでは限界があると知りました。それを教えたのは春貞さまです。いわば私の剣術の師匠ですから弟子が師匠のお伴するのは当然のことです」
可愛い顔してそんな言われ方をすると春貞も邪慳にできなかった。しかし春貞にとって幸江は一人の女というより妹のような存在だった。
春貞はいう。
「いいか、柳生新陰流の袋竹刀による稽古が無意味だというのではない。稽古で命を落としてはなんのための稽古か分からぬからな。ただし以前にもいったが刀は本来人の命を奪う武器だ。それを忘れては剣術はただの芸になってしまうだろう」

「芸ですか」
幸江が少し不満そうな顔をした。
「そうだ。荒っぽい踊りみたいなものさ。それにすでに世の中は戦乱の世では無く武士の生き様も大きく変わったしな」
春貞は笑った。
幸江は春貞の笑顔が好きだった。だからその笑顔を見ていると怒りとか不満と言った感情がふっと消えて行った。
「例えばだ。剣禅一致という境地があるな。しかしまだ尻の青い俺がいうのもおくがましいが、柳生流とて剣を人殺しの武器とするなら、禅を取り入れた事でどこか弱くなったと俺は思っている」
何かいいたそうな幸江を、
「まあ、聞け」
と制止して春貞は話しを続けた。
養生所の縁側で春の日射しを浴びながら春貞と幸江の剣術談義が続いていたが、賄中間の八重がそれを見て、
「あらまあ、あのお二人はお似合いだよ」

と呟き、庭掃除をしていた弥三郎が微笑んだ。

吉宗が再び襲われた日から十日ほど過ぎた夜半のことだ。春貞は殺気を感じ音もなく寝床から飛び起きた。

途端に養生所の雨戸が破られ抜刀した数名の男たちが玄関から介護人部屋になだれ込んだ。

春貞は寝間着姿のまま左右から斬り込んできた男の一人に自分の体を押しつけ鳩尾を打つと同時に盾とした。一瞬ためらったもう一人の男に気絶した男を投げつけながら自ら畳に身を投げ、その勢いで相手の足を払った。

もんどり打った男は柱に頭を強打し悶絶したが、それを確かめる間もなく春貞は御番医師部屋に飛び込んだ。

今日は林良適 が寝泊まりしているはずだったからだ。

御番医師部屋には壁際に良適をかばいながら匕首で防戦している弥三郎がいた。

春貞の姿を見た弥三郎は元気づきまた一人と暴漢の手の腱を断ち切り戦意を失わせていた。

弥三郎にここはまかせたと目で合図を送った春貞は無防備の病人部屋へと走っ

た。
八人が入所し寝ていた部屋は何ごとかと驚愕し怯えた入所者たちの姿があったが全員無事だった。さらに襖を開けると労咳で寝ていた甚助が声も出せないといった姿で震えていたが、あの男の姿がなかった。
「奴の仲間が連れ去ったか」
一瞬春貞はそう思ったが、病人部屋の裏庭を見るとそこには三人の無頼漢が倒れ、縁側にはなんとあの男が刀を持ったまま吐血し絶命していた。
後で奉行所と林良適、春貞たちが検屍した結論は労咳で入所した男、あの将軍吉宗を襲った男が暴漢の一人から刀を奪い、三人を討ち果たした後に喀血し死に逝ったものと結論づけた。
さらに男の布団の下には小川笙船宛の書き置きが残されていた。
「しかしな、あの寝たきりだった男が刀を振りかざした三人を斬り殺したとは信じられん。おかげで入所者に怪我人が出なかったわけじゃが」
林良適と小川笙船はその後の言葉が出ず黙り込んだ。
「役に立たなかったか」
春貞は懐に忍ばせておいた笙船からもらった薬の包みに触れながら呟いた。

暴漢は全部で十人ほどいたと考えられた。ただし逃げた連中に関しては正確な人数は不明だったものの、裏庭に死亡していた三人を別にして春貞に手足を折られた二人、そして御番医師部屋で弥三郎に傷つけられた二人の計四人が捕らえられたことからことの一端が分かり始めて来た。

養生所運営、しいては存在そのものを脅かす輩がいることは奉行所でも掴んでいたが、まだ解決の核心にまでは至っていなかった。しかしこう何度も無法を働かれては町奉行所管轄下にある養生所だからして奉行所の対応の遅れを批難する声が幕閣からもあがってきた。

いつまた同じ事が起こるかも知れないという点も指摘され、その不安が一層入所者を怯えさせただけでなく、新たな入所者が増えない要因と考えられた。したがって早急に事件の解決と首謀者の捕縛が求められた。

ただし得田新之助、すなわち将軍吉宗が二度も襲われた事件に関しては春貞らから大岡忠相に届けられたが、こちらは容易に動けることでもなかった。

忠相の頭が痛い日々が続いていた。

第三章　金魚の糞

一

春が過ぎ若葉が美しい季節となっていた。
幸江の父で尾張藩江戸家老永井主水にとって娘の幸江は溺愛し育ててきたつもりだが、早くに幸江の母すなわち主水にとっては正妻を亡くし男手で育てたため、年頃の娘の処遇に頭を悩ませてきた。
それがこのところ幸江の機嫌が良いのを父として心から喜んでいた。ただしこれまで藩邸から外に一人で出かけるときは家臣が一人同道するのがしきたりだったが、幸江が強く嫌ったために主水も仕方なく容認するようになっていた。
相変わらず春貞が養生所にいるとわかると永井幸江は木刀を手にして現れた。そもそもは剣術の稽古をつけてもらうためだが、春貞の後を金魚の糞のごとくつきまとい、市井の様子に目を見張ることが楽しくて仕方がなかった。

何よりも春貞と一緒にいたかった。
幸江は今日も養生所の裏庭で剣術の稽古をつけてもらうつもりでやってきたが、生憎小雨が降ってきたため中止せざるを得なかった。
なにしろ養生所の建物内に稽古の場所などなかった。
「稽古ができないから俺はちょっと出かけてくるぜ」
春貞は立ち上がった。
その姿は相変わらず着流しに首巻きをして腰にはなにも帯びてはいなかった。
「ご一緒します」
幸江も刀を腰に差しながらそういった。
「おいおい、お前がいると俺は吉原の大門もくぐれないではないか」
幸江は春貞の言葉を真に受け、
「えっ、春貞さまは吉原にいかれるのですか」
とふくれた。
ただし幸江は春貞に「お前」と呼ばれるのを怒るどころか喜んだ。
そんな二人の様子を見ていた小川笙船は、
「春さんや、冗談はさておき、一緒に連れて行っておやり」

とこともなげにいう。
勿論笙船は幸江がなにものなのかについて春貞から聞かされていたから一緒なれば幸江の身の安全も図れると考えてのことだった。
「しょうがねえな。ところでお前は音曲(おんぎょく)はやらんのか」
「音曲ですか」
幸江はとまどったが、嫌いとか知らないといえば連れて行ってもらえないと察したのか、
「幼少時に少し琴をやらされました」
春貞の次の言葉を心配げにそう答えた。
春貞が向かおうとしていたのは日本橋富沢町だった。したがって小石川からは近道を通っても一里半はあった。
当時の一里は三十六町で三・九二七キロメートル換算になるが、実際にはかなり曖昧な感覚だった。
人の歩く速度は様々だが一般的には時速四キロメートルとされる。しかし例えば現在不動産物件でよく聞く「駅から徒歩〇分と」いう表現は、時速四・八キロメ

ートルを前提にしているという。したがって、やや速足で歩く速さだと考えるべきだが、当時の人たちは歩き慣れていた。
春貞と幸江が養生所を出るとき、雨は小降りになっていたが傘は必要だった。
「笙船先生、傘を一本お借りします」
「えっ、一本だけですか」
幸江が問うた。しかし傘は貴重品であり、養生所にも余分な傘は置いてなかった。
「仕方ねぇ。相合い傘で歩こうか」
春貞に伝法に言われ、幸江は赤くなりながらも無言で頷いた。
その二人の背を笙船は嬉しそうに眺めていた。
幸江は小袖に袴の男装姿で二本差しではあったが、年頃の華やかさを隠すことは出来なかった。
そんな若い男女が白昼一本の傘の下、肩を並べて歩くのはやはり目立った。
なにしろ当時、武家や町人の夫婦といっても離れて歩くのを常とした。女と歩くのは柔弱とされたからだ。
勿論二人は夫婦ではないものの、大いに人の目を引いた。

それでも神田川に突き当たるあたりまでは雨もあって人通りも少なかった。
川沿いに二人はゆっくりと歩きながら剣術談義をしていた。
春貞も野暮だとは思ったが、他に共通の話題が思い浮かばなかったからだ。
「そういえば春貞さま。あなたがいつも丸腰でおられるのは究極の活人剣のおつもりだと言われましたね」
幸江も剣術の話題ならついていけた。
「ああ、言ったな」
「得田殿とかいわれる方をお守りした際にも丸腰で相手の剣を奪われましたが、あれが無刀取りですか。柳生新陰流の奥義と聞き及んでおりますが」
幸江は先般目の前で春貞が相手の刀を一瞬で奪った動きを思い出しながら聞いた。
春貞は難しい顔をしたものの、しっかりとした口調で答えた。
「いいか。無刀というのは些か誤解されているようだ」
「誤解、ですか」
「そうだ。無刀とは、かならずしも相手の刀を奪うという技ではない。さらにいえばだ、奪って見せて『どうだ凄いだろう』と威張るものでもない。

本当の所は自分に刀がない時でも相手に斬られないというのが無刀だ、と俺は思っている。
ただし、家伝書無刀之巻には『無刀は当流にこれを専一の秘事とするなり』とあるからして俺などはまだまだ入り口を知ったに過ぎん」
そんな話しをしながら歩いて来たが、雨は小降りになって来たもののまだ止む気配はなかった。
「おっと、昌平橋だ。腹が減ったならこの先には飯屋も多い。どこか寄っていくかい」
春貞が笠を上げ、周囲を見回しながら気を遣った。
「私は大丈夫です。昼は抜くことが多いですから」
そう答えたとき、前方から楊枝を咥えただらしない風体の男二人が立ちふさがった。
「おう、こっちは女の二本差しかい。真っ昼間から見せつけてくれるじゃあねえか」
酒でも入っているのかからんできた。
この辺は小石川あたりとは違い人通りも多く、橋幅の狭い昌平橋を行き交う人々

が心配そうに足を止めた。
無頼漢の一人がにやつきながら幸江に一歩近づいた刹那、幸江の左手が刀の鞘ごと突き出され、柄頭が男の鳩尾(みぞおち)に吸い込まれた。
声も上げずにくたくたと崩れ落ちた仲間を見て相棒が逆上し隠し持っていた匕首を抜きつつ春貞を睨んだ。
丸腰の春貞の方が御しやすいと見たのか、
「やい、兄さんこの礼は高くつくぜ」
と匕首の刃を上にし両手で腰だめにした。
見物人たちは匕首を見て声にならない悲鳴をあげたが、春貞は傘をさしたままにこにこしていた。となりの幸江も男を注視するより春貞がどう動くのかを見上げていた。
「弱い奴ほど刃物を見せたがるものさ」
男が勢いよく体ごとぶつけるように突いてきた。
傘が開いたままふわりと宙を舞ったと思ったら、男の刃先を寸毫右に交わした春貞の両手が男の手首にかかった。

途端、男の手から匕首が飛び悲鳴があがった。
手首の骨が折られたのだ。
舞った傘がこれまたふわりと落ちて春貞の手に戻った。
橋の上でどうなることかと見守っていた人たちから歓声があがった。
痛さにのたうち回る男をそのままにして春貞は、
「これで当分悪さはできねえだろう」
と呟きながら幸江に、
「いこうか」
と傘を向け、優しい言葉をかけた。

春貞が向かった先は日本橋富沢町裏通りにある音曲の師匠宅だった。よく磨かれた格子戸をがらりと開けると障子ごしに三味線の音と共に粋で涼しげな声が聞こえた。
「咲いた桜に
なぜ駒つなぐ〜」

「ごめんよ。おっしょさんはいなさるかね」
春貞が声をかけた。
唄が止み、
「あら、春さんかい。中に入ってしばらく待っておくれ」
何とも艶っぽい声が響いた。
「駒が勇めば
花が散る〜」
と師匠の声に合わせるように男の声が重なった。
ここは小唄(端唄)を教えるお吉の家なのだ。
春貞と幸江が二畳ほどの狭い待合部屋で座っていると、
「おっしょさん、ありがとうございました」
と身だしなみが行き届いた若い男が出てきた。その背に、
「若旦那、次までもそっとさらっといてくださいまし」
と言われた男はばつの悪そうな顔をしながら出ていった。そして、
「春さん、お入り下さい」
三味線を爪弾きながら美声が響いた。

「ごめん」

春貞が障子を開けるとそこは四畳半ほどの狭い稽古場に路考茶(ろこうちゃ)か、渋い小袖に平十郎結びの帯が粋な、そして抜けるような肌の白い女が三味線を携えて座っていた。

後ろから入ってきた幸江を見て、

「あら、女子のお弟子をお連れくださいましたのか」

と三味線を畳みに置きながら女がいった。

「師匠、こちらは永井幸江さんだ。今日は金魚の糞つきだがまあ勘弁してくれ。いろいろと事情があってな。

こちらは俺の音曲のおっしょさん、お吉さんだ」

どこから見ても市井の娘とは思えないお吉の美しさに幸江は赤くなりながら、

「永井幸江です。よろしくお願いいたします」

右手に携えた刀を後ろに隠すようにして置き、両手を膝に揃えて頭を下げた。

「これはご丁寧に、吉です。お旗本のお姫様とお見受けしましたがやっとう（剣術）をおやりになりますか」

お吉は優雅に挨拶した。
「師匠、幸江は剣術一点張りで三味の『二上がり』も『三下がり』も区別つきませんや」
そう言われて幸江は下を向いた。
「春さん、どうやら今日はお稽古でおいでになったのではありませんね。例の件ですか」
「はい。嫌なお願いを押しつけて済まない」
幸江にはなんのことか分からなかったが、三味線の稽古に付き合わされると思ったので少しほっとしていた。
「おっしょさん、幸江なら一緒に話しを聞かせてもらって大丈夫だ。なにか分かったかい」
お吉が真顔になりながらも頷いた。
春貞とお吉の話しは半時も続いた。ときどき幸江が驚きの声とも怒りの声とも取れる声をあげた。
帰りがけ、笠を持ち先に出た幸江を確かめながら立ち上がったお吉は春貞の耳に歯を当て、

「次はお一人でいらしてくださいな」
とささやいた。
「幸江、いうまでもないがいまの話しは内緒だ。まかり間違えば人の命にかかわることでもある。いいな」
お吉の家を後にしながら春貞は念を押した。
「承知してます」
幸江は春貞と秘密が共有できたことをどこか喜んでいる様子だった。

二ヶ月程前、春貞が三味線の稽古にとお吉を尋ねたとき、待合部屋にいた四十がらみの医者風の男がいた。後でお吉に聞いたところによれば日本橋界隈の仲間七人で組合を作り、その元締めを務めている川上堂庵という本道の医者だという。一人で来るときも多いが医者仲間と思われる杉山玄信という医者と連れ合って稽古にたちよることもあった。
その名を聞いたとき春貞はやっと問題の糸口が掴めるかも知れないと思った。なぜならこれまで狼藉者の依頼主に結び付く手がかりがなかったからだ。
過日養生所が襲われた際に捕縛した四人を厳しく詮議したものの、金を渡した男

が誰なのか名も知らないことがわかっただけだった。南町奉行所も人相書きをと考えたが口元には手ぬぐい、傘をかぶっていたとかで依頼主は不明のままだった。

捕縛された四人たちは酒場で飲んだ帰りに男二人に呼び止められ、

「ひと稼ぎしないか」

と一両小判をちらつかされその気になったという。そうして集めた十人ほどで養生所を襲ったということらしい。

勿論奉行所も町医者が怪しいと探索を続けたものの確証が得られずじりじりしているところだった。

お吉が春貞の依頼を受け次ぎに堂庵と玄信が稽古に来たとき、その後に他の弟子との約束がなかったこともあり、

「たまにはよろしいでしょう」

と酒を出しそれとなく近況を聞くことを試みた。

堂庵と玄信にしてみれば、もしかしたらお吉は自分たちに気があるのかと良い気分になり酒も入って喋りすぎたようだ。

「お医者さんに繁盛いうたらいけませんが、お忙しいようですね」

お吉の巧みな話しに連られ、玄信は口が軽くなった。
「医は仁術（じんじゅつ）というな、師匠」
「はい。『医は仁術なり。人を救ふを以て志とすべし』とはかの貝原益軒先生の養生訓にある有名なお言葉ですな」
「おっしょさんは物知りじゃな。医術のことを知りたければいつでもわしのところにおいでなされ。手取り足取りお教えするでな」
お吉の酌に気をよくした二人は、小石川薬園に出来た養生所が自分たちの志の邪魔をしているという一方、養生所を公儀の力を傘にして薬園で栽培している薬の効き目を患者に試しているけしからん施設だといい、近々天罰がくだろうぞと上機嫌だったという。
春貞にしてみれば、川上堂庵と杉山玄信の名を知っただけでも収穫だった。
「幸江、俺はこれから南町に寄ってくる。お前は日の高いうちに今日は戻れ」
「私も」
といいかけた幸江に春貞は、これは師匠の命である。だから今日は素直に帰れと諭した。

幸い南町奉行所には気心が知れた同心伊丹鉄太郎がいた。
春貞の話しを聞いた伊丹は上役の佐竹弥五郎の許しを得、同僚たちや探索方および金杉の定吉親分らの手を借り、川上堂庵や杉山玄信ら組合の医者らが集まる日時と場所を探るべく手配りをすることになった。
春貞にはもうひとつ懸案のことがあった。それはあの労咳の刺客が喀血して死んだとき布団の下から出てきた小川笙船宛の遺書である。
そこには笙船と春貞に礼が述べられていただけでなく将軍吉宗を襲わせた人物の名が記されていたのだ。
考えるまでもなく二度にわたる吉宗襲撃にはおかしな点があった。それは吉宗が密かに得田新之助となって市井に出歩くのを何故知っていたかという事実だ。
貧乏旗本の冷や飯食いと名乗る得田新之助の正体を知る人はほとんどいなかったから、吉宗が新之助として江戸城の外に出ることを知る人物が関与している疑いは吉宗自身はもとより南町奉行所の大岡忠相をはじめ春貞らの知るところでもあった。
しかしことは町医者を調べるようにはいかない。もし幕閣の関与があるならいく

つかの藩が取りつぶしになる可能性もあることだし、そもそも町方の探索には限界があったため時間がかかっていた。
ただし労咳の刺客が書き残した雇い主は武士ではなかった。それは日本橋の大店、両替商「相模屋」の主清右衛門の名だった。

皐月の初旬、事態は急展開した。杉山玄信の診療所床下に潜り込んでいた金杉の金次がこの月の十日に神田の料理茶屋「いろは」で仲間たちの会合が開かれることを突き止めた。
奉行所はその機会を逃さず七人の医者が集まった席にお縄となった四人のうちの二人を引っ立てて座敷に乗り込んだのだ。
いささか荒っぽいお勤めではあったが二人は川上堂庵の顔は知らなかったものの、声には聞き覚えがあると証言しただけでなく、そこには新たな襲撃を企てるために雇った浪人二人も同席していた。
「それがし話しは聞かされたがまだ金を受け取ってはおらん」
浪人の一人は呼ばれて話しを聞きに来ただけだといいながら次の養生所襲撃のあらすじをべらべらと喋った。

とどのつまり、主犯格は日本橋馬喰町の医師川上堂庵と判明し組み合い仲間六人と共に捕縛された。

二

小石川養生所への力ずくの攻撃や批判は鎮圧できたが相変わらず入所者の数は増えなかった。

「笙船先生、南町への訴えはその後いかが」

春貞は降り止まない雨を眺めながら聞いた。

診察部屋には医師林良適が詰めていたが、

「診療所への不信、薬園への風評はここの医療行為そのものへの不信を意味しますでな」

良適は笙船が頷くのを確かめながら、

「養生所開設は笙船先生の熱意と誠の仁を公方様がお認めになったからこそ実現

したもの。ここへの誤解は養生所のみならず幕府の医療行政そのものへの不審感と相成ります。町奉行所はなにをしているのでしょうか、対応が遅すぎます」
笙船は向かいに座っている春貞に目をやりながら、
「まあ、先般そうした風評を流しわしらを襲わせた町医者らが捕縛されたからこれで奉行所の対応は進むだろうな。どうだな春さんや」
春貞に同意を求めるような形になった。
そのとき八重が診察部屋に姿を見せ、南町奉行所の見廻り方同心、伊丹鉄太郎が先生にお会いしたいと見廻役の部屋でお待ちだと知らせてきた。
「噂をすれば影というやつですね」
林良適が呟いた。
笙船と春貞が一緒に見廻役の部屋に向かった。板戸は開け放しになっていたが伊丹は着流しの裾を端折っていたもののかなり足元が濡れたようで八重が用意した手ぬぐいで拭っているところだった。
「いや、診療中に済まないがお奉行からの願いでもあり急遽まかりこした」
どうやら雨の中のおとないにも関わらず伊丹の機嫌は悪くないように思えた。
「吉報のようですな」

春貞が笙船と共に伊丹の前に座りながらいうと伊丹はにやりとしながら、
「結果上々となるかどうかはこれからの支度によるだろうが、お奉行たちも前例の無いことだがやるべきだということになったのだ」
「ふむ」
笙船はいまひとつ分からないというように首を傾げた。
「先生、私は取り急ぎの使い走りだ。後に佐竹様から正式に書面での通達があろうが、お奉行も一刻も早く笙船先生にお知らせしろという命でやってきたのだ」
伊丹が知らせてくれたのは奉行所主導による養生所への風評を払拭するための具体的な方策であった。
「第一は、名主たちに養生所内の様子や病人の取り扱いなどを実地見学させようという前代未聞の試みじゃ。
第二に入所時の手続きの簡素化も決まった。これは笙船先生が奉行所に対して訴えられたほぼ全てが、いやそれ以上の対応が決まったのじゃ」
三人は一瞬それぞれ顔を見合わせていたが全員の顔がほころんだ。
七月十八日、町奉行はこの二十一日の明け五つ(午前八時頃)養生所に出頭するよ

う名主たちに命じた。
当日出頭してきた名主たちに対し養生所見廻り方与力佐竹弥五郎は噛んで含めるように本日集まってもらった主旨を説明し、養生所の実体をつぶさに見学し誤解を解くよう述べた。
「その方らに言明する。養生所の運営について町方では事実と違うことが取り沙汰されている。そのため今回所内の様子や病人の扱いなどを実際に見学させることにした。
繰り返すが、これまで養生所に関わる様々な風評は事実無根である。したがって町内に病人がいれば、早々に養生所に入所させるようにせよ。
ただし、以降、これまでのように町奉行所に診療ならびに入所を願い出る必要はなく直接養生所に連れてくるようにせよ」
多くの誤解や風評があったとはいえ一番の問題は名主たちの理解が得られなかったことにつきる。
養生所に入所あるいは診療を希望する人が町内にいたとしても、名主らがその手続きを面倒として放置することが多かったからだ。また長屋の住人たちも名主や家主に気兼ねをして養生所へ診察あるいは入所したくても我慢してしまうことが

多かった。
「いまひとつ申し添えておくことがある」
与力佐竹弥五郎は集まった名主たちを見回した後に口を開いた。
「養生所は昨年末に試みとして本道の他に外科の医師を置いた。その経緯を踏まえ今後は本道の医師だけでなく外科と眼科を常設することになったので承知するように」
この見学会があった翌日の二十二日に早くも町触が出され、見学会での主旨が公示されたが、その最後には名主や家主は入所を希望する病人や怪我人を放置してはいけないと命じていた。
事実この町触が出される四十五日ほど前の六月七日、村山自伯、村山元格という二人の外科医が養生所に配属された。それだけでなく同日、笠原養瑚という眼科医も配属され小石川養生所は万全の体制となっていた。

第四章　密命

一

町触があってから、養生所は入居および診察の申込みが相次ぎ一ヶ月にもならないうち、入所者定員四十名を越えて五十七名になった。また通院治療を受けている患者は三一四名にも登り、うち入所希望者が九八人にもなった。

町奉行所は嬉しい悲鳴ではあったが、現実問題として対応が難しくなっていた。

養生所見回り方同心伊丹鉄太郎は同役の岡田伴衛門と連れだって小川笙船に意見を聞きにきた。

「笙船先生、風評を押さえ込んだと思ったら今度は申込み者が多くて大変な思いをさせておるとお奉行も恐縮し困惑しておる」

伊丹は与力として養生所設立時から関わり、現在も事務方として交代で詰めていることから実体を一番承知だった。

「早急にできることから手を打てとお奉行からも命をうけておりますが、まずは笙船先生のご意見をとまかりこしました」
同役の岡田も神妙に笙船に会釈した。
「医療とは本来そうしたものでな。わしとしてはそんなに困惑しているつもりはないのじゃ。大岡様に許諾を受け、わしの倅丹治も見習いとして詰めておるでな。ただし如何せん時間が足りず、結果病人への配慮が行き届かないのが気がかりでな」
笙船はあごひげを撫でながらいった。
賄中間の八重が茶を煎れて医師の控部屋に顔を出した。
と同時に、
「ただいま戻りました」
春貞と幸江が顔を出した。
春貞は野暮用から戻る途中、安藤坂で養生所を尋ねてきた幸江と出会ったのだという。
笙船は、ちょうどよいところに戻ったと二人をその場に同席させてこれまでの話しを要約し聞かせた。

「嬉しい悲鳴というとお叱りを受けますな」
春貞は少し間を置いてから続けた。
「ここは割り切ることしかありませんな。お医師を増やし養生所設備を拡張できれば理想ですが、それはすぐには無理というものでしょう」
二人の与力が同時に頷いた。
「あのう」
それまで静かに控えていた幸江がもの言いたげに笙船の顔を見た。
「幸江さんや、なにか妙案があるなら遠慮無くいってごらん」
その言に力を得たのか、
「門外漢が失礼とは存じますが、春貞さまのお言葉通りここは割り切ることしか方策はないものと思います」
そう言いだした幸江に伊丹は、
「その割り切るとはどうすれば良いとお主は考えるのじゃ」
真顔で幸江を睨んだ。
「はい。養生所のお務めは大きく分けて入所者の診察治療と通院して治療を受ける方たちに分けられると聞き及んでいます」

春貞は幸江に視線を向けて次の言葉を促した。
「要は笙船先生、お医師のお力が及ばないほどの患者が押しかけ、現在一〇〇名ほどが入所待ちだとも聞きました。したがいまして先生にはお叱りを受けるかも知れませんが、緊急重要度の高いご病人を優先するしか道はないのではありませんか」
「ということは」
と伊丹が幸江の言を受け、
「入所病人を優先し、通院による病人を制限するということか」
「そういうことになりますか」
幸江は良くも悪くも養生所に携わっている人たちの気苦労を知らなかったから忖度なく物が言えた。
「通院の病人は程度の差はあるかと思いますが通院できるというだけ症状に緊急性がないものと思います。やはり常にお医師の方々の診察や治療が欠かせない入所病人を優先するしかないのではありませんか」
同席していた男三人がなんともいえない表情で幸江を見た。
「おかしいですか、私の話しは」

幸江に言われて反論のしようもないのが春貞には面白かったし笙船は踏ん切りがついたという顔をした。
伊丹鉄太郎も腕組みをしていたが両手を膝の上に置き直し、
「確かに現実の問題としてはそれしか手はないかもしれませんな」
これまたどこかさっぱりしたような表情で答えた。
「いまの話し、持ち帰ってお奉行に報告しよう」
伊丹は立ち上がり刀を差して同役の岡田を促しながら雨の中、足早に養生所を後にした。
伊丹の姿が見えなくなった頃、雨が止み薄日が差してきた。
「先生、俺もちょいと出かけてきます。い組の頭に約束事がありまして」
春貞が立ち上がると反射的に永井幸江も立ち上がった。
「室町まで行くと藩邸に戻るのは遠くなるぜ」
「いえ今日はこのまま藩邸に戻りますので金魚の糞にはなりません」
幸江精一杯の冗談だったが、
「たまにはお父上に安心させておあげなさい」
笙船がにっこりしながらいうと幸江は素直に頷いた。

「では近くまで一緒に歩くか」
春貞の気合いをいれるような呼びかけに笙船が座ったまま満足そうに、
「春さんや、頭によろしくな」
と声をかけた。

暮れ六つ頃、春貞は笙船に伝えたとおり、い組の頭政五郎宅にいた。
実は政五郎から昨日使いがきて得田新之助が同席を願っているとの書状を受け取ったからだ。
い組では若党の末松以下数名が近所のどぶ板を外して掃除をしていた。
ここのところの雨で塵芥が詰まると道に溢れ余計に足元が悪くなるからだ。
男衆が春貞に気がつき、
「おいでなさいまし」
腰を折りながら奥に入るように促した。
「お待たせいたしましたか」
春貞が頭の部屋に顔を出すと、なんとそこには得田新之助と大岡忠相がいた。
「命の恩人がこられたか」

得田新之助こと将軍徳川吉宗が磊落に笑い、大岡が、
「こちらに」
と政五郎の隣を示した。
春貞は吉宗の前に着流しおよび首巻きのまま平伏した。
「よせ、ここでは俺は貧乏旗本の倅にすぎん」
「しかと心得ておりますが、それではあまりに畏れ多いことです」
春貞はまだ顔を上げなかったが、襖の向こうに茶でも持ってきたのか男衆の足音が聞こえたので平伏を解いた。
茶を運んできた男に頭の政五郎は、
「いいか、俺が声をかけるまで誰もこの部屋に近づけてはならねぇ。あと、志津が戻ったら酒を用意しろといってくんな」
と命じた。
政五郎の恋女房志津は母親の体調が思わしくなく実家のある板橋宿まで見舞いがてら手伝いに行っていたからだ。
「上様、いや失礼いたしました。得田さまが春さんと是非ゆるりと話しがしたいとおっしゃるのでな、足労をわずらわせた」

大岡忠相が春貞にそう呼びかけた。
「春貞といったな。その折りには二度も命を助けられた。あらためて礼を申す」
将軍というより一介の旗本といった口ぶりで話しかけた。春貞はただただ首を横に振るばかりだった。
「忠相や政五郎にも聞いたが、お主は尾張に縁のある者と聞いたが相違ないか」
やはりどうしても将軍としての話しっぷりになってしまうようだ。
春貞はあらためて自分の身の上と現在の立場を申し述べ、現六代尾張藩主徳川継友とは腹違いの兄弟であるものの、尾張藩の禄を食んではいないと述べた。
「そう聞いておこうか。ともあれ余は尾張に借りがあってな」
春貞は何のことかと大岡と政五郎の顔を見比べた。
大岡は軽くうなづき吉宗の意を承知していることを示した。

七代将軍徳川家継が八歳で早世し徳川将軍家の血筋（徳川家康の三男・徳川秀忠の男系男子）が絶えた後を受け、紀州の吉宗が八代将軍に就任した。
しかし、そもそも春貞の同父兄弟である徳川継友は皇室との縁も深く八代将軍の最有力候補であった。しかし結句、天英院や家継の生母である月光院など大奥か

らも支持された吉宗が江戸幕府の八代将軍となったのだ。
吉宗としてはどこか尾張家に申し訳ないという気持ちがあったものと思われる。とはいえ後に尾張藩主となった徳川宗春との間で経済政策の不一致により関係が悪化するが、それはまた後の話である。
「上様、お気持ちは承りましたが、重ねて申し上げます。それがし尾張との主従関係はございませんのでお気遣いはご無用に願います。その代わりと申し上げてはご無礼いたしますが、このような格好のことお許しください」
春貞は着流しはともかく首巻きのまま将軍の前に座していることを詫び、許しを求め再び平伏した。
吉宗は無言で頷いた。
「過日、その方が首に巻いた手ぬぐいやどてらを玄妙に使いおるのを間近で見たが、尾張柳生新陰流の奥義を覗いた感を受けた。見事であった」
春貞は恐れ多いこととただ平伏するしかなかった。
平伏を解いた春貞は、
「さて大岡さま、得田さまを襲った者たちの背景はお分かりになられたのでしょうか」

春貞は話しの矛先を大岡忠相に向けた。
「ただいま得田さまにご報告申し上げたところだが、町奉行所はお城の中のことには口を挟めない。しかし春さんも承知の通り、二度目に得田さまを襲った痩身の浪人が死の床で明かした依頼主は武家の名では無く両替商相模屋清右衛門の名がしるされておった」
「はい。きっと身分のあるお方が借財つながりかなにかで相模屋を動かしたのではないかという推測もございましたな」
「そうなのだ」
大岡は得田新之助に視線を送った後に話しを続けた。
「ただし闇雲に相模屋に乗り込み清右衛門を責めたところで依頼主を吐くとは思えんという得田さまのご意見もあってな。それに証拠は例の遺書でしかない。亡くなった者がそう明言したからといったところで、それだけで捕らえるのは難しいのだ」
それまで静かに話しを聞いていた政五郎が、
「ご一同、それに相模屋清右衛門をお縄にした途端に黒幕は奥に引っ込んでしまい余計に尻尾を掴みにくくしてしまいませんか」

困ったという様子で腕組みをした。
「これはひと工夫いたしませんと難しいですな」
大岡忠相が頷いた。
春貞はふと思い出したことがあった。
「得田さま、ひとつお伺いたいことがございますが」
「なんなりと申せ」
表情は優しいが口ぶりは将軍のそれであった。
「これまた過日のこと、得田さまが襲われたときご一緒に養生所までお越しいただきましたな」
「確かに」
「ぶしつけながらお伺いいたします」
「なんなりと申したぞ」
吉宗が念を押した。
「そのおり、養生所の弥三郎と申す老爺と得田さまは一瞬ではありましたが視線を交わされ頷かれていたと拝察いたしました。あの老爺は何者ですか」
吉宗は破顔し、

「お主を欺くつもりはなかった。許せ」
「とんでもないことでございます」
「このことを知るのは余とここにいる忠相、そして養生所肝煎の笙船のみじゃ」
大岡忠相が吉宗の意をくんで言葉をつなげた。
「あの者は上様のお庭番です。いや、春さん誤解はせんでいただきたい。上様は養生所の動きを監視しようとされたのではなく養生所は初の試み、どのような事態が発生しようともお医師の方々および入所病人たちを守らねばならぬと心配なされ、雑用を命じられた老爺として腕の達つ者を送り込まれたのだ」
吉宗はうなづきながら、
「何しろお主のような頼りになる男が笙船の身近にいるとは知らなんだからな。今後も役に立つこともあろう、宜しく頼むぞ」
と笑った。
話しが一区切りついたとき、
「失礼します。お前さん、ささをお持ちしましたがよろしいですか」
政五郎の女房志津が襖の向こうから声をかけた。

酒と肴が持ち込まれ話題は先般春貞が図面を書いた消火道具に移った。
「春さん、図面通りの形はうちに出入りの大工、勝太郎親方に頼みましたがほぼできておりやす」
「ほう、それで水は出ましたか」
春貞が膝を乗り出した。
すでに吉宗も大岡より話しだけは聞いているようで、忠相の酌で杯を傾けながら、政五郎の言葉を待った。
「へい。出ることは出たのですが水量と勢いがいけません。桶の中の水を吸い上げて筒に押し出す力が弱いようですが理屈としては旨くいってます」
「そうでしたか。しかしこれは延焼を止めるための道具だから水の出し方をいまいちど工夫しないとまずいな」
政五郎は酒を飲むのも忘れて説明に力が入った。
「仕組みを大がかりにすると天秤棒を上げ下げするのに大層な力が必要なことがわかりやした。うちの若いもん二人にそれぞれ天秤棒の片方を上下させましたが水の勢いは力の入れようにも影響されやす」
大岡も手酌で杯に口をつけながら、

「まあ、納期が決まっているわけではないのでいたずらに急ぐことはないが、是非現場で役に立つものになって欲しいですな」
と言いながら吉宗の言葉を待った。
吉宗は、
「ようもそのような物を思いつくものよ」
呆れたとも感心したとも取れる言葉を発した。

二

将軍吉宗こと得田新之助は南町奉行大岡忠相と共に「い組」を後にしたが、帰りがけ大岡は春貞に、
「春貞どの、養生所の件だがいろいろと調べた結果、通院患者をこれ以上診るのは無理だと判断し早々に町触を出すので笙船先生によろしゅうな」
と声をかけた。

八月二十三日、大岡がいったように養生所への通院患者に対する診療停止が江戸の町に告示された。

このことは幕府医療体制の後退と案ずる人々もいたが、九月には養生所の入所定員数が四〇名から一〇〇名に拡張された。そのためには病室の増築が急遽急がれ、養生所の施設のありかたも大幅に変わっていった。

それでも入所を希望する人々は後を絶たず、順番待ちの病人怪我人は常に五十人前後となっていた。

幕府は、いや吉宗は財政難を押してもこの養生所を成功させるため本気だった。

真夏の強い日射しにうんざりしている江戸の町を春貞は久しぶりに尾張藩上屋敷方面へと向かっていた。ただし今日は上屋敷ではなく藩邸内主家屋敷の周りに構えていた永井主水の私邸へ入った。

永井主水は定府だったから、江戸家老となってからは他の附家老（つけがろう）と同様藩主の許しを得て私邸を構えることが許されていた。

今日の話しは藩内の誰にも聞かれてはまずいと考え、春貞は特に私邸での面談に拘ったのだ。
なお附家老とは、永井主水のように尾張藩生粋の藩士ではなく、将軍から直接の命令を受け家老として附属された家臣をいう。
春貞は、藍色八丈縞の着流しに相変わらず首には赤い椿の花を染めた手ぬぐいを巻いた姿だったが、脇差しを帯び日射しを避けるための笠を携えていた。
首巻きはこの季節、汗拭きにも重宝のようだ。
永井主水の私邸の通用門を通るとそこには永井幸江が待っていた。
「春貞さま、お暑いところ父がご無理を申し上げお詫びいたします」
と殊勝な挨拶をした。
苦笑いをしながら春貞は、
「気が進まねえが、狸親父に会いに来た。連れて行ってくれ」
伝法な口調で願った。
江戸家老永井主水は喜びの顔で春貞を迎え入れた。
「ようまいられた。いや、よく来て下さった。殿が直接願った件だとはいえ貴殿のことじゃ、心穏やかではなかったぞ」

白髪頭をふりふり、自分の隣に座すように勧めた。春貞も過日とは違い素直に従った。また主水と春貞の斜め前には幸江も座していたが他には誰もいなかった。

「お家の大事と聞き及び伺いましたが、それがしは市井に身を置く者、お役にたてますやら」

春貞の話しを聞きながら、手を取ろうとするほど低姿勢な主水の姿に宮仕えとは悲しきものよと思いつつ哀れをも感じていた。

本来なら永井主水がひとにらみするだけで藩中の者は震え上がるという。

「いや、ことがことだけに他に願う者はおらんのじゃ。お主がわしを、この狸親父を嫌っておるのは重々承知しておる。しかし此度だけはなんとか力を貸してくださらぬか」

幸江も春貞に頭を下げた。

「そうじゃ。礼が後になってしまったが幸江が世話をかけておる。今後も宜しく頼む」

天下の御三家筆頭、尾張藩江戸家老がまたまた白髪頭を下げた。

正月元旦、登城する尾張藩主徳川継友より耳打ちされてから早半年以上の月日が過ぎていた。

その間、幾度となく永井主水から書付が送られてきたが春貞は無視していた。
「確かに俺の父は尾張三代藩主徳川綱誠だ。しかし物心ついてから会ったこともなく声をかけられたこともない。要は捨てられたのだ。無論尾張に禄をはむ者でもないから尾張藩がどうなろうと知ったことでは無い」
というのが春貞の気持ちだった。
ではなぜこの度江戸家老に会い、話しを聴く気になったのか。
それは永井幸江の存在だった。
春貞は幸江に恋心といったものを持ったことはなかったし今後もないであろうと思っていた。しかし次第に妹のような存在として慈しむ気持ちが膨らんできたのだ。
それに兄妹の情など知る由もなかった春貞に（妹という存在も良いものだな）と思わせたのはどこか守ってあげないと危うさを感じさせる幸江の存在だった。
そしてまた尾張藩主徳川継友が長柄黒塗の大名籠の中から春貞に向けた真剣な眼差しがどうしても払拭できなかったからでもあった。
「まあ、いまの俺があるのは父綱誠が乳児の俺を御連枝と呼ばれる松平姓の分家に預け、一生食うには困らないよう配慮したからであることは間違いない」

という気持ちもあった。
礼を言おうとも思わないがいまさら憎む気持ちもなかった。
春貞はいまの暮らしが好きだし満足していた。
とはいえ本人の意志とは別に事情を知る者にとって春貞をただの町人として扱うわけにはいかなかった。
尾張藩主徳川継友と腹違いの兄弟であることは知る人ぞ知る事実だったからである。そして父綱誠がさすがに不憫と思ったか、春貞に残した一振りの脇差しは綱誠本人の愛刀であり、粟田口吉光の作だと伝えられる業物だった。
さらにその拵えには尾州中納言葵の紋所が印されており、春貞がその気になればこれを示すことで父綱誠の血縁者として尾張藩のどこへでも立ち入ることもできた。
それに父綱誠は新陰流第七世であったからその血が春貞に流れているのは明らかであった。
「殿は第四代藩主吉通さまが薨去された後、五郎太さまが後を継がれましたが、承知のように相続から二ヶ月ほどで三歳のときお亡くなりになりましたな。そこで叔父であられた殿が家督を継がれたわけじゃが、当時から燻っていたあれこれ

もあってのう」
主水はほとほと困ったという顔をした。
「またこれは言いにくいことじゃが、藩財政立て直しを実施されてこのかた殿には「けち」だの「蓄財が趣味」だといった風評もあってな、ここ一年ほど前から一部で不穏な動きがあるようなのじゃ」
春貞は前に座っている幸江に視線を向けたが、父主水のいう背景を知っているのか頷いた。
「なるほど、お話しはわかりましたがまさか殿のお命を縮めようとする輩がいるわけではありますまいな」
春貞の率直な問いにしばらく間をおいた主水が、
「そのことじゃ。わしは心配しておるのじゃ」
膝に置いた両手が強く握られていた。
「しかし、俺になにをせよと仰せられますか、御家老」
「そこが肝心なのじゃ。もう少し寄ってくださらんか」
尾張藩江戸家老永井主水と松平春貞の相談はその後半時ほど続いた。

その後春貞は幸江の勧めもあって藩内の剣術道場に立ち寄った。
過日訪問した際には事情を知らぬ幸江自身の言動で春貞が道場でその技を披露する機会を失わせた埋め合わせでもあった。
道場には前回会ったことのある師範代酒井清之助と共に今日初めて会うことになった江戸藩邸剣術指南役堀田万之助が和やかに迎えてくれた。
堀田は江戸藩指南役に命じられてから五年になるというが三十過ぎであろうか、さすがに体が出来ておりいかにも剣術使いといった風貌だった。
「お招きに甘え、この格好で罷り越しました」
春貞は軽く頭を下げたが、隣には家老の娘永井幸江がいることでもあり江戸藩剣術指南役はもとより春貞を粗略に扱う者はいなかった。
早速春貞と道場で腕に覚えがあるという二名が対戦することになったが、今度は春貞の格好がどうのこうのと邪魔する者もいなかった。
春貞は、
「本来なら稽古着に着替えるべきだが、今日はこのままお相手つかまつる」
と見所の神棚に拝礼し道場の中程に立った。

柳生新陰流の稽古は柄の長さがおよそ七寸、刃の長さが二尺五寸の全長およそ三尺二寸（約九十七センチ）の袋竹刀（しない）（ひきはだ竹刀）を使う。
ひきはだとは牛革に漆を塗り強化したもので、それを袋状にした中に竹を八つに割り竹刀として使っていた。
他流の稽古では当時一般的に木刀や刃引きした刀を使っていたが、寸止めも含めて実践通りの太刀筋で戦うことが難しく、逆に一歩間違えば怪我は無論のこと死に至ることも多々あった。
その点、袋竹刀なら怪我を心配せず精一杯の打ち込みが出来る。この伝統は流祖・伊勢守が自ら考案したと伝えられていた。
「伊藤文也、金子基次郎でませい」
堀田の命で二名が袋竹刀を持ち立ち上がった。
春貞には酒井が数本の袋竹刀を持って選ぶようにと願った。春貞はその中から無造作に一本を受け取り右手で大振りするとその場の空気が切り裂かれる音がした。
最初は本道場で六年修行を続けているという伊藤文也なる若者が相手だった。春

貞の素振りで少々怖じ気づいた感もあったが、春貞に一礼して間合いをとった。伊藤文也は青眼に構えたが、春貞は袋竹刀を右手に提げたままだった。まるで戦意がないように伊藤には思えた。

伊藤が仕掛けた。

青眼から一度八双に構え直し、自ら間合いの内へと踏み込みながら袈裟懸けに斬った。

伊藤は立ったままの春貞が自分の袋竹刀に打ち倒される確信を持った途端、視界から春貞の姿は消え、右手が痺れ伊藤の竹刀は一間以上も後ろに音を立てて転がった。

春貞自身は以前の場所で微笑んでいた。

「まいりました」

伊藤は自分がなぜ負けたのかさえわからなかった。

ふと堀田師範を見るとその顔もこわばっているのがわかった。

「続いて金子基次郎これへ」

金子も本道場で八年修行を積んできた下級藩士だったが、その腕を見込まれ次期師範代の声もかかっていた。

酒井の声に押されて金子が春貞に深々と頭を下げ、袋竹刀を一文字にかまえて
「きえぃ」と腹から絞り出した声を上げ、突進した。
金子は伊藤の敗北を見て通常の立ち会いでは到底勝てぬと判断したものと思われた。
金子の袋竹刀が春貞の胸を突き上げたに見えた刹那、金子の袋竹刀は春貞の竹刀に上から押さえられていた。
その竹刀を振り上げ反撃しようとしたとき、春貞の竹刀の先端が金子の竹刀を静かに滑り、喉元にぴたりと触れた。
「まいりました」
深々と頭を垂れてうなだれた金子の後ろ姿に春貞は声をかけた。
「師範の堀田どのを差し置いて不遜ながらひとこと申し上げる」
道場にいた三十名ほどの猛者たちが思わず背筋を伸ばした。
「それがし流儀はそなたたちと同じ柳生新陰流です。しかしいまのそれがしはその流派に拘ってはおりません」
一同がざわめいた。
「まあお聞きくだされ。剣術の流派には確かに決まった型があることはご存じの

通り。しかしこれまた釈迦に説法なれど柳生新陰流には『三摩之位』という教えがあり『習い』『稽古』と共に『工夫』が大事とある」

一同を見回しながら春貞は続けた。

「この工夫を押し進めるなら自ずと流派という縛りは消えるのではありませんか。言い換えるなら『習い』『稽古』『工夫』を突きつめたところで一度習ったことを放棄し原点に立ち帰る必要があるように思うのです。無論その前提として新陰流をとことん自分のものにしていなければなりませんな」

道場は誰もが呼吸を止めたかのように静かで春貞の声のみが響いていた。

「まだまだ若輩者のそれがしにて正しく不遜な物言いだと存ずる。しかし実際の斬り合いは稽古とは違い、同じ相手と再び相まみえることはまずないのです。したがって相手は常に違い、型にはまった動きだけでは千差万別の相手に遅れを取ることは必定でしょう」

一呼吸おいた春貞は、

「いまお二方と立ち会い、伊藤どの、金子どの共々柳生新陰流の正当をきちんと学んでおられることが分かり申した。後数年師範のご指導に従いつつ自分なりの工夫を行うことこそ肝要かと思う。

ちなみに、それがしとて物心ついてから当流の稽古を始めたからしてこれでも二十年近く歳月が流れています。
精進すること、しかし焦らないことです」
師範代の酒井の拍手が一同全員に広がった。
「また御家老にどうしてもと頼まれましたが、もし師範堀田どのにご異存無ければ時折それがし今後もご一緒に稽古をさせていただくため罷り越したいと存ずる」
春貞の言葉を聞き、師範の堀田は深々と頭を下げたが、永井幸江は春貞の立ち会いに血が上り顔を赤くしていた。

三

小石川養生所は拡張され、常に一〇〇名ほどの入所者がひしめいていたがそれでも入所待ちの患者は五〇名では終わらず次第に増えていったし、中には順番待ち

の途中で死に至る者も出ていた。
しかし小川笙船を初めとした医師たちは日々目の前にいる患者に真摯に対応し、その命を救おうと奮闘していた。
「どうしたおみつさん、苦しいか」
女部屋の一郭で笙船と息子の丹治は中風(ちゅうふう)で入所している太り気味の中年女性を診ていた。
中風とは脳卒中のことであり、脳梗塞、脳出血、クモ膜下出血などの脳疾患の総称である。
我が国では古くから脳卒中は病気を起こす悪い「風」に「中(あた)る」ことが原因だと考えられていたことからその名がついた。
みつは病状が比較的早い段階で養生所に担ぎ込まれたものの、半身の麻痺と言葉がうまく喋れなくなっていた。
その隣には霍乱(かくらん)で寝ている若い女がいたが、女介護人がかいがいしく体を拭き、麦茶を供していた。
霍乱とはいまでいう熱中症のことで、まだまだ残暑が厳しいこの季節には特に外

で働く人々に多くの霍乱患者が出ていた。
そのとき、
「笙船先生、甚助さんがっ」
看護中間の仲蔵が慌てたようすで女部屋の外から叫んだ。
頷いた笙船は呻いている中風のおみつを静かに寝かせ丹治にまかせつつ立ち上がった。
北部屋と呼ばれていた男性患者の部屋に立ち入るとすでに医師岡丈庵が甚助の脈を取っていたが、笙船を仰ぎ見つつ顔を左右に振った。
労咳で入所していた甚助が静かに息を引き取ったのだ。
丈庵は甚助の骨ばかりになった両手を組んで胸の前に置いたが、その脇に座した笙船と仲蔵が無言で手を合わせた。
その背中に、
「先生方、いま入所された瘡毒(そうどく)の患者さんですが女部屋にお入れしてよろしいですか」
と声がかかった。

笙船たちは一息いれる間もなく立ち上がった。

その頃、春貞は金杉水道町にある御用聞き、定吉宅にいた。

ひとつには吉宗襲撃の黒幕に関して調べが進んだかを知りたかったからだが、尾張藩江戸家老から依頼されたお家の一大事に関しても定吉の知恵を借りたいと考えたからだ。

無論町方が旗本、それも御三家筆頭の尾張藩をどうのこうのできるはずはないが、人々の裏を探る御用聞きの耳には町方だけでなく武家の噂も多々集まってくると聞いたことがあった。

それに春貞がどうあがいたところで自分一人ではどうしようもなかった。

「親分、今日は親分を見込んで頼みがあって来たんだが聞いてくれますか」

春貞にしては珍しい物言いに定吉は、

「無論のことでさあ。春さんとわっしの間だ、できることなら何でもいたしやすよ」

定吉は話しも聞かずになんなりと任せてくれと胸を叩いた。

「俺もほとほと困っているんだが、立場上泥沼に足を突っ込んでしまったみたい

で身動きができんのだ。
ただし言うまでも無いことだがこれは尾張藩の命運に関わることだ。
御三家筆頭とはいえ表沙汰になればお咎めもあろうから、今のところは親分の胸にしまっておいてくれないか」
いつにない春貞の真剣な言葉に定吉は、承知しましたと答えた。
「全部を話せないので悪いが話しの要点はこうだ。殿を藩主の座から引きずり下ろそうとする勢力があるらしい。
まさか殿のお命を縮めようとまで考えているかは今のところはわからん。ただし江戸家老がいうには殿をお守りする急先鋒の一人でもある自身、永井主水のことだが、その失脚を計画している者は確かにいると本人が明言しているんだ」
「ま、待ってくだせい。春さんに言うまでもないことですが、我々岡っ引きに御三家筆頭の藩邸を探れと言いなさるので」
「いやそうではないんだ親分。
尾張藩江戸藩邸とて盛んに力をつけてきている商人たちと無縁では生計がなりたたん世の中だ。
俺も情けないことに尾張藩の財政事情など気にしたこともないから何も知らん。

しかし例えば札差との付き合いは不可欠だろうし藩邸出入りの商人たちも大勢いるに違えねえ」
「なある。そうした商人から江戸藩邸の不穏な噂話などを集めろとおっしゃるので」
さすがに定吉、呑み込みが早い。
「そういうことだ親分。いきなり本丸をというのはいかんせん無理だ。まずは外堀から攻めるしかあるまいと思ってな」
春貞は出された茶に手もつけずに定吉宅を後にした。

次ぎに向かったのは室町の「い組」の頭のところだった。
政五郎も春貞の願いも聞かずに、どのようなことでも春さんのいうことなら力になると言ってくれた。
「頭、身勝手な願いだとは俺も承知なんだ。しかしこんなことを頼めるのはここと金杉しかいないんだ」
春貞は政五郎に頭を下げた。
「よ、よしてくだせい春さん、いや春貞さま」

春貞の話しは先に立ち寄った御用聞き定吉御分に願ったことと同様だったが、
「い組」の頭への願いは主旨が違っていた。
尾張藩うんぬんの話しを一通りした後で春貞はあらためて政五郎を正面から見ていった。
「頭に願いたいのは藩がどうのこうのという事ではないんだ。いざ鎌倉というときに人の命を守って欲しいんだ」
政五郎は意外だったのか無言で首を傾げた。
「正直俺は尾張がどうの、藩主がどうのということには興味がないんだ」
「しかし、春さんと現藩主継友さまは腹違いの兄弟だとお聞きしたことがありやしたが」
政五郎はそう言いながら、いまひとつ合点がいかずに春貞の言葉を待った。
「頭のいうように確かに殿と俺とはまあ兄弟だ。しかし、がきの頃から一緒に育ったわけでもないし遊んだわけでもねえ。
俺は親父の顔もよく覚えていない、いわば捨てられた息子だ。
それに市井に暮らす俺がどう逆立ちしても御三家筆頭の尾張家の内紛を収めることなどできるはずもねえではないか。

そうだろう、頭」
春貞は一番の危惧は江戸家老永井主水の命とその娘、永井幸江の安全を図りたいと説明した。
「なるほど、春さんの言われることが見えてきましたぜ。特に幸江さんは春さんが妹御のように可愛がっていなさいますしね」
しかし、というように一端言葉を切った政五郎は、
「幸江さんや御家老のお命を守るというのであればそれこそ藩邸内にいくらでも腕の立つ家臣がいるでしょうに」
「頭のいうことはもっともだ」
春貞は両掌で自分の顔を軽く叩きながら話しを続けた。
「まず家老がいうには、もし自分たちの命を縮めようとする輩がいたとすれば藩邸内では事を起こすまいといわれるのだ」
「うむ、確かに内密にするのは一部の不満分子としては大家だけに難しいや。外に漏れればお家騒動そのものになってしまいますからな」
春貞は頷きながら、危険は屋敷外に出たとき事故にみせかけ、あるいはあくまで尾張藩とは無関係の沙汰として闇に葬るつもりではないかと俺はみているのだと

話した。
「まあ、あの狸親父が藩邸の外に出ることは多くはないが幸江はそうではない。また家老一人で歩き回ることはないが幸江は供を嫌っているし事実一人で歩き回っている」
一呼吸いれた春貞は、
「先ほど頭は、護衛のつもりなら藩邸内に腕の立つ家臣がいるだろうにといった。確かにそうなのだが、もし頭がことの首謀者ならどうする。俺ならそれこそ藩邸内の腕利きを味方につけ、あるいは藩命とでも理屈をつけてことを起こすことを考えるぜ」
「分かりやした。
誰が味方で敵なのかが分からないいま、一番身近にいる人間にも心を許せないということですな」
春貞にしては珍しくも苦々しい表情をしながら、
「同藩の人間を信用できんとは実に不幸だしあってはならないことだ。いつまでもそうした疑心暗鬼が続けばそれこそ別の弊害もでよう」
腕組みをしながら政五郎はしばらく考えていたが、

「そうか、春さんは御家老はもとより幸江さんが藩邸外に出たさいの護衛をしろとおっしゃるのですな」
「すまん、頭。江戸は俺にとってまだまだ知らないことばかりの場所だ。それに知ってのとおり、命のやりとりを相談し願える者など頭と金杉の親分しかおらんのだ。いつも幸江のそばにいてやれるはずもないのでな」
春貞は言葉を重ねた。
「ともかく俺は江戸家老のたっての頼みと言うことでいつでも剣術の稽古を名目に藩邸内に入り込むことができるようにはなっている。
またなにか分かったら頭にしらせよう」
春貞は借りた団扇で胸元を扇ぎながら、
「尾張藩だけではないが諸藩邸の仕組みは実に複雑でな、藩主の直轄下に家老や祐筆、大目付や手廻頭らがいる。そしてその他のお役目、例えば馬頭取、奏者や目付などほとんどの役職を統括するのが家老なのだ。
だから本来永井主水は奴がひと睨みすれば誰もが震え上がる男よ。
その男が家臣を心から信用できんとは哀れなことよ」
二人の密談はまだまだ続いたが、春貞は最後の懸念を言葉にした。

「頭にあらためて願うことではないが念のためだ、気を悪くしないでくれ。このこと幸江には勿論だが、得田新之助どのにも内密にしてくれないか。心苦しいがあのお方はお立場が我々とは違うでな」
政五郎が両手を畳みに着け、承知しましたと頭を下げた。
「よしてくれ、頭を下げるのは俺のほうだぜ」
二人は見合って笑顔を交わした。

四

真夏の日射しもやっと弱まり、朝夕には涼しげな風が吹き抜けるようになった。
春貞は久しぶりに小石川養生所に身を寄せていた。ここしばらくあちらこちらと飛び回っていたから笙船と話しをする機会もなかった。
笙船は開所時刻までにと薬研を押していた。

「笙船先生、先生は肝煎ですぜ。失礼ながら薬研などそこにおられる丹治先生に願えばよいでしょうに」
春貞はからかい半分にいった。
ちなみに丹治とは笙船の息子、小川丹治であり、養生所の見習いとして勤めていた。
「春さん、父上に説教してください。お前の薬研でできた薬など信用できんとまで言うんですから」
無論冗談だが、丹治は父の横で薬草の配合を手伝いながらいった。
「いいもんですよ親子の会話は。俺はそうした記憶などまったくない男ですからな」
春貞の言に丹治はばつの悪い顔をして黙ってしまった。
「春さんや、世間ではお前さんのことをわしの隠し子だと思い込んでいる御仁もいるそうじゃ」
場を和らげようとしたのか笙船が薬研の動きを止め、春貞を見ながらいった。
「ありがたいことです。しかし、ということは丹治先生と俺は兄弟ということになりますな」

「そういうことになりますね」
三人は朝日が差し込む診察部屋で笑い合った。
その後春貞は赤ひげこと小川笙船に定吉親分と「い組」の頭に願った件を差し障りのない形で報告した。
「ふむ、お前さんは相変わらず他人様のために苦労しているわけだな」
「まあ根がお節介なんでしょうな」
丹治が新しい薬草を取りに座を外した機会をとらえて笙船はくれぐれも我が身を大切にしろと春貞に諭した。
そのとき、
「おはようございます。師匠はおられますか」
幸江の明るい声が玄関に響いた。
「いま診察部屋においでですよ。おあがりなさい」
弥三郎の優しい声が追いかけてきた。
幸江は診察部屋の開いている板戸の前に正座し、
「笙船先生、師匠、おはようございます」
と頭を下げた。

「幸江さんや、堅苦しい挨拶は抜きじゃ。ここでは春さんもお前さんもわしの子供と思っているでな。ともあれこちらにお入りなされ」
笙船は冗談にそういったが、幸江の顔は明らかに喜びにあふれていた。
「笙船先生、それは困る。丹治先生はともかく、それでは俺たち皆兄妹ということになってしまいます」
「確かに確かに」
笙船と春貞は苦笑いした。
薬園から戻った丹治と座したままの幸江はなんのことかと首を傾げていた。
養生所はあと半時ほどすればいつものように戦場と化す。
生きる者、死す者が入れ替わり、その間を医師たちが力を尽くすことになるのだ。
「春貞さま」
幸江がどこかあまえるような声で春貞に問うた。
春貞が顔を向けると、
「今朝いつものように市谷の藩邸からかちでまいりましたが、どうにも誰かにつけられている気がするのです。殺気がないので気のせいかもしれませんが一人で

はないようにも思えます」
さすがに幸江も剣術使いであり、その神経は研ぎ澄まされているのだと春貞は頼もしく思った。
「まあ気のせいだろうよ。朝からお前さんを付け狙う奴がいるとも思えねえし向かう先はここときまってらあ。つけ回す手間などいらんだろう」
笑いながら春貞は、早速頭が手を回してくれたのだと思った。
ふくれっ面した幸江に向かって春貞は、
「しかし、お前も剣術使いだ。どこに敵がいるか分からんから一人でいる時には注意を怠ってはならんぞ」
と優しい言葉をかけた。

春貞は先に尾張藩江戸家老永井主水との対面で家老にひとつだけ約束させたことがあった。それは主水自身は勿論、幸江が夜間でかける場合には例え供がいても必ず「い組」の頭に事前に知らせるべしということだった。
春貞はもし刺客が自分なら白昼襲うのは避けるだろうと思ったからだ。
藩邸内や白昼では人目を避けることは難しく、藩の内紛と知られただけでお家の

一大事になる。したがって藩主の名を騙ってでも夜におびき出してことに及ぶに違いないと踏んでいた。
問題は「い組」との連絡を誰にさせるかだった。
主水は自身が警戒していることを誰にも気づかせたくないと思っていた。そしてことがことだけに江戸屋敷の人間は使いたくないし万一依頼した人間が相手側に通じていたら最悪だ。
「あなたの顎一つで何百人が動く御家老とも思えませんな」
春貞は皮肉とも哀れみとも思える言葉を吐いたが、主水は、
「わしはどうでもよいのじゃ。もう十分生きたし殿をお守りしてやりたいことはやってきたでな。ただし殿はお守りしなければならんしお家のためでもある。それに」
「幸江さんを守るためにも、ということですな」
主水は悲しい目を春貞に向けて頷いた。
春貞は「い組」の頭政五郎と相談の上、家老付きの小者として「い組」の中でも腕の立つ祐助と米吉という男を念を入れて口入れ屋経由で送り込んだ。
政五郎の本職は鳶職だが、中には元侍もいれば商人もいた。ある意味それらの男

たちは政五郎に拾われその男気に惚れた者ばかりだった。
無論主水も承知の上だ。
い組の頭政五郎は祐助と米吉に、藩と政五郎との連絡はもとより屋敷内の雑用ならびに家老の陰護衛の一端を命じたのである。

「春貞さま、久しぶりに稽古をつけていただけませんか」
幸江の声にふと我に返った春貞は、
「ここは病人部屋も近いでな、向こうの薬園側に行こうか」
と立ち上がった。
幸江は袋竹刀を二本持参していた。これなら思い切った打ち込みができると思ったからだ。
「ほう、袋竹刀を持参したか」
「はい。しかし袋竹刀の稽古では実戦のとき役に立たないのでしょうか」
幸江は薬園へ春貞と歩きながら問うた。
常々春貞から道場剣法だけではいざというとき役にたたないと言われていたからだ。

「いや、袋竹刀の稽古に問題がある訳ではないんだ」
春貞は手にした袋竹刀を一振りしていった。
「この袋竹刀って奴はあらためて考えるとなかなか扱いづらいものでな」
幸江は怪訝な顔を向けた。
「当たり前になっているから気にならないかも知れんが、これはよく撓(しな)るな。だから防いでも撓った先端で打たれることも度々だ」
「はい」
「俺も尾張柳生新陰流の稽古をしてきた人間だから袋竹刀は自分の手の延長のように使いこなせるよう努力してきた。その俺がひとたび真剣で相手と戦ったと思ってくれ。最初に気がついたことはだ、真剣は撓らないということなんだ」
「あたりまえです」
幸江は思わず呟いた。
「まあそう馬鹿にするな。真剣で渡り合った後であらためて思い知ったことは、この撓る袋竹刀はある意味真剣より扱いづらいということだったよ」
春貞がなにを言いたいのか幸江には分からず、ただ春貞を仰ぎ見た。

「俺の言いたいのは、この扱いづらい袋竹刀で十分な稽古を積めば真剣の扱いが意外と楽だということに気づいたんだ」
「袋竹刀の稽古は無意味ではないんですね」
幸江は嬉しそうに竹刀を脇構に止め、
「いざ」
と声を上げた。

五

稽古で一汗かいた二人は養生所に戻り、春貞は井戸端で諸肌脱いで汗を拭った。その姿を眩しそうに眺めながら幸江は女看護人の控え室へこれまた着替えのために向かった。
その後二人は養生所の肝煎小川笙船、息子の丹治そして林良適といった医師たちと一緒に朝餉をとった。

朝餉は毎日、入所者への配膳前に医師たち、賄い中間らが交代で食事をすますことになっていた。
まずは笙船ら医師たちの食事が先だったが、それぞれ座した前に箱膳が賄中間の八重たちによって列べられた。
食器の一部は漆器が使われていたものの手早く洗えて保存も容易な今戸焼の皿や椀が多かった。
その椀には飯が山盛りにされ、時には大根飯やサツマイモ飯、五目飯が出されるときもあったがおかずは質素なものだった。
もともと一汁一菜が基本だったから、この日もすまし汁に大根の漬物、そして頂き物だということでシラウオの佃煮がほんの少しずつ添えられていた。
ただし入所者たちの食事はその病状により何種類か用意しなくてはならず、賄方は大忙しだった。
なお、必須な水は養生所の裏に専用の井戸が掘られていたが、水質が良いので重宝された。ちなみにその井戸は東京大学理学部付属植物園(東京都文京区)の園内に現存している。

笙船ら医師は勿論、春貞もこうした食事は当たり前だったが、尾張藩江戸家老の娘である幸江にとって箱膳に列べられた質素な食事は初めての体験であり箸を取るのに時間を要した。

「どうした幸江、きちんと食わんと動けんぞ」

春貞の声にハッとした幸江はおずおずと茶飯にした大根飯を口にした。

「嗚呼、美味しいです」

隣で配膳していた八重が満足げににっこり笑った。

「ご飯に大根はいつもなのですか」

市井の暮らしを知らない幸江が無邪気に八重に問うた。

「お姫様のお宅では食べられないのかね。あたしがお話しするのも生意気じゃけど、大根に限らずマメや芋を入れるのは大切な米を少しでも長持ちさせる庶民の知恵ですだ」

笙船が頷きながら、

「それにな、どうやら精米された白米ばかりだと江戸煩(わずら)いになりがちなことが判明してるでな、養生所ではこうした混ぜ飯や麦飯、時には蕎麦なども出すように

しておるのじゃ」
と医者らしい説明を続けた。
江戸煩いとは脚気のことだ。白米中心の食事が主流になってきた江戸では脚気が流行り死亡することもあった。
「お米の食べ過ぎで死に至るのですか、先生」
幸江が驚いたように笙船に問うた。
口を動かしていた笙船に代わり、隣に座っていた小川丹治が、
「江戸煩いは重くなると死に至る怖い病気なのです」
と答えた。
しばし考えていた幸江は暗い表情をしながら丹治に向かい、
「人の病気とは違うのかも知れませんが、最近藩邸の隅で飼われていた犬猫が続けて死にまして、それも江戸煩いなのでしょうか」
「おいっ」
春貞が急に大声を出した。
「春さん、どうした」
笙船の問いに答えず春貞は幸江に向かい、

「犬猫が死んだのか。どんな風に死んだんだ」
その強い物言いに幸江は困惑し、
「春貞さま、私は直接見たわけではありませんが、下男の一人から聞いたところでは血を吐いたとか」
「いつのことだ」
さらなる春貞の強い言葉に戸惑いながら、
「三日ほど前だったと」
幸江の返答が終わらないうちに春貞は、
「しまった」
と一言残して朝餉の場から飛び出して行った。

春貞は走った。走りに走って市谷尾張藩邸に飛び込んだ。
春貞の顔を見知っていた門番は通用口を開けてくれたが、それももどかしく家老永井主水の執務部屋に向かって駆けだした。
ちょうど目付の佐嶋壮一郎の姿を見つけた春貞は、
「急務です。御家老にお取り次ぎを」

と願った。
「ただいまご家老は公務を始められたところです」
佐嶋は顔色が変わっている春貞を見ながら答えた。
「ええい、急務だと言ってるだろうが。
どこにいるんだ永井さまは、御家老は。
面倒だ勝手に上がらせてもらうぜ」
着流しの裾を端折り草履を脱いだ春貞は用人が止めるのを無視して上がりながら、
「御家老、春貞です。どちらにおられます」
大声でどなった。
数人の藩士が何ごとかと刀を手にして集まってきたが、奥から主水の声がした。
「みなの者静まれ。わしならここじゃ。いかがした春貞どの。そんなに急いで」
永井主水の姿を確認した春貞はさすがに安堵し畳みにへたり込んだ。
「御家老、お人払いを」
春貞は肩で大きく息をしながらそう願うのが精一杯だった。

永井主水はそれまで見たことのない春貞の姿に当惑しながらも人払いし二人きりの場を作ってくれた。

「ご無礼はお許しを。小石川から走り通しでしたのでお見苦しいところをお見せしました」

そういいながら春貞は飛んできた理由を主水に話した。

主水は当初、驚き困惑したがその表情は次第に怒りで真っ赤になっていった。

春貞が落ち着いた姿で藩邸を出ようと主水の私邸脇を通るとそこには小者として入り込んだ「い組」の祐助が掃き掃除をしながら頭を下げた。

「じゃましたな」

そう声をかけながら目配せだけして藩邸を後にした。

本来なら祐助に二三話しておきたいこともあったが、どこから春貞を監視している目があるかも分からないからとそのまま小石川へ戻っていった。

「春さん、どうなすった。皆心配してますよ」

養生所の前で弥三郎が竹箒を持ったまま話しかけてきた。

「すまねぇ、後でお前さんにも助けてもらわにゃならねえと思うが、たのまあ」

といいながら玄関を上がった。
診察部屋に入ると患者をひとり病人部屋へと送り出したところのようで、そこには笙船と丹治、それに外科医の村山自伯が座していた。
笙船は春貞の姿を見てほっとしたようだが、
「春さんや、医師の待合部屋で幸江さんと岡先生、それに伊丹同心が待ってるでな。顔を見せて安心させておやり。
わしはまだ自伯先生と共に診察があるから後で聞かせてもらう」
と言いつつ、病人部屋へ向かった。
春貞が医師たちの待合部屋の戸を開けると幸江が、
「春貞さま、よかったご無事で。どうされたのですか急に飛び出されたりして」
抱きつかんばかりに春貞に駆け寄り、立て続けに質問攻めをした。
「まあまあ、そんな言われ方すると話しができないではないか。
落ち着いて座れ。
とにかく一番心配した狸、いや御家老はご無事だったので安堵したが、これから詳しく話す。
そこへ座れって」

同心伊丹鉄太郎と岡丈庵が二人のやりとりを楽しそうに眺めていた。
「春さん、不浄役人のそれがしは席を外した方がよいかな」
役人の自分がいては言いづらい話しかと伊丹は気を遣ったが、春貞はかえって伊丹さんがいた方がよいかも知れないと言いながら座した。
「ただしお立場を別にして話しを聞いていただきたい。そういえば伊丹さんは俺の出生のあれこれはすでにご存じですか」
伊丹は頭を掻きながら、
「すまん。知らないふりを続けてきたがつい先日、金杉の定吉からお前さんのことで相談を受けてな、春さんの正体を知って驚愕したところだ」
「いや、隠すつもりはないのですが、それならかえって話しが早い」
春貞はそう言いつつ、尾張藩江戸屋敷の不穏な話しを喋り始めた。
慌てたのは伊丹同心だった。
「おい、春さん。お主の生まれはともかく、俺は腐っても町方の役人だぜ。そんな俺にお旗本の、それも御三家筆頭のお家騒動になりかねない話しを喋っていいのかい。
もし公になればえれえことになるぜ」

幸江もお家の一大事をこうした場所で話そうとする春貞に不安そうな顔を向けた。

「確かにお家騒動になったら大事だ。しかし俺はお家騒動にはしたくないし未然に防ぐべく動いているつもりだが、なにせ旗本の内紛を俺みたいな風来坊一人でどうなるものでもない。

残念ながら何のつっかえ棒にもならんさ」

春貞は一同を順に見回して、

「伊丹さんは勿論、岡先生や林先生も俺にとっては大切な友だと思っている。それぞれ立場は違うが小石川養生所という舟に乗り合わせた同乗者だ。だから俺はともかくここにいる幸江やその親父である永井主水の不利益になるようなことは、そうだな、俺たちに犯罪性や不正がない限り見て見ぬ振りをしてくれると信じているんだ」

「そんなに大変なことが起こっているのか、春さん」

伊丹はさらに驚き問うた。

春貞は尾張藩内部で藩主徳川継友を引きずり降ろそうとする勢力が生まれたこと、その現藩主にとって右腕ともいえる江戸家老永井主水を亡き者とする計画も

進められている気配があることを話した。
そして春貞は自身尾張藩の行く末に興味は無いが、頼まれた手前、家老の安全を図りたいし、延いてはここにいる永井幸江の身も守りたいのだと続けた。
幸江はうつむき、伊丹と岡は顔を見合わせて頷いた。
「俺はいままで、まさかご家老の命を狙う者どもがいたとしても藩内で事を起こすことはないだろうと踏んでいたんだ。
例えばの話しだが、ご家老がどのような形にしても不幸な結果になれば藩内の体勢はまだまだ殿を慕われている藩士が多いからな、その追求は厳しいものとなるだろうとな」
「ということは、例えば下屋敷などへの行き来を狙い、無頼漢にやられたとか事故に見せかけてという狙いかな」
さすがに伊丹は仕事柄呑み込みが早かった。
幸江は自分の父親の命が話題になっていることに不快感を感じつつ、春貞は勿論伊丹鉄太郎や岡丈庵が親身になってくれていることが嬉しかった。
「ああそうだ。今朝俺が慌てて飛び出した理由を話さないといけませんな」
春貞は少し考えてからゆっくりと話し始めた。

「いま話したとおり、ご家老永井主水の命を狙うとすれば藩外でと推測していた俺だが、幸江から藩邸内で犬猫が血を吐いて死んだ事を聞いたときそれまでの考えが甘かったと気づき、万一のことがあるとまずいとお父上の所へ飛んで行ったのだ」

幸江の顔を見ながら春貞はいった。

岡丈庵は、あっと叫んで春貞を見た。

「春さん、もしかしたら犬や猫が血を吐いてというのは毒を盛られたと考えられましたか」

春貞は頷きながら、

「俺は藩邸内で刃傷沙汰はないだろうとたかを括っていた。まさか毒殺という手を使うとは恥ずかしい話し思ってもみなかったんだ」

「でも春貞さま、犬猫が毒を餌に盛られたとして、それが父のこととどう関係するのでしょう」

幸江の疑問に伊丹が答えた。

「よくあることなんだ、幸江さん。人を毒で殺めようとする奴はその毒が効き目があるものなのかをまず手近の動物などで試すもんなのだ」

「可哀想に」
幸江が呟いたが、
「犬猫には気の毒だったが、聞けばそれから三日ほど経っているというお前の話だったから、犯人は目的を遂げようとしてもおかしくない時期と思い慌てたんだ。
幸いご家老は無事だったがな」
春貞はいつもの春貞に戻っていた。
「大事な点だからお聞きするが春さん、不穏な動きは藩主継友様はご存じなのですか」
岡が伊丹と幸江の顔を順番に見ながらいった。
「ご一同、幸江は存じておるが、俺がこの厄介なことに首を突っ込まなければならなくなったのはその殿直々の頼みだったからよ」
春貞は苦々しく言い放った。
犬猫の死が毒を試されたかどうかについて確信はなかったが、犬猫同時に血を吐いて死ぬというのはいかにもおかしいというのが春貞の考えだった。
「で、まさか町方が探索するわけにもいかないが、どうされるかな春さん」

南町奉行所同心の伊丹鉄太郎が問うた。
「そこです」
春貞は一同にもっと顔を寄せて欲しいと願った。

医師の待合部屋を出た春貞は病人口と呼ばれている裏口に向かった。その脇にある粗末な見張り所に弥三郎を訪ねたのだ。
弥三郎はその裏で薪を割っていた。
「さすがに見事だな、薪割りも」
春貞が笑顔で近づくと、
「春さん、そんなことを言いに来られたのではないでしょうが」
と横にある切り株に座るよう願った。
「ちげえねえ。先ほどちょいと口に出したが、力を貸して欲しいんだ。しかし弥三郎さん、お前さんの動きはすべてあのお方に報告しなければならないのかい」
弥三郎が将軍吉宗直属のお庭番であることを先に知ったからこその問いだった。
「その判断はわっし自身にお任せいただいてまさあ。
わっしは養生所を見張るために置かれたのではありませんでな。

先生方と入所者を守るのが役目です。ですから不測の事態が生じた場合にあのお方に判断を願っている間などありゃあしませんや」
「確かにな」
「ですからもともと報告する役目などわっしは持っていませんので」
弥三郎は春貞を真正面から見つめていった。
「しかしだ、例えばお上の意志に反するような願いを弥三郎さん、お前さんに願えば立場上困るだろう」
春貞はいたずらっぽい表情をしながら弥三郎に問うた。
「ま、正直ことによりますが、春さんの頼みが万一あのお方のお怒りに触れたとすれば」
一息入れた弥三郎は、
「この皺腹を掻き切れば済みまさあ」
しれつとした顔で言い切った。
四半時ほど春貞と弥三郎の相談が続き、その後弥三郎の姿が小石川養生所から消えた。
その代わりのつもりか、春貞が黙々と薪割りを始めた。

六

春貞は同心伊丹鉄太郎、金杉の十手持ち定吉親分、そして「い組」の頭政五郎や吉宗のお庭番、弥三郎らの力を借りて尾張藩江戸家老永井主水とその娘幸江の身の安全を第一にと謀を練った。

残念ながら大藩の藩邸内で起こることを市井の人間が防ぐのは難しい。そこで家老永井主水は国許の藩主の許しを得て病と称し私邸に閉じこもった。その方が安全を図れると春貞と相談した結果だった。

下僕として「い組」から秘密裏に雇われた形の祐助と米吉が従っていた。

秋風が吹き始めた雨の日、笠を被った弥三郎が久しぶりに養生所に戻ってきた。それを知った春貞は目配せし、薬園の奥に向かった。ここなら人に話を聞かれないだろうという配慮だった。

「なに、とっつあん、尾張藩江戸藩邸に忍び込んだのか」

「へえ、ともあれ大体の所は探ってきやした」

「大身の屋敷だ、さぞや大変だったろう。礼を言う」

春貞がいうと、弥三郎は掌を左右に振りながら、
「いえいえ、春さんには釈迦に説法ですが、本来藩邸はいざというときには城代わりになるべく役割もありますな。しかし泰平の世、大藩とて緊張感はほとんどございませんや。警備が型どおりなんで容易いもんです」
そう言いながら探った要点を春貞に伝えた。
それによると首謀者は次席家老酒井金右衛門と奏者番の小野寺昌之助だという。彼らの背景に誰か別の人物がいるかどうかについては分からないが、この二人が藩邸内の不満分子を集め、まずは藩主がお気に入りの永井主水の失脚を狙うということらしい。
「そのためには幸江さまを拉致し人質とすることもいとわないとの発言も耳にしやした」
「幸江も承知のとおりひとかどの剣を使うで、やすやすと後れは取らないと思うが、夜は出歩かないように注意をしておこう」
春貞は、
「そういえば御家老はどうしている」
「へい。二度ほど春さんの使いとしてお会いしましたが、そもそもは仮病だった

ものの心労でしょうな、顔色がよくありませんや」
「そうか、明日にでも訪ねてみるか」
二人の密談はしばらく続いた。
翌日、春貞の姿は永井主水の私邸にあった。
門を入ると主水の護衛として「い組」から送り込まれた祐助がいて植木の整備をしていたが、春貞に会釈をした。
春貞は、
「邪魔をする。御家老はいかが」
と当たり障りのない問いをし、廻りに注意を向けたが、監視の目は感じられなかった。
ただし数人の植木職人が黙々と仕事をしていたが、すべては「い組」の息がかかった者たちであり、家老の陰護衛を目的として日夜交代で詰めていた。
「ご苦労だが、よろしく頼む」
春貞は祐助にしか聞こえない小さな声で願った。
永井主水は寝ていた。そしてその側に幸江がいて春貞に頭を下げた。
「おお、春貞どのお手を煩わせて申し訳ない」

幸江に支えられながら半身を起こした家老は、以前の古狸ぶりは感じられなかった。

「お加減はいかがですか」

春貞は枕元に座すとそういった。

「いやはや、お手前の謀として私邸に籠もり、こうして寝てみるとな、緊張の箍(たが)が一度にはずれてしもうてこの様よ」

「これまでのお疲れがそれだけ積もり積もっていたのでしょう」

春貞は珍しく優しいことばをかけた。

「御家老、食事には注意されておられますでしょうな」

春貞の確認に主水は、古くから仕えている二名の女子が用意したもの以外は口にしていないと明言した。

「それにな、い組の面々が常に見張ってくれておるので頭を高くして寝られる。極楽じゃ」

そう言いながら低い笑い声をあげた。

春貞は弥三郎が調べ上げてくれた内容を包み隠さず主水に伝えた。
さすがに古狸、春貞が思っていたより驚く気配はなかったのはすでに思い当たることがあったのだろうか。
「春貞どの、恩に着る。このとおりじゃ」
白髪頭を下げながら、主水はこの件を認(したた)め、内密に国許の殿に早馬を仕立てようぞと息巻いた。
永井主水の私邸を辞そうと春貞が立ち上がったとき、
「春貞さま、養生所へお戻りですか」
と幸江が問うた。
「ああ、そのつもりだが」
その答えに幸江は、
「このところ、師匠に稽古をつけていただけません。一手お願いできませんか」
と春貞に願った。
春貞は疲れていた。
肉体的には日々稽古と鍛錬を忘れたつもりはないが、尾張藩江戸藩邸内の不穏な

空気は予断を許さなかったし、忘れようとしても元旦に尾張六代藩主徳川継友が、乗物の中から「頼みましたぞ、春貞どの」と願った言葉が忘れられなかった。

あの時継友はこういったのだ。

「春貞どの、こうした願いはお手前にしか話せん。

実は我が江戸藩邸でこのわしを藩主から降ろそうとする輩がいるらしい。

しかし表沙汰にはしたくない。

江戸家老永井主水と相談し、そやつらを炙りだしてはくれまいか」

徳川継友は狭い乗物の中から春貞を直視し頭を下げ「頼む、頼みましたぞ、春貞どの」といったのだった。

それを思い出す度に春貞は気持ちが萎えて何もかも放り投げたくなった。

しかし、ここにいる幸江だけは守り通したい。

「だめですか春貞さま」

幸江の念押しに我に返った春貞は、

「すまんが今日は疲れた。このまま真っ直ぐ養生所に戻るつもりだがお前も一緒にくるか」

と聞いた。
幸江の表情がぱあっと明るく輝いた。
「父はお陰様で皆様に守られているので安心です。ご一緒します」
「よし、何も事がなければ養生所で一手立ち会ってみようか」
春貞と幸江は肩を並べて市谷から小石川へと向かった。
歩きながらの話題はやはり剣術談義だった。
「春貞さま、強敵に立ち向かったときの心構えはいかに」
幸江も柳生新陰流を学ぶ一人であり、多くの門弟と同様師範らから実戦だけでなくその奥義をも学んでいるつもりだったが、どうしても強くなりたいという気持ちが先に立ち、実技の稽古が主流になっていた。
苦笑いしながらも春貞は、
「新陰流第五世、連也様が残した兵法歌に『得を得れば一天世界ことごとく、風に木艸(もくそう)のなびくことわり』というのがあるな」
幸江は歩きながら静かに聞いていた。
「これは、兵法の得を得れば木や草が風になびくように敵が我に従うということ

の意味だ。
またこうもいう。
『当流は、構太刀を皆、殺人刀(せつにんとう)と云う。構えの無き所を、いずれのをも皆、活人剣とす』とな。」
「はい、お聞きしたことはありますがそうした理屈は好きではないのです」
幸江はあっけらかんと言い切った。
「まあ聞け」
と言いながら話しを続けた。
「ここでいう『殺』は文字通り人を殺すという意味もあるが、いわれる意味は敵を制圧してその働きを殺すということだ。
これに対して『活』は相手の働きを利用するという意味だという。
要は相手を先に働かせれば負けないと言い切るほど剣術は単純ではないが、まあそういうことだ」
「それがいつぞやお聞きした後の先につながるのですね」
「そうだな。以前お前と手合わせしたが、先に働かせて斬ってきた相手に対し、

後から打ちかかり、相手の太刀に乗って勝つ。
一般的に考えるなら先に、先手を打った方が有利と考えられる。
後から動けばそれだけ太刀筋がおくれて時間差で斬られてしまうとな。
しかし新陰流の活人剣が『後の先』でも勝てるのはきちんとした利があるのだ。
よく聞け。
活人剣はこちらの思うとおりに相手を動かす。
ということは斬り合う前に主導権はこちらにある。
相手が斬りたくなるような状況をわざと作り、その、そうだな、餌に食らいついて斬ってきた刹那、絶妙の間において打ちかかり相手の動きに乗って勝つ。
無論それができるためには鍛錬・修行が不可欠だ」
気がつけば神田川に面していた。
水藻に日光が反射するのを眺めながら二人の剣術談義は続く。
「春貞さま、そうした心境になるにはどのような鍛錬・修行が必要なのですか」
幸江の問いはいつも現実的だ。
「難しい問いだな。
俺に言えることは、普段から常に覚悟と用心を心がけることかな。さすればいざ

とういう時に動揺しない」
「覚悟と用心ですか」
「例えばだ。いま俺はお前の左側を歩いている。こんなことでも人といるときには常に意識することだ。
なぜだかわかるな。
相手が自分の左隣にいる場合、油断すれば抜刀したまま撫で切りされる可能性がある。
しかしだ、相手の左側に並んでいるとすれば、実際にやってみればわかるが幸江、お前は俺を一瞬で倒すことはできないわけだ。右手で左腰にある刀を抜くと同時に左側にいる相手を一瞬で倒すのは難しいだろう」
幸江は少し考えていたが、師匠そうでしょうかとにっこり笑ったと思ったらいきなり春貞に抱きついた。
「おい、よせ」と春貞が振りほどこうとしたとき幸江はすでに脇差しを抜いていた。
「師匠、私の勝ちではありませんか。このまま春貞さまを刺すことができます」
嬉しそうにしている幸江の肌の温もりをくらくらと感じつつ春貞は、

「修行が足らんな」
と小さく呟いた。
それを聞いた幸江は春貞から離れ、刀を鞘に収めながら無邪気に微笑んだ。
道行く人々が二人を驚きの様子で見ていた。

第五章　幸江絶体絶命

一

それから数日後のことだ。
私邸にいた幸江に見知らぬ男が書状を持ってきたと祐助が取り次いだ。
何ごとかと開いて見ると差し出し人は春貞とあった。
「急ぎ知らせたい仕儀これあり、本日暮五つ過ぎに養生所に来られたし。ただし特に秘密議のこと故、誰にも気づかれないよう願いたし。春貞」
とあった。
春貞から手紙を貰ったことはこれまで一度もなかったから、それだけ急な用なのだろうと幸江は考えた。なによりもまた春貞に会えるというだけで他のことには気が回らなかった。
幸江は暮四つ半に密かに提灯を持ち、裏門からそっと藩邸を出た。しかしその姿

は祐助らに見張られていたことを幸江は気がつかなかった。
養生所までの道のりは幸江にとって勝手知ったる道だ。
神田川を右手に望みながら牛込御門を通り過ぎ、江戸川を渡ると水戸藩の広大な敷地が見えてきた。
美しい望月（満月）を仰ぎ見たとき、幸江は殺気を感じて足を止めた。
刹那に抜刀し、飛んできた二本の矢を防いだが、三本目の矢が唸って幸江の鬢をかすめた。
月夜に浮かび上がったのは三十数人の刺客たちの姿だった。
皆顔が分からないよう黒い覆面をしていたが、明らかに待ち伏せされたと思った。
ということは、先ほどの手紙はいつわりだったかとおのれの不注意を後悔したが、時すでに遅かった。
「卑怯な」
そう叫んだものの、幸江は初めて死を覚悟した。
いくら剣術の稽古を積み、ひとかどの剣術家を自負してきたとて三十数人の刺客

の他に射手まで加わり待ち伏せされては生き残るすべはなかった。
「私の剣術はこの程度なのか」
そう思い悔しかった。
しかし逃げたくはなかったし逃げることも出来ないことを悟った。
ただただ、剣を使う者として無様な死に方だけはしたくないという思いだけが幸江の胸に渦巻いていた。
幸江は受け身では押し殺されると裂帛の気合いと共に刺客たちの中に斬り込んだ。もしかしたら切り抜けられるかも知れない。
走りながら何度か闇夜に刃と刃が火花を散らし、幸江の突きに一人が血しぶきをあげて倒れた。
初めて人を斬った。
返り血を浴びたと同時に左腕の二の腕に痛みが走った。
構わず突進しながら刀を振るった。
走りながら幸江の脳裏にふと春貞の姿が浮かんだ。
春貞は、
「な、本身での斬り合いは稽古とは違うだろう」

と言っているように思えた。
また一人と幸江の刃が刺客の胴を抜いたが、右手にいた一人が下段から走ってきた幸江に向かって斬り上げた。
初手を防いだものの、返し落ちてきた切っ先が腰をえぐった。
思わず片膝付いた幸江は、
「春貞さま」
思わずそう呟いて覚悟をしたとき、
「まてい」
と叫んで幸江を後ろ手にかばいながら飛び込んできた男がいた。
尾張藩江戸上屋敷、剣術指南役堀田万之助だった。
「お主ら、何者か。このお方を尾張藩江戸家老永井様の娘御と知っての狼藉か」
そう叫びながら迫ってきた眼前の一人を片手斬りに倒した。
「堀田さま、何故」
幸江の問いに答える間もなく抜刀した者たちが襲いかかり、矢を射かけられた。
「幸江どの、詮索は後だ。切り抜けましょうぞ」
堀田が青眼に構えて取り囲んだ十数人を睨んだ。

さすがに剣術指南役、その隙の無い構えに刺客たちが躊躇ったとき、
「幸江っ」
と声がして脇に連なっていた築地塀（ついじべい）の上から春貞が飛び降りてきた。
「嗚呼、春貞さま、嗚呼」
幸江は我を忘れて春貞に抱きついた。
その隙をついたか一本の矢が春貞の背から肩を貫き、鏃が前に突き出た。
「むうっ」
春貞は幸江をかばいながら自ら突き出た矢を折り、そのまま刺客に立ち向かった。
「堀田どの、かたじけない。この礼、春貞地獄に落ちても忘れん」
「春貞どのは幸江どのを」
さらに数本の矢が向かってきた。
そのとき、横から猫のように丸くなって飛び込んできた者が立て続けに向かってきた矢を斬り落とした。
「春さん、幸江さん、ご無事でしたか」

「おお、とっつぁん。恩に着る。幸江を頼む」
弥三郎は懐から取りだした手ぬぐいを裂き、手早く幸江の血止めをした。
春貞は刺客が落とした刀を手にして矢を防ぎつつ初めて青眼に構えて相手に対峙した。
背には矢の一端が刺さったままだった。
「どうやら今宵の刺客は皆新陰流のようですな、堀田どの」
堀田は一言、
「無念です。情けない仕儀です」
と呟いた。
春貞と堀田は目と目で合図し動こうとしたとき、
「待ちやがれ、辻斬りども」
威勢のいい大声が望月に響き、刺客たちを取り巻いた。
その数、百人あまりか。い組の面々が手に手に鳶口やさすまたを構えて包囲網を縮めようとしていた。
「おお、頭。すまん」
「春さん、幸江さんもご無事で」

慌てたのは刺客たちだった。
三十数人も集めて立ち向かえば失敗することはないと確信していたが、まさか剣術指南役の堀田万之助が、そして百人もの武器を持った男たちに囲まれるとは夢にも思っていなかった。
それにすでに十人ほどが幸江に、堀田に倒されていた。
「い組」の頭、政五郎が片手を上げるとその包囲網がまた縮まった。
そのとき、
「御用だ。神妙にしねえ」
と声が聞こえ、御用提灯が差し上げられると「い組」の半纏を着た群をかき分け現れたのはなんと南町奉行大岡越前守忠相と与力同心たちであった。
「市井を騒がす不届き者め、神妙に縛につけ」
伊丹鉄太郎の顔が、岡田伴衛門の顔もあった。
金杉の定吉が十手を手に、金次が腕まくりして走ってきた。
完全に形勢は逆転した。
「引けい」

「逃げろ」

の声が響き、抜刀したまま二十名ほどがちりぢりになったが、不思議なことに与力や同心たちは追う気配を見せなかった。

堀田や幸江に倒された者どもの中にはまだ息のあるものが五人ほどいたが、南町奉行所与力たちに捕縛された。

あくまで市井を騒がす辻斬りとして。

二

春貞と幸江は弥三郎らにあらためて血止めをされた後、養生所へ「い組」の男衆たちにより運び込まれた。

堀田万之助、定吉親分、伊丹同心そして弥三郎らは二人に付き添っていたが「い組」の政五郎と残りの手下たちは万一のことをと考え、遠巻きに春貞ら一同を護衛するよう陣を組んでいた。

しかし大岡忠相の姿はすでになかった。

幸江は痛みに絶えながらも幸せな夢を見ていた。

「幸江さんや、もう大丈夫じゃ」

気がつくとそこは見知った養生所の診察部屋だった。

小川笙船の顔が見えたとき、助かったのだという実感が湧いてきた。

自然に感謝の涙が溢れ、心配そうに覗き込む本道の医師林良適、外科医村山自伯

それに同心伊丹鉄太郎をはじめ定吉親分や政五郎、弥三郎らの顔が滲んだ。

ふと気がついた幸江は、

「春貞さまは」

と飛び起きようとしたが激痛に体が動かなかった。

「俺なら隣にいるぜ」

ばつの悪そうな物言いの春貞は幸江と並んで寝かされていた。肩を貫通した矢を抜き、傷口を縫ったのだ。

春貞は肩から胸に些か血が滲んだ晒し木綿でしっかりと巻かれていた。

「嗚呼よかった。皆様、ありがとうございます」

他に幸江がいうべき言葉はなかった。
「いやはや、無事で良かった。
しかしな幸江さん、ここに運び込まれた際、お前さんは春さんに抱きついたままでな、治療するため二人を引き離すのに皆苦労したんじゃぞ」
笙船が愉快そうに言い、皆が笑いながら頷いた。
幸江は恥ずかしさに顔を伏せた。
時刻はすでに寅の刻を過ぎ、雨戸を開けるとうっすらと明るくなっていた。
そのとき賄中間の八重が、
「みなさま方、戦(いくさ)の後で腹が減っただろうて。芋と茶しかないんが食べてくださいましな」
と他の女衆と共に美味そうな臭いを振りまきながら入ってきた。
「ありがたい八重さん。そうじゃな、一息いれようか皆の衆」
笙船は一同を見回した。
皆疲れていたが、命をはった緊張感はそう簡単に解きほぐせるものではなく、今回の騒ぎの経緯を話し合っていた。

それから十日ほど経ったある日、養生所の診療が終わった申の刻時、大岡忠相が養生所見廻方与力、佐竹弥五郎と同心伊丹鉄太郎を連れふらりと現れた。

「これはこれは大岡様、ご苦労様にございます」

笙船が玄関に平伏して迎えた。

「お邪魔をする」

大岡らは医師の控え部屋へ笙船に案内された。

しばらくすると医師林良適と村山自伯に連れられた春貞と永井幸江が体を揺らしながら入ってきた。

「おお、春貞どの幸江さん、本当に無事でなりよりでした」

大岡忠相の笑顔に二人は深々と頭をさげた。

「奉行所としての調べがほぼ片付いたでな、ここにいる佐竹弥五郎にその旨を報告させたいと罷り越した」

大岡は晴れ晴れとした表情でそういった。

与力佐竹弥五郎の話しによると、怪我を負い、捕縛されたのは明らかに尾張藩士、それも江戸勤番の藩士たちだった。

それを承知で大岡忠相は辻斬りに加担した不逞の輩と処理し、簡単な吟味をしただけで身柄を尾張藩江戸上屋敷に引き取らせた。

「その五人にはな、奉行所の牢に入った方が良かったと思うほどきつい取り調べと沙汰があろうと思われる」

佐竹は話しを続けた。

「あの晩、こちらの永井幸江どのを複数の辻斬りが襲った。それをたまたま見回り中の『い組』の男衆に見つかった、ということでお奉行は事を納められたのです」

「それは」

なにか言いたそうな幸江を制して、

「深淵なるご配慮、春貞このとおりです」

春貞は再び大岡に頭を下げたが、大岡は磊落に、

「いや、大藩のお家騒動は奉行所の預かり知らぬことでな。それに大捕物となれば市中警備に手抜かりがあったからとこの大岡も責められよう。要はそういうことじゃ」

と微笑んだ。

「大岡さま、お尋ねしたき儀がございます」
幸江が問うた。
「なにかな」
「わたくしごときを亡き者にするため、なぜ三十余名もの藩士が集まったのでしょうか」
大岡忠相はしばし考えた後に、
「本当の所は当事者たちに責問しなければ分かるまいな。ただ奉行は今回の策を練った頭分の意向というより、責任を皆一緒に負うことで罪の意識を薄め、そして首尾良く、いや失礼、ことが運んだあかつきの報償を確実にしたいと考えたのではあるまいか」
そう答えた。
「後はどこかの藩が自ら自浄の力を持ってあるべき形に落ち着かすべきことじゃ」
与力佐竹弥五郎が大岡の意を受けてそう結んだ。

「しかしだ春さん」
同心伊丹鉄太郎が、
「御奉行のお計らいにより今回の件、外部には漏れないと我々は確信しているが、藩内に永井様だけならともかく付家老のご重臣たちがおられる。どう終息されるにしろこのこと公方様のお耳には届くと考えるがいかに」
と問うと春貞は一同を見回して、
「伊丹さんのいわれる通りでしょうな。しかし公方様のご判断がいかようなものであれ尾張は真摯に受け止めなければならぬ。そして再びこのようなことのなきようにしてもらいたいものだ」
春貞は幸江を見つつ、
「俺は尾張がどうのこうのには興味はないんだ。各々方のおかげでこうして幸江が無事だったこと、そして狸親父、いや御家老のお命も無事だったことで十分過ぎる結果だと思っている」
そのとき玄関で、
「御免、春貞どの、幸江さまにお会いしたい」
と声がした。

どうやら尾張藩江戸藩邸道場の剣術指南役堀田万之助のようだ。
堀田はそこに大岡忠相が座しているのに恐縮し、見舞いは出直すといったが逆に大岡は、
「堀田とやら、これは吟味ではないがよい機会ゆえ雑談として聞きたいことがある」
と引き止めた。
大岡忠相はなぜあの場所に堀田が駆けつけられたのかと聞いた。
「なるほど、尤もなお疑いですな」
堀田は少し話しが長くなると断りながらその事情を話し始めた。
堀田が言うには道場裏の井戸端で稽古の後、汗を拭いていると小声ながらも争うような話しが聞こえてきたのだという。
それは道具部屋からのようだったが、永井幸江をみくびってはならないとか、いつ決行するのか、といった話しだった。
詳しい内容までは聞き取れなかったが、誰かが永井幸江を襲い人質にする、それが無理なら命を奪うというように堀田は聞き取った。
捨てておけないのは幸江を襲うということは勿論、その手に加わろうとしている

中に堀田が道場で教えている弟子が幾人か加わっているらしいことだった。
とはいえ確証のあることではないし家老に忠言できようもなかった。
できることは昼夜共に幸江が外出する際に陰護衛のつもりで後をつけるのが日課となっていたという。
とはいえ幸江も剣術家だ、近づけば気づかれるだろうと堀田はかなり離れ、幸江が懐に忍ばせている匂い袋の香りを追うという毎日が続いた。
また数人幸江を追尾している者にも気がついたが、それが「い組」の鳶たちであることなど知る由もなかった。
そしてあの日が来たという。
結句、幸江が私邸を抜け出したのに気づいた祐助らが、い組と養生所に走って知らせた結果、何とか事なきを得たのだ。
春貞が負った矢の傷が治るには長くかかりそうだったし、肩の動きは傷を負う以前のようにはいかなかった。
「春さんや、剣術の稽古は後半月ほどやらんほうがいいな」
赤ひげこと小川笙船のそうした注意も聞かず、春貞は少しずつ肩慣らしを始めていた。

永井幸江が負った傷は二の腕と腰の二箇所とも金創だったが、腰の傷はかなり深く完治にはまだまだ時が必要だった。
本来なら私邸で養生すべきだが、本人の希望で養生所に入所することになった。
何しろここには状況をよく知る医師が常に詰めているし、お家騒動の危機は失せたとはいえ、幸江の身にまた何かが降りかかるのを春貞も避けたかった。

三

事件から一ヶ月ほど経ったとき、南町奉行大岡忠相より急ぎ面談したき儀があるので奉行所までご足労願いたいという書状が届いた。
春貞は一人で行くといったが、まだ本調子では無いことを心配した弥三郎が下僕のようについていった。
「とっつあん。今回は本当に世話になった。風来坊に気の利いた礼などできんがこれからも宜しくたのむ」

軽く頭を下げて歩き始めた。
その態度から弥三郎は大岡忠相の用事がなんであるかをすでに知っているように思えたが、春貞は問いたださなかった。
春貞は弥三郎を待たせ、奉行が執務中だという部屋まで通された。
「春貞どの、お呼びだてして恐縮じゃが傷はいかが」
大岡は笑顔で春貞を迎入れた。
しかし大岡から伝えられたことは青天の霹靂(へきれき)だった。
それは三日後の巳の刻一つ時、大岡忠相と共に登城せよとの将軍徳川吉宗の命であった。
登城の日は見事な晴天だった。南町奉行所から迎えの駕籠が差し出され、春貞は大岡忠相と共に江戸城に向かった。
春貞は、無紋の御納戸茶の熨斗目に半袴の出で立ちに、父綱誠が春貞に残したただひとつの形見、粟田口吉光作の脇差しを帯びていたが、さすがに首巻きは外されていたものの、肩の傷を覆う晒しが首にも巻かれて古傷を隠していた。
登城すると二人は城中の白書院に連れて行かれたが、そこにはすでに御目付が座

していた。
「上様のお成り」
の声と同時に上段へ八代将軍吉宗が足早に現れた。
ただし簾が半分ほど垂れ下がっていて吉宗の顔を隠していた。
春貞と大岡は平身低頭したままだ。
「松平春貞、よう参った。それへ」
と声をかけた。
(それへ)とは、近くそれへ進み出よ。すなわちもっと近くへ寄れという意味だ。
春貞は慣例通り、匍匐蠢動(ほふくしゅんどう)し、元の座のままに収まった。
「この度は小うるさい慣例などよい。もそっと近う。顔を上げい。許す」
吉宗は御目付を睨みながらせかせかと言った。
「まったく城中は堅苦しくてならぬ。まあ、それを律するのが予の勤めでもあろうが、なにかとそこにおる目付が五月蠅うてな」
吉宗の物言いに御目付がゴホンと咳払いした。
ちなみに匍匐蠢動とは体を少し左右に動かし前へ進むふりをすることだ。

「進みたいが進めなくてこのままです」という意を表すこうした際の慣例なのだ。
さらなる吉宗の「それへ」に、
春貞は顔を伏せたまま、大岡より半間ほど吉宗の座へにじり寄った。
吉宗の話は先の騒動を裁き、終息させるものだった。
「お主らとしては尾張の問題をこの吉宗に知られず処理したかったに違いあるまい。
しかしそれは無理じゃ。
尾張藩は知ってのとおり徳川御三家筆頭であり、幕府を、すなわち予の政治を補佐する立場にある。したがってその動向は即徳川政権に影響を及ぼす。
よいことはともかく悪しきことはどのような小さなことでも幕府は知っておかねばならないのだ。のう、忠相」
「御意。蟻の穴から堤も崩れると申しますでな」
大岡が答えた。
「ただし、春貞、心配は無用じゃ。
継友は勿論、江戸家老や附家老をとがめるつもりはない。なによりもお主らの働

きにより未然に事が防げたのだからな。
それに、すでに継友より詫びと共に事の首謀者と加担した者どもを厳罰に処したとの報告を受けておる」
吉宗は饒舌だった。
「確かにこの度の企みは捨ててはおけない事件であった。
家臣が藩主や上司を亡き者にしようなどとは言語道断じゃ。
罪は次席家老や奏者たちの一部にあることは明白だが、また継友や補佐する家老や目付たちの心の緩みもあったに違いない。
しかしな春貞。
命を狙われた者を罰するとならばこの吉宗も罰せられねばならぬ。
分かるな春貞。
なにせ予は市井で二度も命を狙われ、春貞、お主に助けられているのだからな。
それも予の件はいまだに調べがおわっておらん」
吉宗は再び控えている目付を睨んだ。
「御意」
目付の言葉に、

吉宗は楽しそうに声を出して笑った。
「江戸家老永井主水には多くの心労をかけたようじゃ。いたわってやれ。それから弥三郎のことこれからも宜しくな」
そう呟いて腰を上げた吉宗は、
「そうそう、春貞、お主今日は無紋のようじゃがそれでは些か寂しい。今後は尾州三つ葵でも徳川葵でも好きなものを使え。予が許す。
両名共大儀であった」
再び平伏した二人を後にして八代将軍吉宗の姿が白書院から消えた

四

小石川養生所は相変わらず忙しい日々を送っていた。
晩秋の木漏れ日が養生所の玄関に差し込んでいたが、表門前に御忍駕籠（おしのびかご）が止まった。
駕籠から出てきたのは尾張藩江戸家老永井主水であった。
主水は付き添いの藩剣術指南役堀田万之助に腕を支えられながら門をくぐった。
「しばしお待ちを」
掃き掃除をしていた弥三郎が慌てて小川笙船へと知らせにいった。
永井主水が養生所を訪れたのはこれが初めてだった。
知らせを受けた笙船と春貞、それにまだ痛々しい姿の幸江が八重に支えられ出迎えた。
粗末な医師の控え部屋に座した主水は笙船と春貞に頭を下げた。
「この度は娘幸江の命をお助けくださり、何とも御礼の申しようもない」

と畳みに手をついた。
普段は藩主以外、手をついて頭を下げることなどない永井主水だったが、この度の一件で体を壊したこともあって急に老けたように思えた。
賄中間の八重が煎れた茶とささやかな茶菓子で和やかなひとときを過ごした。
「隠居願いをな、殿にお願い申し挙げたのじゃが承諾してくださらんのじゃ」
茶で喉を潤しながら主水は大きなため息をついた。
「継友さまにとってご家老は大切なお方。いましばらくご奉公せよとの意なのでしょうな」
笙船が慰めた。
永井主水は堀田万之助が抱えていた風呂敷包みを小川笙船の前に差し出した。
「先生、これは心ばかりの礼じゃ。国許の殿にもご相談申し上げた上でのこと。怪しい金子ではござらん。
こんな形でしか礼ができぬのが歯痒いが、お許し願いたい」
そういいながら主水は風呂敷包みを広げるとそれは切り餅が二十包み並んでいた。
五百両もの大金だった。

笙船は両手を膝につきその大金をしばし眺めていた。
春貞と幸江は笙船が怒り出すのではと緊張したが、なんと笙船は破顔し両手を畳みにつけて頭を下げた。
「ははっ、御家老のお気持ちこの笙船ありがたくお受けいたす。きっと貧しき者たちへ役立てますでな」
主水は安堵し、春貞と幸江は事の成り行きに驚いていた。
夕餉の時、笙船は真面目な表情で春貞に向かい問うた。
「春さんや、わしがあの大金を躊躇わずに受け取ったことを蔑視してはおらんかな」
と箸を使いながらいった。
そこには春貞、幸江の他に本道の岡丈庵、外科の村山自伯、眼科の笠原養瑚そして笙船のはからいで弥三郎も末席に連なっていた。
すでに弥三郎がただの下僕ではないことを養生所の誰もが知っていた。
春貞は箸を箱膳に置き、姿勢を正して笙船に向かい合った。
「先生、心中お察しいたします。いつもならこの種の話し、お怒りになり突き返

すのにこの度先生のお気遣い何といってよいか、ただただ頭を下げるしかありません」

「医は仁術、金で物事を判断したり動いてはならぬというのがわしが心してきたことじゃ」

笙船は春貞を見て、

「春さんや、あの金はな、本来御家老はお前さんへと持ってきたものじゃよ。しかし御家老は必ずお前さんに突き返されると知ってな、わしに差し出されのじゃ」

一同は笙船の次の言葉を待った。

「ご一同にはあらためて申すことではないが、この七月に養生所は入居者を百人まで拡張したな。その年間の費えとしてご公儀より下し置かれる金子は五七四両余りになる」

岡丈庵が頷きながら話しを受けた。

「この財政難のおり、医療活動にご理解をいただている公方様や両町奉行所のおかげですな」

赤ひげは頷きながらも、まだまだ養生所の任務は大きくならねばならない、入居

者枠も最低百五十人は必要だと持論を展開した。
「それに今年もすぐに師走じゃ。師走は皆も承知のように下し置かれる予算では賄いきれぬことも多い。
わしは御家老の申し出をありがたく受け、貧しい人たちのために使いたいと心を変えたのじゃ。それに失礼ながら出所が明白な金じゃでな。
ただし春さんや、金がいるときは好きに持って行くが良い。もともとはお前さんの金だからな。
ともあれ皆のおかげでこの養生所、よい正月が迎えられようぞ」
と茶化した。
しかし理由はともあれ、大金を受け取る決断が笙船にとっていかに辛く苦いものであるかを知る岡丈庵や村山自伯、笠原養瑚はもとより春貞らの目にはうっすらと光るものがあった。
「まあまあそれもこれも、皆が一丸となって勤めてくれるおかげよ。
で、な。先ほど八重に酒を出すようにと願ったので今日は祝いだと思って飲んでくれい。
それにな、今日の養生所は大金持ちだでな」

拍手が湧いた。
ちょうど酒を持ってきた賄中間の八重が、
「あら、皆様、酒が入る前に上機嫌でないかい」
と不思議な顔をした。

春貞の傷も当初思っていたより完治には日にちがかかりそうだった。
しかし動けるようにはなったことでもあり、あと数日で師走となるある朝、春貞と幸江は一緒に金杉の定吉の宅へ向かった。
事件依頼ずっと治療・療養やら後始末で時間が取られ、まともな礼をしていなかったことが気になっていた。
定吉は神棚を背に十手を磨いていた。
「親分、礼が遅くなり済まない」
春貞が頭を下げると定吉はあわてて、
「困りますぜ春さん、わっしは何のつっかえ棒にもなってませんや」
と笑いながら二人に火鉢の近くに寄るよう勧めた。
「おかげでな、尾張にも我々にもお咎め無しで済んだ。親分や伊丹さんにとって

は気苦労が多い厄介ごとだったに違えねえ」
定吉は火鉢を火箸で突きながら、
「まあ、申し上げるまでもありやせんが、お奉行の差配と気遣いのおかげですよ。ただし春さんに言われあの藩出入りの商人たちを調べましたがね、さすがに御三家筆頭のお家柄だ。いえお嬢さまがいなさるからの世辞ではありませんぜ。本当に悪い噂がないのが不思議でしたぜ。これも幸江さまのお父上が睨みを、いえね、しっかりなさっているからでしょうな」
一呼吸入れた定吉は、畳みに両手をつけ、
「しかし春貞さま、わしからお詫びを申し上げなければならないことがありやす」
「ああ、俺のことを伊丹さんに伝えたことなら気にせんでくれ。そうでなければ親分とて奉行所の連中を動かすことができなかったのだと察しているさ。こちらこそ余計な心配をかけてすまない」
春貞は定吉の両手を掴んで揺すぶった。
そのとき、女房のお勢が顔を出した。

「春さん、お嬢さま、いま煮染(にし)めが上がったのでうちで昼餉を召し上がってくださいましな」
と願った。
「お勢、正月料理の稽古か」
涙ぐんでいた定吉親分が照れ隠しか問うた。
「お前さん、いやですよ。それは内緒事ですよ」
お勢は笑いながら奥に引っ込んだ。
定吉親分のところで、牛坊・大根・蒟蒻・豆腐をだし汁と醤油で煮しめたものをおかずに春貞たちは腹を満たした。
「美味しい。だし汁とお醤油だけではないようですね」
幸江が配膳をしてくれたお勢に聞いた。
「はい。お酒をね、少し下味として使うとこくがでるんですよ」
和気藹々の時間を楽しんだ二人は四つ前に日本橋室町に店を構える「い組」へと向かった。
二人の並んだ背を眺めながらお勢が、

「あのお二人、お似合いだねえ」
と呟き、定吉と顔を見合わせた。

「い組」に寄ってみると女房の志津が出てきた。
「春さん、幸江さま。主人はいま火事場でございましてね。でももうすぐ戻るはずですからお待ちになってくださいな」
火事はやはり火を扱う機会が増える冬場が多かった。
春貞が雪駄を脱ごうとしたとき、数十人の男たちが一団となって戻ってきた。
近所の若い女たちから奇声が上がる。
威勢が良く男伊達の火消したちは女衆あこがれの的だった。
男たちは腹掛、股引に刺子の半天を羽織り、草鞋がけで手に手に長い鳶口を持っていた。
中には刺子の頭巾と手袋をしたままの者もいた。
煤で汚れ、火事場の前で水を被るために濡れたままの者がほとんどだったが皆よい面構えだ。
頭の政五郎を先頭に、頭取の伊之助、小頭の末松の顔があった。

誇らしげに纏を持っているのはあの祐助だった。
その他梯子持、平人足たちが整然と戻ってきた。
春貞はそのとき、土間の隅に春貞が図面を書いたあの消火道具が鎮座しているのに気がついた。出来上がった物を見たのは春貞も初めてだった。
「春さん、お待たせしましたな、申し訳ねえ」
政五郎は刺子の半天を脱ぎながら詫びた。
どうやら火事は小規模だったようで、鎮火するのも比較的早かったのだと説明しながら手足を拭いて部屋に上がった。
店先では女房の志津が、
「ご苦労だったねぇ、皆怪我はないかい。支度ができた者から交代で湯屋に行っておいで」
と叫んでいた。
「取り込み中に邪魔してすまねえ」
春が過日の礼に伺ったというと政五郎は破顔しながら、
「それにはおよばなかったものを」
と恐縮した。

永井幸江は養生所で傷の手当てを受けたとき、ずっと「い組」の男たちが陰護衛をしてくれたことを知り政五郎の前に両手を突いて頭を下げた。

「いけねえよお嬢さま。あなた様とわっしらは身分が違いまさあ。そんなことをされてはわっしはここに座っちゃあいられませんや。どうかお手をあげてくださいまし」

と願った。

真顔になった政五郎が幸江に向かいいった。

「よい機会ですから余計なことを申します。

幸江さま。隣にいらっしゃる春貞さまはやはり大層なお方でございますよ。わっしらは尾張藩のために動いたのではございません。皆、春貞さまのお人柄故のことでなんで。

礼を言われるならわっしではなく春さんにだ。そうでございましょうお嬢さま」

政五郎は疲れも見せずにそう言い切った。

幸江はもう一度政五郎に頭を下げた後、隣にいる春貞を仰ぎ見た。

春貞は照れた。

落ち着いた頃に志津が茶と茶菓子を持ってきた。
話しは春貞が図面を掻いた消火道具に移っていた。
「頭、名が決まったかい」
春貞の物言いは普段のそれに戻っていた。
「へい、春さんのお望み通りあの大岡様が竜吐水（りゅうどすい）と名付けてくださいやした」
「ほう。なるほど、竜の口から水を吐く様という意味ですな。いい名だな頭」
春貞の言葉に頷きながら政五郎は、
「いろいろと試しやしたし改良もしやしたが、今のところ放水距離は二階建ての屋根までやっとですな。ただし水の量はわっしが考えたより弱いのがたまに傷ってとこですか」
茶をすすり、続けた。
「でもね春さん、延焼防止には役立つと思いますぜ。後はうちの野郎共に要領を覚え込ませることが肝心なんで。どうにも使い方によって水量や勢いが違うんですな」

政五郎は煙管を取り出しながら、
「春さん、土間にあった竜吐水、ご覧になりましたか」
「ああ、俺は図面しか知らねえ訳だが、形になったのを見るのは不思議なものだな」
横に座していた幸江がいった。
「春貞さま、あの竜吐水の形はどこか駕籠に似ていませんか」
春貞は自分自身でも気がつかなかったことを指摘された思いがした。
「ああ、確かにな。俺も気づかなかったが言われてみれば、確かにな」
そのとき春貞の頭に、第六代尾張藩主徳川継友が「頼みましたぞ、春貞どの」といいつつ去って行った柄黒塗の大名籠が浮かんだ。

第六章　春の訪れ

一

春貞と幸江は政五郎の宅を辞し、尾張藩江戸家老永井主水の私邸がある市谷まで戻り、幸江を送ってから一人小石川養生所へと戻ることを考えていた。
日が短い師走の一日、しかしまだ町中は明るく人通りがあった。
二人は相変わらず人目など気にせず並んで歩を進めていた。
日本橋界隈に入ったとき、大店の商人風の男が若い娘と小僧を連れていたが、見るからに食い詰め浪人と思える二人に絡まれていた。
「この小僧が武士の魂に触れおったと申しておる」
「手前は触れてません」
「無礼な。武士が虚言と申すか、そこへなおれ」
もう一人の浪人が、

「とはいえわしらは話の分かる男たちよ。魚心あれば水心と申す。酒代でも置いて無事に帰るのが利口というものだが、どうするな」
懐手しながら腰を曲げ、頭を下げている若い娘をねぶるように顔を近づけ脅した。
春貞が動こうとするとすでに幸江が飛び出していた。
「そこまでです」
浪人たちは振り向いたものの、二本差しとはいえ若い女の姿に甘く見たのかにやにやしながら、
「邪魔するな。怪我をするぜ」
とすごんだ。
春貞は商人たちを後ろ手にかばいながらにこにこしている。
「怪我をするのはお手前たちです」
幸江に近い浪人が真顔となり腰を少し落としたが、右手はまだ垂らしたままだった。
「抜刀術だ、幸江」
春貞が叫んだ刹那、浪人が抜きはなった。

幸江は後手に抜きながら鋭い初手を防いだ。
浪人は深追いせずそのまま刀を鞘に収め、再び抜刀術の構えに入った。
「変わろうか」
春貞が問うたが幸江は首を横に振った。そして相手に向かって脇構えのまま半身に構えた。
浪人が気配も無く動いた。
と、刹那幸江の体は浪人に向かって動き、刀と刀が火花を散らしつつ幸江は浪人の横をすり抜けたと思ったら、返した刀が光の弧となり浪人の首筋を撫で斬った。
「むう」
浪人は信じられないといった表情をしたまま、どっと崩れ落ちた。
後ろで凄んでいた仲間はいつの間にか姿を消していた。
幸江は静かに血振りをして刀を鞘に収めたが、見れば倒れた男は抜刀の途中で幸江に倒されたことが分かった。
「どなさたまかは存じ上げませぬが、危ないところをお助けくださり、このとお

りでございます」
幸江と春貞に商人は深々と頭を下げた。
聞けば浅草元鳥越で仏壇仏具商を商う、太子堂の当主長兵衛と一人娘の夏穂(か ほ)が小僧を連れての帰り道だったという。
「気を付けていかれよ。我々は町方にこの旨届けなければならぬのでな」
春貞がいうと、
「勝手ながら急用を抱えておりますのでこの場は御礼もできません。せめてお名前をお聞かせくださいませ」
長兵衛は二人の顔を交互に見ながら願った。
「礼など無用です。逃げた男が仲間でも連れて戻ってくると厄介です。早くこの場をお離れになった方がよろしいでしょう」
幸江の言葉に、後ろ髪を引かれるように長兵衛が何度も腰を折りながら娘と小僧を急がせ遠ざかっていった。
「手間をとってしまったが、幸江、大分腕が上がったようだな。ちょいと驚いたぜ」

春貞は先ほどの手筋を思い出しながらいった。
「春貞さまのおかげです。しかしこのとおり手強い相手でした」
差し出した幸江の右袖先が切れ垂れ下がっていた。初手に抜き合わせた際に袖が浪人の抜き身に触れたようだ。
市谷の永井家私邸で幸江と別れた頃にはすでにあたりは薄暗くなっていた。
別れ際、幸江は、
「春貞さま。明日、養生所に伺ってもよろしいですか」
と名残惜しそうにいった。
春貞はそれには気がつかない体で、
「またまた金魚の糞が始まるのかい」
と笑いながら、
「ああ、待ってるぜ」
と背中を見せた。
私邸の門前で、幸江はしばし春貞が遠ざかっていく姿を見つめていた。
ここから小石川養生までは一里強だから、春貞の足なら半時もあれば十分の距離だった。

神田川沿いに歩き、牛込御門を右手に次の船河原のどんどん橋を渡れば今朝一番に立ち寄った定吉御分の宅がある金杉水道町は目前だ。
思えば小石川養生所が診療をはじめてから後半月ほどで一年が過ぎることになる。
夜風が冷たく気持ちが良かった。
春貞の口から投げ節の一節が流れた。
「松の葉越しの、磯辺の月は～
　千歳経(ふ)るとも～変わるまい～」
ああ、師匠にあれから礼もしてなかったな、
そう思いながら春貞は首巻きを緩め、鼻歌を唸りつつ安藤坂をゆっくりと歩いた。

二

翌日の辰の刻、養生所の玄関に幸江の声が響いた。
「おはようございます。金魚の糞がお約束通り罷り越しました」
幸江精一杯の冗談なのだが、玄関に現れた春貞に、
「おい、いまここでは飯時だ。大きな声で糞などと怒鳴るな」
と叱られた。
奥から小川笙船が、
「幸江さんや、朝餉がまだなら一緒にどうかな」
と怒鳴った。
「ありがとうございます。いただきます」
これまた元気な声で返事をした幸江は玄関に突っ立っている春貞をそのままに朝餉の場所に向かった。
「俺は何なんだ」
春貞はぶつぶついいながらも幸江の後を追った。

養生所は明け四つ(午前十時頃)から診療が開始される。その間、医師たちは薬の調合や診療手順の確認などで忙しい時間を過ごすことになる。
そのとき、
「ごめんくださいまし」
と玄関で男の声がした。
弥三郎が対応し、竹箒を玄関脇に立て掛けて春貞がいる診療部屋にやってきた。
「春さん、お客様ですぜ。太子堂長兵衛と名乗っておられますが」
と取り次いだ。
「うむ。先生方、少しの間控え部屋をお借りします」
そう言いながら春貞は玄関に向かった。

医師の控え部屋に長兵衛を通した春貞はちょうどすれ違った八重に、
「朝の忙しいところすまんが客に茶を願えるかな」
と頼んだ。
にっこり頷いた八重が台所へと急いだ。

「おはようござる。長兵衛どのといわれたか。よくここがわかったな」
いささか緊張気味の客に春貞は伝法にいいながら座した。
「はい。あのときお名前も聞かずに立ち去りましたこと、誠に失礼いたしました。
お助けいただきました折り、町方に届けるとおっしゃいましたことを思い出し、些か懇意にしておりますお役人にお聞きいたしましたところ『それなら首巻き春さんに違いない』と教えていただきましたもので」
と嬉しそうに説明しながら袱紗に包んだものを春貞に差し出した。
それはどう見ても切り餅の包みのようだった。
そのとき八重が茶を持ってきたので会話は途切れた。
「八重さん、ありがとうよ」
八重は会釈をして踵を返した。
「なるほど、それで合点はいったが礼ならいらねえよ」
「そうでもございましょうが、命の恩人に礼もできないのではこの長兵衛、世間さまやご先祖さまに顔向けもできません。これは心ばかりの御礼でございます。

是非曲げてお納めいただけませんでしょうか」
にやりと笑った春貞は、
「それはお前さん方の道理だ。承知だろうがこの養生所は町奉行所の管轄だ。礼とはいえこれは受け取れねえ」
一息入れた春貞は、
「気持ちだけはいただいた。お帰りいただこう」
と優しくいった。
長兵衛は畳みに伏せながら、
「ご無礼は承知の上でございますが、何卒曲げてご容赦を」
と再び願ったが、春貞は、
「わかった。長兵衛さん、ではこうしようか。もし俺が仏になったら一番小さな仏壇を備えてくれめえか。な、そうしてくれ。だからこれは持ち帰ってくんな」
しばらくうなだれたまま考えていた長兵衛は、
「致し方ございません。今日の所は下がりますが、これを機会に是非是非お付き合いの程よろしゅうお願いいたします」

うなだれて帰って行く後ろ姿を春貞と弥三郎が見送った。
「春さん、これで終わりとはならんでしょうな」
弥三郎が楽しそうに笑い、春貞は渋い顔をした。

養生所は開設されてからあっと言う間に一年が過ぎ、また忙しい師走の風が身にしみる時期になった。
養生所は常に入所者の定員はいっぱいだった。
入所定員数は当初の四十名から百名と大きく広がったものの、それでも常に五十名ほどの病人・怪我人が順番待ちしていた。
それらの順番待ちの患者は、退院する者が出ればすぐに入所してくるものの、待つ日数は二ヶ月や三ヶ月はざらだった。
診療は本道(内科)の他、外科と眼科が常設されたが、限られた医師だけで日々百名の患者を診ることは実に骨の折れる仕事であった。
診療が開始されたころ、春貞と幸江は薬園近くの場所で稽古をはじめた。
春貞は勿論、幸江も診療に関わる手伝いができるはずもなく、下手をすれば医師たちや賄中間、看護中間らの邪魔になってしまう。

稽古以外することはなかった。
「昨日の立ち会いを見た限りでは、もう傷はすっかりいいようだな」
袋竹刀を振りながら春貞は幸江に向かい合った。
「はい、おかげさまで。しかし腰の傷はどこか引っかかる感じもして違和感がまだ取れません」
「それは俺も同じだ。矢の傷は勿論まだ時折痛むな。そういえばお前に言ったことがあったか、胸に三年ほど前に受けた金創があるが、季節の変わり目などいまだにちくちくと痛みやがる」
春貞は袷の上から傷の箇所に触れた。
「さて、はじめるか」
「お願いします」
そのとき、ふと春貞は思いついたことがあった。
「幸江、今日はお前に無刀の技を体験させてみようか」
幸江の顔が嬉しさと不安を合わせた不思議な表情になった。
「いいか、これは稽古と言うより座興みたいなものだが、一度体験しておくのも無駄にはなるまいからな」

そういった春貞は袋竹刀を草むらに置き、土の上に正座した。無論その手に刀はおろか武器は持っていなかった。

「さあ、思い切って打ち込んでこい」

春貞が冷たい空気を引き裂くような声でいった。

一瞬躊躇った幸江は春貞の正面に立ち、青眼の構えから上段の構えに移り一気に間合いを狭め、裂帛の気合いと共に袈裟に斬った。

袋竹刀とはいえ春貞の肩が撓るほどの勢いだったが、刹那幸江には春貞がすっと間合いの内に入ったかに見えた。

と思ったら春貞の手が幸江の袋竹刀の柄に触れた刹那、両手が痺れ眼前にいるはずの春貞の姿が消えただけでなく振り下ろした竹刀が空を飛び、小石の上にがらりと音を立てて落ちた。

気がつくと春貞は幸江の斜め右後ろに片膝立てに座していた。

「こ、これが無刀ですか。わたしはどうされたのでしょうか」

棒立ちとなっている幸江を仰ぎ見ながら春貞は静かに立ち上がった。

「これまで俺が相手の刀を奪ったところをお前は何度か見たな。しかし見るのと自分が取られるのとでは覚えが随分と違うと考え、立ち会ってみた」

我に返った幸江は春貞の着流しに抱きつくように近づき、
「春貞さま、私が二度でしたか、師匠が相手の武器を奪ったときは相手の武器を手にされてました。しかしいま私の竹刀はあちらに飛んでいますが」
深く呼吸した後、
「嗚呼、思い出しました。藩道場では金子基次郎どのの竹刀をやはり飛ばされましたね」
再び大きく呼吸しながら春貞に迫った。
「よいところに気がついたな。
思い出して欲しいが、金子どのを別にしてそのとき、相手はどうなったか覚えているか」
「はい。あっ、確か二人とも手首を折られていたと思います」
「そうだ。俺がいま、お前の持っていた竹刀を奪おうとすればお前の腕を痛めなければならぬ。まさかそれはできんだろうて。無論、昇平橋のときのように、匕首といった刃渡りが小さな相手だと奪うより落とした方が早い場合もあるがな」
春貞は笑いながら、
「聞いたことがあろうが、柳生石舟斎さまに斬りかかった家康さまの木刀を石舟

斎さまが空に飛ばした逸話があるな。それを思い出したのだ」
そのとき、
「お見事」
という感嘆の声を上げながら養生所見廻り同心伊丹鉄太郎が姿を見せた。
「お二人がこちらと知って寄らせてもらったが、いやはや眼福を得たぞ、春さん。
春さんが敵でなく幸いであった」
伊丹が感服の体でいった。
「伊丹さまもお人が悪い」
春貞は頭を掻きながら照れていった。
「春さん、すまんが今日は頼みがあってな」
三人は近くの切り株に座った。

三

伊丹の話しはこうだ。
今朝早く、あの太子堂当主長兵衛が南町奉行所に現れ、対応した伊丹の同役である米倉小太郎に養生所の春貞様という方にお願いしたき儀があり、是非仲立ちして欲しいとの願いだったという。
どうやら長兵衛は養生所で春貞から礼を断られたその足で南町奉行所へ出向いたことになる。
「ちょっと待ってください伊丹さん。なぜ八丁堀のお役人であるお手前方が商人の依頼で仲立ちをされなければならんのですか」
春貞の怪訝な視線を外しながら伊丹は、
「まあ、もっともな怪訝だな。有り体に申せばあの太子堂の主には北町も南町も至って借りがあるということよ」
「借りですか、奉行所が」
春貞は伊丹の言う意味がよくわからなかった。

伊丹が詳細を話し始めた。
その太子堂は浅草元鳥越あたりでは一番の大店だが、近所の貧しい者への施しをはじめ、祭事があるといつも多額の寄付をするのだという。
「春さんは覚えておろうか。数年前に江戸一帯を襲った強い雨を伴う野分があったことを。
町屋は勿論だが武家屋敷も大きな被害を受けたことがあった。
両奉行所も例外ではなく一部の屋根が飛び、土塀が崩れるなど甚大な被害を受け、あの大岡様も呆然とされておられたわ」
そのときの様が思い浮かんだか、伊丹はしばらく虚空を睨んでいたが、
「その野分が通り過ぎたおり、あの太子堂の長兵衛がなんと千五百両もの大金を寄付すると奉行所を訪れたのだ」
「ほお」
「奉行所が商人から不用意に大金を受け取るわけにはいかんと一度は断ったが、長兵衛は『僭越ながら、お奉行所のお役目に滞りがでれば困るのは我ら町人』というてな。

結句その日は持ち帰ってもらったが、承知の通り幕府も財政難の折、しばらくはどうしようもないと諦めておったのだ」

「なるほど、それで」

春貞は先を急がせた。

「あの御仁、見かけより肝が据わっておるようでな、ある日幕閣から南北のお奉行に太子堂からの寄付を受けよとの異例の命があったというのだ。

要は商売上の付き合いから発し、あの御仁はご老中といった方々にも顔が広いということがわかったのだ」

とどのつまり背に腹は代えられないということもあり、南北奉行所はその寄付・寄進でいち早くお役目に支障の無い復旧ができたのだという。

「そうした大事は多々あっては困るがな、我らもそれから奴には一目置かざるを得ないのだ」

春貞は伊丹が言わんとすることがおぼろげながら見えてきたような気がした。

「ふむ、それで伊丹さん、俺にどうしろと」

「それだ。近々、春さんと幸江さんとでな、太子堂の主を訪ねてはもらえまいか。それが長兵衛の願いのようだ」

伊丹の表情からはまことに困ったという意が見て取れた。
「そうですか。なるほど、伊丹さんらとしては長兵衛からの願いは無下に断れない付き合いができたということですな」
「頼めるか春さん。友でもある米倉小太郎から頭を下げられた俺は春さんに頭を下げるしかないでな」
「わかりました。どうやら長兵衛という御仁、なかなかの人物のようですな。近々幸江を誘って立ち寄ってみましょう」
春貞が隣にいる幸江と頷き合いながらいうと伊丹はほっとした顔をし、
「すまん」と頭を下げた。
師走に入るとすぐ、春貞と幸江は浅草元鳥越の太子堂を訪ねた。
太子堂は仏壇仏具を取り扱う老舗であり、当代の長兵衛でちょうど七代目になるという。
「これは、大きな御店ですね」
広大な屋敷に住んでいる幸江も少々驚いたようだ。
何しろ、太子堂の店は白壁の土蔵作りで瓦葺きの二階建て、そして敷地のうち漆喰作りの表通り側だけでも間口は十五間ほどもある大店中の大店だった。

「御免。春貞が伺ったと主の長兵衛どのにお取り次ぎ願いたい」
出てきた小僧に春貞は丁寧に願った。
この日の春貞は黒い浅草縞の着流しに小紋の羽織を肩にかけていたが、変わらず椿の花をあしらった手ぬぐいで首を巻いていた。そして無腰だった。
一方幸江は上品な花柄を縫い付けた小紋に袴姿、そして大小を腰に差していた。
主の長兵衛の喜びようは大変なもので、二人の手を引くように自ら奥座敷へと誘った。
店で働いている者たちは皆きびきびと立ち振る舞っていたが、いつもと違う主の様に驚いていた。
春貞は、
「長兵衛さん、有り体に申すが今日は八丁堀から頼まれてな、断りきれずにこうして伺った。よしなに頼む。ただし礼は困る」
と笑顔でいった。
大きく頷いた長右衛門は幸江に向かい、
「春貞さま、そして幸江さまのご身分を八丁堀の旦那衆からお聞きしこの長兵衛、腰を抜かすほど驚きました」

と平伏した。
春貞は、
「手を上げてくれ。長兵衛どの。幸江はともかくそれがしはこんな恰好です。気楽に頼む」
と願った。
しばし出された上質の茶と茶菓子で話しがはずんだ。
「お茶がとても美味しい」
幸江がいうと春貞も、
「養生所の茶は茶なのか煎じ薬なのかわからんとよく八丁堀の旦那方にもいわれるからな」
と春貞は笑いを誘ったが、真顔になって長兵衛に問うた。
「長兵衛さん、八丁堀で思い出したが、お前さんが野分の際に両奉行所に大金を寄付したとか、近隣の貧民たちへ施しをしていると聞いた。商人の銭金は武士の刀に匹敵すると聞く。
なぜというのも変だが、理由があったら聞かせてくれまいか」
頷いた長兵衛は笑顔をくずさず静かに話し出した。

「こんな話しは当人が喋ると嫌みになります。ですが春貞さまの疑念を晴らすために聞いていただきましょうか」

長兵衛の先祖は京都で古くから仏壇仏具を扱っていたという。しかし一六〇三年、征夷大将軍に任官した徳川家康が江戸幕府を創設して五年目に長兵衛の先祖は江戸の発展を確信し商売の中心をここ江戸に置いた。

その先見性と江戸の発展が相俟ってか太子堂は急速に商売を広げていった。

長兵衛はいう、

「いやな物言いとお叱りを受けるかも知れませんが、この商売は流行り廃りがございません。

人は皆いつかは死に土に帰りますでな。

それも人の死に貴賤はございません」

特に先々代の長兵衛は市井だけでなく武家にも好まれ、以来顧客筋は旗本や城中にまで及んでいるという。

「京の店は勿論、ここお江戸の商いもおかげさまで真面目に勤めば間違いのないものとなりました。ただし手前はふと虚しい思いに捕らわれるようになりまして

ございます。春貞さま、幸江さま」
長兵衛は春貞から幸江へと順に顔を向けながら続けた。
「手前どもが扱っております品の多くは人様が悲しみに暮れるときこその品でございます。そして今ではそうでもございませんが、手前が後を継ぎ七代目の長兵衛となりました頃は、僻(ひが)み根性かも知れませんが、人様の目にどこか蔑みを感じましてございます」
幸江は不思議そうに長兵衛を見た。
「口さがない人々から人の死を商いにしていると罵られたこともございます。いえ、手前もまだ若かったからでしょうか随分と悩みました」
そのとき、襖が開き娘の夏穂(か ほ)が両手を突きながら、
「いらっしゃいませ。過日は父ともども命を助けていただきありがとうございました」
と頭を下げた。
「こちらにお入り」
父長兵衛に促されて父の隣に座った娘は十二歳だという。京人形のような愛らし

い娘だった。
夏穂は女性なのに男装の幸江が珍しいのか、しばし幸江に見とれていた。
「そうそう、話しの途中でしたな。
私もこの歳になり、それなりに世間というものを知りましてございます。
そして娘を授かりひとかどの父親になって気がつきました。
金は幸せを保証してくれないということです、幸江さま」
長兵衛は娘の背に腕を回しながら、
「この身代をそのまま娘に残し、婿をとって商いを続けることが果たして娘の幸せになるものかと思ったわけでございます。
昨年も駒形の同業者が娘婿に裏切られ、店は他人の手に渡ってしまいました。
それもこれも金が、有り余る金が娘婿の気を狂わしたのだと存じます。
勿論、娘を幸せにしてくれる婿に恵まれることを願っておりますが、こればかりは分かりません」
ふと遠くを見る目になった長兵衛は、
「そうそう、本来なら妻もこの場に呼びたいところですが、労咳で寝込んでおりますが故失礼させていただきます。

いくら金子（きんす）があってもどうにもならないことがあるのですな春貞さま」
その寂しそうな横顔に再び笑顔が戻り、
「そう、話しがそれましたかな。
要は、人が生きていく上で金は必要ですし、少ないより多い方が良い。これは誰しもが同じ気持ちでしょうな。しかしですな春貞さま、多すぎてはならんのです」
「多すぎるというのがどれほどの事を言われているのか、それがしにはわからんな」
春貞は呟いた。
「お聞きになったことはございませんか。金持ちと塵は溜まるほど汚くなるという話しを」
長兵衛が苦笑しながら続けた。
「人は成功し金が貯まると満足すると思われるかも知れませんが、逆にもっともっとと望むものです。こうなるとまるで餓鬼同様ですな。
手前の若い頃がそうでした。きっとこの商いが嫌いだったのだと思います」

それに、と断りながら、
「思えばどんなに金があっても、一度に着る着物の数はしれてます。いくら好きな食べ物を列べてもすべて食することはできません。なによりも人の命には限りがございます。
そのことに気づいてから、春貞さま、幸江さま。手前はこの商いが好きになりましてな。
自分のためではなくやり方によっては人様のお役に立てると思い至ったからでございますよ。
それに今では百人あまりの使用人とその家族の生きる縁になっておりますので辞めるわけにもいきません」
長兵衛は自分や娘のためだけではなく世のため人のために金を使おうと考えたのだという。そう腹がきまったら金を儲けることが嫌ではなくなったらしい。
「私はこの江戸で生まれ育ちましたが、大阪商人たちの言葉に『きたのう貯めて、きれいに使う』というのがございますそうで、商い上はきたないといわれる程に無駄を省き倹約に勤め、資本を蓄えるのが商人の美徳。
一方、商売から離れれば、人として、世のため人のためにできるだけの事をする

のが美徳であり、それこそ商いの究極の目標であり醍醐味という考え方だそうです。
手前はそれを実践するよう日々自分に言い聞かせておるのでございます」
大きく息を吐いた春貞は、
「俺もそう思いてえほどの金を持ってみたいものだ」
笑った春貞につられて思わず幸江は声を立てて笑った。
その美しい二人の笑顔を仰ぎ見ながら夏穂も笑顔を見せた。
「ただし、金で人を動かそうと考えたことは一度もございません。
是非これをご縁に今後もお付き合いくださいますようお願いいたします」
と願い、長兵衛は、
「退屈で一方的なお話しになってしまいました。お詫びいたします」
と二人に詫びた。
「いや、面白いと申しては失礼だが、楽しかったぜ」
二人は一時ほどで太子堂に背を向けたが、春貞は振り返り、
「ご妻女には十分な介護をなされていようが、もしなにか心配ごとがあったときには遠慮無く養生所にご相談あれ」

といった。
長兵衛は深々と頭を下げた。その横から、
「幸江さま、またお会いできますね」
という夏穂の声が響いた。
幸江が笑顔で頷きながら手を振った。
「奇特な奴も世の中にはいるものよなあ」
春貞が呟いた。

四

今年もあと半月というある日、養生所表門に立派な乗物が駐まった。
駕籠の中から顔を見せたのは尾張藩江戸家老永井主水であった。そしておつきの者はやはり同藩剣術指南役堀田万之助だった。
主水はあの事件以来体調を崩したが、一応の片が付いたことから気持ちも落ち着

き、体力も回復してきたのかしっかりとした歩き方で玄関に向かった。
ちょうど玄関を通りかかった外科医の村山自伯が対応した。
過日の事件のおりに顔を見知った堀田万之助が、
「村山先生、その切はお世話になり申した。
今日は御家老が小川笙船先生にお目にかかりたく罷り越しました。お取り次ぎをお願い申す」
と願った。
「ははっ、受け賜りました。しばらくお待ちを」
と踵を返したその背に主水は、
「あいやしばらく。お手前が外科医師の村山先生でござるか」
主水が問うた。
村山は「いかにも」と答えると永井主水は深々と腰を折った。
「その切は御礼を申し上げる機会がなかったとはいえ大変失礼いたした。
娘幸江と春貞の命、お助けいただきこのとおりでござる」
再び玄関に立ったまま白髪頭を下げ、村山が慌てた。
そのとき奥から薬園で稽古をしていた春貞と幸江の声がした。

村山は無言で主水に頭を下げると二人にそのことを知らせ、続いて笙船を探した。
小川笙船は診療中だったと見え、永井主水が通された医師の控え部屋に顔を見せたのは四半時もたったころだった。
「これはこれは御家老、大変お待たせいたしました。
申し訳ござらん。
また過日は大変ありがとう存じました」
と笙船は五百両の件をそれとなく持ち出して挨拶した。
しかし永井主水はそれには触れず、
「お役目ご繁多のおり、邪魔をして申し訳ないが、この主水今年最後になるが、笙船先生に願いたき儀がありましてな、罷り越した次第」
神妙な顔で笙船に顔を向けた。
「はて、なんでございましょうな。なんなりと」
笙船が顎ひげを触りながら答えた。
同席した春貞と幸江も何ごとかと主水を注視した。

主水はしばらく春貞と幸江の顔を見比べていたが急に、春貞に膝行して近づき、その両手を取った。

「春貞どの、この主水、古狸一生の願いである。どうか娘を、幸江を嫁に貰ってはくださらんか。このとおりじゃ」

天下の尾張藩江戸家老が春貞に深々と頭を下げた。その両眼にはうっすらと涙が浮かんでいた。

「ま、まってください、ご家老。急に何ごとですか」

春貞は慌てた。

その慌てた姿に笙船が声高らかに笑った。

主水は再び笙船に向かい直り、

「笙船先生には是非是非二人のお仲人を願いたいのじゃ」

これまた御三家筆頭、尾張藩江戸家老が小石川養生所の肝煎りに頭を下げた。

「ご家老。幸江さんは犬猫ではありませんぞ。

それがしのような風来坊になにを申されますか」

じっと春貞の顔を直視しながら主水は、

「春貞どの、お主しかおらんのじゃ。このじゃじゃ馬ではのう。幸江では不足

か、嫌か。
なによりもな、幸江がそなたを好いているのは無骨者のそれがしにもようわかるのじゃ。
なにしろ屋敷に戻り、わしと二人になるとな、お主の話しかしないのだ。こやつは」
と幸江を慈愛に満ちた表情で見つめた。
春貞が息をのみ隣に座していた幸江を見た。
そのとき、
「私では春貞さまの嫁御にはなれませぬのか」
幸江自身が臆することなく春貞に詰め寄った。
「いや、その、なんといったらよいのか。古狸が義父となるのがどうもな」
と頭を掻いたその背に大胆にも幸江がしがみついた。
「お受けいただくまで私は離れません。これが幸江の必殺技です」
幸江も照れと恥ずかしさを精一杯の冗談で和らげつつ両腕に力を込めた。
幸江の春貞に対する思いは一途だった。
「痛たたた、幸江、不作法だぞ。それに傷が痛い、離せ離してくれ、頼む」

春貞の悲鳴と一層高らかに笑う笙船と主水の声が師走の小石川養生所に響いた。

あとがき

松田 純一

筆者初めての時代小説である。

還暦をとうの昔に過ぎたいま、なぜ時代小説を書こうと思ったのか、その第一は自身が池波正太郎、藤沢周平、佐伯泰英、司馬遼太郎らのいわゆる時代小説のファンだからである。しかしまさか自分が時代小説を書くとは正直思いもよらないことだった。

それが今年（二〇一七年）の春先、急に「書きたい」と思った。

まさしくいきなりストーリーやプロットが浮かび、主人公を初めとする登場人物たちが自然に自己主張し始めたのだ。

大げさに思えるかも知れないが本当である。

自分なりに分析するなら、良くも悪くもこれまで見聞きした時代小説は膨大な量でもあり、流行り言葉でかつ大仰に例えるなら、そうしたビッグデータが私の頭の中で何らかの形を取り、自分なりに興味のあるストーリーやプロットを生み出したのではないかと思っている。

ともあれ舞台は小石川養生所である。
となれば主人公は榊原伊織と大岡越前すなわち竹脇無我と加藤剛の顔が浮かぶ(笑)。しかし基本は可能な限り史実に忠実でありたいと考えたし時代考証もこれまたできうる限りリアルなものにしたいと思い、養生所の肝煎は史実通り小川笙船とし、他の本道や外科・眼科の医師たちも実在の人たちを配した。
ただし主人公は得体の知れない風来坊、ヒロインは尾張藩江戸家老の一人娘とした。勿論フィクションだ。
さらに尾張藩主やその時代背景に関しては史実に頼ったが、家老や登場人物は架空の名である。また南町奉行所の奉行、大岡越前は申し上げるまでもなく実在の人物だが、登場させた与力や同心たちの名はこれまた創作である。
ストーリーはあまり深刻な展開はせず、心安らかに読めるようにと考えた。しかし何らかのリアリティを求めるとすれば時代小説の魅力は主人公たちの生き様はもとより、やはり剣術の魅力に他ならない。
この点も多くの文献を参考にさせていただき、尾張柳生新陰流の名手である主人公を引き立たせるべく気を遣った。そしていくつか剣を振るうシーンもあるが、私自身居合いの真似事をしていることが意外と役にたった。とはいえ柳生新陰流

の一端を主人公に語らせているものの、それはあくまで筆者の勝手な解釈なので念のため。

また手前味噌ながら本小説には小石川養生所の設立当時の出来事が表現はフィクションながら史実を重視して書かれている。したがって養生所の描写は勿論、当時の医療、町火消し、湯屋といった江戸中期の風俗などにも興味を持っていただけたら嬉しい。

ということで、本編はまさしく筆者自身が楽しんで執筆したものだ。

考えたプロットの通りにシーンを決め、登場人物を決めると彼ら彼女らが自然に江戸の町を歩き回る様が手に取るように見える気がした。

一番厄介だったことは自身が考えたストーリーに時代考証をマッチングさせることだったが、いかんせん、力不足の上ににわか仕立ての小説故不備も間違いも多々あろうかと思う。しかし虚の世界を作る面白さを知ってしまったような気がして些か困惑もしている。

最後に、小説ではあえて説明していない事項も多い。例えば大岡忠相と主人公の出会い、岡っ引きの親分や「い組」の頭とどのように親交を持ったのかなどなどだ。これらを説明するとそれだけでページが増え、緊張感が間延びするように思

えたのであえて次回作への布石と考えた。
ともあれ楽しんでいただければ幸いである。

主な参考文献

安藤優一郎「江戸の養生所」
ディアゴスティーニ「週刊江戸　小石川養生所の開設」
酒井シヅ「まるわかり　江戸の医学」
青木歳幸「江戸時代の医学　名医たちの三〇〇年」
菊池ひと美「江戸衣裳図鑑」
菊池ひと美「江戸の暮らし図鑑」
菊池ひと美「江戸おしゃれ図絵」
江戸人文研究会「江戸の用語辞典」
野火迅「使ってみたい　武士の日本語」
山田順子「江戸の暮らしがわかる本」
稲垣史生「江戸時代大全」
大森洋平「考証要集　秘伝！ＮＨＫ時代考証資料」
人文社「切絵図・現代図で歩く　江戸東京散歩」
立川博章「大江戸鳥瞰図」

柳生宗矩／渡辺一郎「兵法家伝書　付・新陰流兵法目録事」
柳生耕一平厳信「負けない奥義　柳生新陰流宗家が教える最強の心身術」
村山知義「無刀の伝　柳生新陰流極意」
新人物往来社「剣の達人一一一人　データファイル」
人文社「江戸庶民の食風景　江戸の台所」
大野恵造「江戸小唄総覧」
Wikipedia

本書の無断複写・配布は著作権法上での例外を除き禁じられています。

首巻き春貞（くびまはるさだ）　小石川養生所始末（こいしかわようじょうしょしまつ）（決定版）

2017年6月3日　第一刷
2017年7月22日　第二刷
2017年9月14日　第三刷
2017年10月28日　第四刷
2017年12月7日　第五刷
2018年12月26日　第六刷
2020年5月12日　第七刷　（決定版）

著者：松田純一（まつだ　じゅんいち）

http://www.mactechlab.jp

表紙デザイン：Junichi Matsuda